

鎌倉・太平洋戦争の痕跡

鎌倉市中央図書館近代史資料収集室

CPC の会

はじめに

鎌倉に太平洋戦争の痕跡をたずねるといふ活動を始めたのは、平成10年秋のことです。最初に上げた調査項目は(1)米軍の相模湾上陸に備えて造られた鎌倉地域の陣地構築などの痕跡(2)鎌倉市内に建設された戦争慰霊碑——の2項目でした。すでに(2)については平成14年10月に調査を終え、冊子にまとめて図書館で閲覧できるようになっております。(1)の陣地構築の跡を歩く活動は、11人のCPCの会のメンバーの根気と地元で案内して下さった多くの方のご協力に支えられ、これまでの成果をこの冊子にまとめることが出来ました。

他市においては広島・長崎の原爆投下による惨禍はもとより、東京・横浜をはじめ多くの都市の空襲の被害の実態は、これまでに市民の手により記録がまとめられています。60年も前のこととはいえ、今なお世界中に戦火が絶えないことを思うと、戦争の記録を残し平和を守ることの厳しさと大切さを考えずにはいられません。また、年齢を重ねて今だからこそ書き残しておきたいと思う方の絵や文章が、資料館などで展示され反響を呼んでいる例もあります。鎌倉は、大きな空襲にさらされることもなく比較的平和だったというイメージから、当時の記録を市民の手によって記録することが遅れていたように思います。

平成8年8月、市民有志の手で『回想 戦争と鎌倉人』(発行代表 加藤俊作)が出版され当時の戦争体験者の思いが語られ反響を呼びました。それに引き続いて、もっと地元に着した記録を残そうという気持ちから今回の調査活動が始まりました。

手元の活動記録によると、平成10年(1998)12月17日に津西地区から始まった調査は、平成15年(2003)10月16日極楽寺周辺を歩くことで一応終止符を打っています。月に1~2回の行動日をもうけ、あらかじめお願いしてあった地元の方たちにお話を聞きながら現地を案内していただきました。

そのうち陣地構築(横穴陣地)に関するもの31回(約50ヶ所)、軍事施設に関するもの8回、体験談をお聞きすること12回となっております。鎌倉市内全域を歩くことを目標にしておりましたが、情報があるものから順番に手探りで行動したために、最後まで手うすになり今後の課題として残された地域もあります。

国の防衛庁資料室などに全容を記録した便利なものがないかと出かけましたが、地元のローカルなことは地元で調べるしかないといわれてしまいました。

鎌倉の山並みは弧を描いて海に面していますが、細かい血管のように谷の奥に深く入り込んだ谷戸を多く抱えています。この地形を利用して山中のあらゆる所に穴が掘られていたといっても過言ではありません。しかし今回、そのうちの何割を確認できたかはっきりしたことはわかりません。たとえば、海軍の予備学生出身の新米少尉4人が、昭和20年2月鎌倉に派遣されて鎌倉の海を守るための陣地構築を

まかされました。彼らが計画した陣地が小坪、材木座、名越、佐助、長谷、稲村ガ崎の6ヶ所あったといひます。このうち今も穴の入り口がそのまま残っているのは名越だけでした。それも人家の裏山なのでむやみに入ることはできません。その他は近くまでは行けますが、コンクリートなどで塞がれてかすかにアーチ型をした入り口の痕跡が見えるだけです。穴の存在を確認できないことも多々ありました。

このように海に向けた銃眼や砲台ばかりでなく内陸部の谷戸の奥にもたくさんの穴が掘られています。たとえば、津西、御所ヶ谷、笛田夫婦池周辺、関谷インター付近、玉縄城周辺、北鎌倉駅付近、岩瀬砂押橋周辺など東京へ向かって進行する米軍迎撃を想定して陣地が作られたと思われまひます。また武器弾薬の備蓄倉庫としての穴、横須賀海艦政本部が疎開事務所に使った大規模な穴、連絡通路としての穴も多数あったようです。

60年の時を経て宅地造成などが進み、山が削られ、穴そのものが無くなってきていますが、まだひっそりと谷の奥や人家の裏に、風化しながら残っているものもあります。今となつては全容をつかむことは非常に難しく、人々の記憶を頼りに記録を集めていくしか方法がないというのが実情です。当時穴を掘っていた方が数人私たちを訪ねて来られ、現地をご案内しましたが周りの風景のあまりの変貌にご自分の記憶を呼び戻すことができずがっかりされる一コマもありました。

昭和20年当時、市内の寺や学校、民家に駐屯しながら毎日どこか山中の現場へ出かけていった兵隊の姿を町の人ひは遠くから見ていました。彼らは空腹を抱え、満足な道具もなく哀れな姿だったとお年寄りの口から話されています。

大まかには陸軍が稲村ヶ崎以西の海岸部、鎌倉山、深沢地区、玉縄地区を担当し、海軍が由比ガ浜以東、北鎌倉、大船駅周辺、岩瀬地区などを担当していたようですが、はっきりした分担区域はわかりません。極楽寺坂は海軍が、極楽寺裏山は陸軍が担当していたようなこともあります。

私たちは残っている穴をのぞき天井の鑿やつるはしの痕を見ながら、この穴から銃火器が火を噴くことなく砂浜で自爆する兵隊がいなかったことに安堵する一方、鎌倉の町が戦争の惨劇と隣りあわせであったことを思わざるを得ませんでした。

次に戦時中に作られた軍事施設のあとをいくつか歩いてみました。山崎にあった富士飛行機、深沢にあった横須賀海軍工廠深沢分工場、そして玉縄植木にあった捕虜収容所です。それぞれ当時その中で働いたり学んだりしていた人、学徒勤労動員で来ていた人、近辺で様子を見聞きしていた人などにお話を聞き、旧制中学の同窓会誌や『国鉄大船工場三十年史』などの資料も使ってまとめました。

山あいの村に、ある日突然作られる塀、先祖伝来の土地の接収など当時の光景を覚えていらっしやる方がいました。

また軍事施設は空爆のターゲットになるものですが、昭和20年2月、藤沢・大船方面の上空から米軍が撮影した航空写真のタイトルは「FUJI AIRCRAFT

OFUNA」となっていました。

このような調査をしているうちに自然に集まってきたのがⅢの体験談です。現地を案内していただいた人の子供時代の生活、大人の様子、勤労働員先でのできごと、戦後の進駐軍の米兵とのやり取りなど次々とお聞きすることができました。なかには、十二所地区の水田に落ちてきた焼夷弾を一本一本抜き出して大人たちと運んだときの様子が語られて鎌倉では貴重な話といえそうです。しかし、体験談はまだ取りかかったばかりで女性達の様子などもっと生活に根ざした話を集めていかなければなりません。

このようにまだまだ表面をなでただけの調査活動ですが、平成15年(2003)8月29日～9月4日、中間報告として鎌倉駅の地下道ギャラリーで展示を試みました。その反響の大きさには驚くばかりでした。通りがかりの人は立ち止まり、いつも人だかりがしていました。朝日新聞の新任の若い記者が興味を持ち写真入で大きく取り上げたせいか、展示期間中の図書館では電話の問い合わせに追われましたが貴重な情報も寄せられました。

また小・中・高校の先生方が教材として興味を持たれ、市内の社会科の先生の集まりに招かれ、展示とお話をさせていただくこともできました。子供達に歴史を伝えていくための材料になればこの上ないことだと思っています。

CPCの会の方達は旧制中学学生として、また若い将校として戦時中の体験を持っていますので熱意を持って事実を伝えようとしております。何よりも地元の方達のご厚意に支えられながら、時間がかかりましたがここまでくることができたことを心から感謝いたします。

平成16年3月 鎌倉市中央図書館近代史資料収集室

平田恵美

CPC の会

代表 曾根一郎

「湘南鎌倉生涯現役の会」のなかに、分科会として「CPC の会」というサークルがあります。

これは従来の趣味の写真から一步踏み出し、写真 (Photograph) の記録性を活用し、地域社会 (Community) に文化的貢献 (Contribution) をしようとするものであり、会の名称は、この三つの言葉の頭文字から取りました。初代の山本代表は、活動先を求めて、鎌倉市立中央図書館「近代史資料収集室」の平田さんに接触し、図書館を利用させてもらい、指導と協力をお願いすることになったのが、平成6年のことでした。4年かけて「鎌倉の今昔<写真に見る史跡碑とその周辺>」と題する作業に取り組み、アルバム4冊分を完成させました。市内83ヶ所に点在する史跡碑と取り組む過程で、鎌倉のあちこちに太平洋戦争関連の痕跡があることに気づくようになりました。

鎌倉は、空襲の被害から免れたこともあって、戦後も平和都市というふれこみで推移し、太平洋戦争の痕跡を追及するような動きはあまりありませんでした。近隣の都市、横浜、藤沢、茅ヶ崎などに比べても、戦争中のことを記した記録や資料は格段に劣ります。しかし、鎌倉は湘南海岸で唯一山坂の多い地形であることから、ここを陣地にして抵抗戦線を張っていたと容易に想像されます。鎌倉にも戦争関連の記録がもっとあっていいと考えました。作業の途中で鎌倉は米軍の都市空襲目標第124番に上げられていることも知りました。「鎌倉には中世史があって現代史がない」といわれる所以です。CPC の会では史跡碑を完成させた余力をかって、総勢8人 (当時) でこの空白の部分に迫ってみようと平成11年に手をつけた次第です

作業の取っ掛かりとして、戦時中、兵隊さんに興味をもっていた当時の小学生の人や、捕虜収容所の近くに住まいのあった人に接触したところ、当事者でないと語れないような話が聞けました。しかも、これら語りべは、自ら後世のために経験談として残したいとの希望を強くもっておられることもわかりました。折衝の範囲が広がるにつれ、鎌倉も当時の生活が、軍と戦争によって影響され制約されている一方で、軍は谷戸のいたるところに地下壕を掘っており、軍事施設の充実、市民の動員を強化していたなどの情報が増えていきました。さらには、穴掘りに従事した地方出身の兵隊さんや、それを指揮していた将校の人にも接触ができました。陸軍に加えて海軍に従事されていた人からも情報を得ることができました。

3年目くらいの時点であじさいで有名な「成就院」の住職を訪問した際に、住職から「あなたがたのやっていることは『吾妻鏡』を書いた人と同じことをしておられる、この作者が書き残しておいてくれたおかげでわれわれは当時の歴史を知ることができる」とうれしいお話をもらいました。

ただ当時の鎌倉のことを知る人は限られています。終戦当時10才くらい未満の人は別として、20才以上の人は、軍務や徴用に動員されて鎌倉での生活から離れられてい

ます。自然当時の小学校高学年か中学生（当時は5年制）に限られました。戦争が終わって来年は60年になります。これらの方も現在すでに70～75才前後になっておられます。語りべも記録するわれわれも加齢が進み、現在が証言をしていただくギリギリのところに来ているように思います。

今のうちに、太平洋戦争の痕跡を記録して後世に残すことがわれわれの責務と感じるようになり、本記録集を完成させたことで、少しは空白の歴史の穴埋めをしたかと自負しております。鎌倉にも、ここに住んでいた人、一人一人の戦争体験があります。この記録集を見て新しい体験談が日の目をみることを期待しております。

現在のCPCのメンバーは下記の11名です。

植月浩視・小林英一・小林光男・酒井富美雄・曾根一郎・都築源二
西原六郎・野村志朗・水谷耕一郎・山本光男・油谷次郎

平成16年3月

CPCのメンバーと平田さんを囲んで



後列左から 油谷・西原・野村・小林（光）酒井・水谷
前列左から 都築・平田・曾根・植月・山本・小林（英）

ご協力をいただいた方々

(五十音順 敬称略)

青木みつ	秋山慎三	朝比奈宗泉	網野 甫	荒井 昇
石井 博	石井道喜	稲垣颯之介	今吉海秀	岩沢文一
岩沢幸久	江波戸靖二	大木泰次郎	大里蔵之助	大野昭諭
小川英次	柏木巖夫	加藤俊作	金井 茂	金子富雄
河村貞子	木村マサ	小泉園	郷原久二男	五木田孝次
小坂勝代	後藤鉄男	小森武三郎	坂倉孝一	桜井 修
佐々木淑子	佐野光子	島村皓一郎	清水辰男	霜田繁男
関崎時朗	芹沢良治	代田良春	神宮角太郎	清田昌弘
高橋二郎	立川 実	舘 泰生	田所泰男	田中密隆
田中八郎	徳増島雄	泊川勝次	仲 清	長島富男
中野栄三	西山利彦	花井 実	原 照雄	平井 勇
広瀬 修	細井 務	細谷喜平	村田良二	八重田和久
坂 文子	八木直生	吉澤静夫	六本木弥太郎	

大成建設工事現場職員

鎌倉山町内会有志

JR 東日本旅客鉄道（株）鎌倉総合車両所

深沢クリーンセンター



鎌倉

太平洋戦争の痕跡

参考図

施設名	頁
① 横穴陣地—神明谷戸	13
② 師団司令部	13
③ 横穴陣地—御所谷	14
④ 横穴陣地—猫池付近	14
⑤ 横穴陣地—広町	17
⑥ 横穴陣地—小泉園	19
⑦ 横穴陣地—平井園奥	19
⑧ 横穴陣地—モノレール下	19
⑨ 横穴陣地—玉縄五丁目	19
⑩ 横穴陣地—長尾台側	19
⑪ 横穴陣地—関谷	19
⑫ 銃眼—関谷インター近く	20
⑬ 見張り台—城廻	20
⑭ 横穴陣地—七曲りマンション裏	23
⑮ 横穴陣地—七曲り下	23
⑯ 海軍艦政本部—神明神社横	25
⑰ 海軍艦政本部—岡本	25
⑱ 横穴陣地—長勝寺近く	28
⑲ 横穴陣地—好々洞	33
⑳ 横穴陣地—北鎌倉駅近く	33
㉑ 横穴陣地—雲頂庵下	33
㉒ 横穴陣地—明月院手前	33
㉓ 横穴陣地—明月院内	33
㉔ 横穴陣地—浄智寺内	33
㉕ 横穴陣地—大長寺	38
㉖ 横穴陣地—今泉	38
㉗ 横穴陣地—極楽寺馬場ヶ谷	40
㉘ 横穴陣地—極楽寺裏	42
㉙ 横穴陣地—極楽寺坂	42, 46, 186
㉚ 横穴陣地—坂ノ下	42, 46
㉛ 横穴陣地—稻村ガ崎切通し	43
㉜ 横穴陣地—稻村ガ崎海側	43
㉝ 横穴陣地—夫婦池周辺	49, 52
㉞ 弾薬庫—おぼけトンネル	56
㉟ 連隊本部	58
㊱ 横穴陣地—安養院裏山	66
㊲ 横穴陣地—五所神社裏	66
㊳ 富士飛行機	73, 75, 79
㊴ 高射砲陣地—山崎	77
㊵ 海軍工廠深沢分工場	85, 88
㊶ 海軍工廠梶原疎開工場	89
㊷ 海軍工廠苗田疎開工場	90
㊸ 村岡工員宿舎	91
㊹ 大船捕虜収容所	99, 112
㊺ 軍事教育経験—鎌倉第一国民学校	120
㊻ 監視小屋	122
㊼ 由比ガ浜地区の防空壕	126
㊽ 海軍艦政本部—鎌倉学園	130
㊾ 軍事教育経験—御成小学校	139
㊿ 軍需物資貯蔵庫	142
1 焼夷弾落下地域	145
2 建物強制疎開—村木座本通り	153
3 横穴陣地—光明寺裏山	154
4 海軍刀鍛錬所	154
5 横穴陣地—小平	156
6 弾薬保管倉庫の横穴—竜口寺	171
7 横穴陣地—法源寺の近く	172
8 横穴陣地—満福寺の近く	172

目 次

はじめに 鎌倉市中央図書館近代史資料収集室 平田恵美
CPC の会 CPC 代表 曾根一郎
ご協力いただいた方々

鎌倉・太平洋戦争の痕跡の分布図

I. 陣地構築

1	津西の陣地跡をみる	島村皓一郎さん	1 3
2	広町を歩く	河村貞子さん	1 7
3	玉縄地区探索 (1) 小泉園など	小泉園のおばあちゃん、細谷喜平さん 霜田繁男さん、石井博さん	1 9
4	玉縄 (植木) 地区探索 (2) 七曲りなど	霜田繁男さん、小坂勝代さん	2 3
5	玉縄 (岡本) 地区探索 (3) 岡本・大船観音裏側など	霜田繁男さん、柏木巖夫さん 稲垣顕之介さん	2 5
6	名越にも穴があった	大野昭諭さん	2 8
7	山ノ内に穴を見る	荒井昇さん	3 3
8	岩瀬・今泉地区の陣地構築の跡を探訪	清水辰男さん	3 8
9	極楽寺地地区の横穴を見る (1)	岩沢文一さん	4 0
1 0	極楽寺地地区の横穴を見る (2)		4 2
	極楽寺住職と会談	極楽寺住職 田中蜜隆さん	
1 1	極楽寺地地区の横穴を見る (3)		4 6
	成就院住職と会談	成就院住職 原照雄さん	
1 2	鎌倉山に戦跡を訪ねる (1)	郷原久二男さん	4 8
1 3	鎌倉山に戦跡を訪ねる (2)	鎌倉山町内会有志	5 2
1 4	おばけトンネル	神宮角太郎さん、関崎時朗さん	5 6
1 5	海軍による鎌倉防備計画		6 3
		加藤俊作さん、坂倉孝一さん	
1 6	海軍の陣地構築の跡を検証		6 6
		加藤俊作さん、坂倉孝一さん	

II. 軍関係施設

1	鎌倉で海軍の練習機を作っていた富士飛行機 (1)		7 3
		西山利彦さん	

2	鎌倉で海軍の練習機を製造していた富士飛行機（2） 小川英次さん	7 5
3	鎌倉で海軍の練習機を作っていた富士飛行機（3） 後藤鉄男さん、八重田和久さん、舘泰夫さん 金子富男さん、清田昌弘さん	7 9
4	横須賀海軍工廠深沢分工場（1）	石井道喜さん 8 5
5	横須賀海軍工廠深沢分工場（2）	水谷耕一郎さん 8 8
6	寺分の横穴を見る	木村マスさん 9 8
7	大船捕虜収容所（1） 青木みつさん、田所泰男さん、田中八郎さん	9 9
8	大船捕虜収容所（2） 現地探訪 田中八郎さん、青木みつさん	1 1 2

Ⅲ. 体験談

1	小学校6年生が見た終戦前後の鎌倉	芹沢良治さん 1 1 9
2	芹沢さんと現地探訪	芹沢良治さん 1 2 5
3	中学1年生の見た鎌倉の終戦前後	酒井富美雄さん 1 2 9
4	中学1年生の戦中・戦後鎌倉の回想記	吉沢静夫さん 1 3 9
5	土地っ子の戦時体験（1） （迎撃用陣地構築と徴兵検査）	大木泰次郎さん 1 4 3
6	土地っ子の戦時体験（2） （勤労働員と兵隊さんとの思い出および空襲）	金井茂さん 1 4 5
7	戦争少年の思い出	八木直生さん 1 4 7
8	戦争の傷跡をたずねて……材木座から小坪へ 小森武三郎さん	1 5 3
9	小坪の二門の砲台と戦後の小坪について 高橋二郎さん	1 5 6
1 0	100・90才の御婦人、戦前・戦後の鎌倉海軍村を語る 坂文子さん、佐々木淑子さん	1 6 4
1 1	鎌倉で陣地構築に従事した兵隊さん	仲 清さん 1 6 7
1 2	仲清氏の陣地構築の跡を探訪	仲 清さん 1 7 1
1 3	私の戦争体験（1）	泊川勝次さん 1 7 6
1 4	私の戦争体験（2）	広瀬 修さん 1 8 1
1 5	広瀬修氏・花井実氏を迎えて、戦争体験を聞く	1 8 5
1 6	終戦前後の思い出（手記）	芹沢良治さん 1 9 0
1 7	鎌倉の陣地構築に従事した一兵士の回顧録	仲 清さん

I 陣地構築

津西の陣地跡を見る

平成10年12月14日

案内人 島村皓一郎さん

1. 神明谷戸しんめいやと

腰越の海に注いでいる神戸川こうどがわを鎌倉山に向かってさかのぼると左右の山壁がだんだんと迫ってくる。山壁といっても最近では住宅が頂上まで建ち並び昔の面影はない。ところが県道のバス停「白山橋」あたりで西側を振り向くと、川の上に覆いかぶさるようにタブや榎の大木が茂り、風情のある小さな谷戸が見える。神明谷戸といわれる。

2. 陣地の跡に登る

入口にお住まいの島村氏に谷戸の中を案内していただいた。お話では谷戸の左右に合計4ヶ所陣地の穴が掘られていたようである。現在そのほとんどが、急傾斜地工事によって塞がれているが島村氏は子供のときに中を探検されたようで、穴の進み具合や曲がり具合をさらさらと地図に描いてくださった。入口から入ると2度3度とほぼ直角に曲がり、出口まで貫通していたようである。今はその穴の上から少しそれた所に大きな住宅地が出来ている。

1ヶ所だけ、入口は水浸しで入れなかったが、少し離れた崖の中腹に出口の穴が開いていると言うので、軽々と登っていく島村さんの後をついてよじ登ってみた。そこには人が腹這いで入れるぐらいの穴（銃眼）がぽっかり開いていて、県道の方が見下ろせた。海の方から進入してくるアメリカ兵をここから撃つための陣地だったのである。谷戸の奥にあった穴には弾薬などを置いてあったのだろうか。

当時を想像しながら、しばし穴の前の木に寄りかかって雑談していたが、降りるときには急勾配に恐怖を覚え、やっとのことで地上に着くことが出来た。今はここに入ることはできない。

昭和20年当時、この陣地を構築するために付近の農家に50人ほどの陸軍の兵隊が分宿していたということである。空腹を抱えて、川の水で飯ごうを洗いながら残り飯を食べていた若い兵士の姿が哀れで、ジャガイモやとうもろこしを持って行ってやったと当時を知るお年寄りが話しておられた。

私たちがこの地域で見聞きしたのはこれだけであるが、元教師の井上六郎氏によって次のような記録が残されているので紹介させていただこう。

井上六郎『時のながれ 津村のながれ』より抜粋

日本最大最強の地下要塞津村

・・・アメリカ軍が日本本土を攻めてくる。・・・この津村片瀬の山々を利用して東京を守るための地下要塞を作るため、第一師団が送り込まれました。 師団司令部

は片瀬の湘南白百合高等女学校と聞いています。

朝、昼、晩疲れ切った兵隊さんが村の道を隊長に連れられて15～16人位のグループで歩いていました。この工事は軍の秘密ですから村の人には一切わかりませんでした。

私も戦後、御所谷の奥で入り口を見つけました。ほんの小さなくぼみに、人がやっと入れる位の穴がありました。西鎌倉の東側が宅地造成されましたとき頂上から10～15メートル下の崖の上の方に、人が立ってやっと歩ける程のトンネルが2個見られました。せまいトンネルの中で、つるはしとのみ、スコップ、もっこだけで硬い岩を中腰で掘り進むのです。疲れるのはあたりまえです。

北谷、さんざい、今の手広中学の近所などいたるところに陣地は作られたようです。手広中学近所には横須賀の海軍基地からとてつもない大きな要塞砲が運びこまれたとのこと。私が兵隊から還って来たとき、今の西鎌倉駐在所から100メートルくらい行った片瀬寄りのところには、陸軍の大きな大砲15～16門が京浜急行の道路に並んでいました。西鎌倉駅の東、橋を渡った所の崖下には、機関銃座の小さい四角の穴が、西鎌倉駅の方を向いて黒い穴をあけていました。

後立^{うしろだて}の田んぼには爆弾が落ち、柔らかい土のため、ある程度の穴をあけ爆発はしませんでした。今このところは石垣が築かれ、家が建っています。

今の西鎌倉・南鎌倉・新鎌倉山は、日本で最強最大といわれた地下要塞陣地の上に住宅が建っているのです。平和に見えるこの地区の下には46年前の戦争がそのまま残っているのです。第二次世界大戦は遠い昔のことではありません。

七里ガ浜の江ノ電鎌倉高校前と七里ガ浜駅の間丘上には4基の高射砲が大きなコンクリート作りの台座の上にあります。昭和20年になりますと敵の戦闘機がすぐ目の前の青い七里ヶ浜の海上、高射砲陣地をバカにするように高く低くおどるように飛んでいました。8月10日ごろ、高松宮殿下が視察に来ました。・・・

井上氏の記録も今となつては確かめることが難しいが、貴重な証言である。龍口寺裏山の陣地を案内していただいた腰越在住の細井務氏（P172参照）も「猫池のあたりにも穴があったが今は無くなっている。」と言われていたので、腰越津村の谷戸の左右の山には多くの陣地の痕跡があったのであろう。

写真 (A)

島村氏は谷戸のなかに掘られた、戦時中の洞窟の地図を書いてくれた。
子供の時に探索したので、
今でも記憶に残っている。



写真 (B)

島村家の奥は、神明谷戸
この谷の左右に軍隊が穴を
掘った。



写真 (C)

穴の中から入口を見る。



写真 (D)

洞窟の入口



写真 (E)

銃口

急勾配の崖を登ると朽葉に埋もれた銃眼が見える。

入口は崖の右下後方にあり水がたまっていた。



写真 (F)

広町を歩く

平成11年3月30日

案内人 河村貞子さん

鎌倉に残された三大緑地のひとつ広町の保存運動が盛り上がり、久しい平成11年3月、自然を守る運動を続けてこられた河村貞子さんに案内されて一日広町を歩いた。

新鎌倉山住宅地側の広町入り口には緑色に塗られた広町の地図が立っていた。そこに集まった一行は山際の湿地帯を歩いて行き、小川のせせらぎに沿って歩きながら、そこに建てられた小さな道案内板に、保存運動をしている人々の熱意を感じた。急な山道には登りやすいようにロープが張ってあったが、案内人の河村さんはさらに必要なところにロープを補充しながら身軽に歩いていった。最初によじ登った所は「石切り場跡」であった。その高みから北の方に「播亭」などのある鎌倉山の住宅地が見えた。

1. 旧海軍の洞穴

今回の目的は広町の中にある戦時中の陣地を見ることだったので、そこから北側の湿地帯に降り、源流から流れてくる水を渡りながら、奥まったところにある「旧海軍の洞穴」といわれる場所にたどり着いた。ちょうど「播亭」の下の谷底に位置していた。横穴が黒く開いていたが、水が溜まっていて中のようにすはよくわからなかった。どこまで達しているかわからないが、後で地図を見てみると七里ガ浜の方向に向いて掘られているようであった。

また山道を引き返して、尾根をしばらく歩いて広町のシンボルともいえる山桜の巨樹の下に到着した。たくさん太い枝が分かれた見事な桜の巨木だった。その前で記念撮影をして、桜の時期には是非来たいものだと思った。

2. 旧海軍防衛地

そこからまた引き返して、少し稲村ガ崎方向に山道を歩くと、山の上とはいえ近くに住宅もあったがその辺りの平坦な場所が「旧海軍防衛地」といわれていた。ここに小さな建物を造って兵士たちが駐屯していたらしい。聞き取りが不十分であいまいなことしかわからないのが現状である。

進行方向の左下に七里ガ浜浄化センターの煙突を見ながら竹やぶをかき分けて、「鎌倉の尾瀬コース」という細い湿地帯に降り、出発点の看板の所に帰ってきた。現在広町は市民の運動がみのり、鎌倉市の買取保存が決まり（平成14年10月）、大きな転機を迎えている。

写真 (A)

新鎌倉山住宅側の広町入り口に集合。保存活動グループが案内板を建てている。



写真 (B)

入り口からほどなく湿地帯に入る。



写真 (C)

「旧海軍の洞穴」といわれる穴

「播亭」の下の谷底に位置し、穴は七里ガ浜方向を向いているようである。



玉縄地区・現地探索（１）

平成11年11月18日

語り手 小泉園のおばあちゃん 細谷喜平さん
案内人 霜田繁男さん 石井 博さん

1. 小泉園付近

小泉植木園 80才半ばのおばあちゃんのお話を聞く。

この家は戦争末期、地域部隊の首脳部の宿舎となり、隊長滝島中尉、副隊長三好少尉の二人が起居していた。毎朝、隊員を集めて、下命が行われた。小泉家のすぐ裏山には、隣の谷戸（洗馬ヶ谷）に通じるトンネルがあったが、これは玉縄城守護の時代に掘られたともいわれている。兵隊たちは、この地域を墓場と観念させられ、終日付近の穴掘りに専念していたという。

2. 平井園の奥

霜田さんの案内で、平井園の奥の道に入る。このあたりは桐ヶ谷戸といわれ、行き止まりに池があり、小泉徳吉家のビニールハウスが見える。小泉家の裏山から平井園に通ずる穴が掘られた旨の説明を受ける。ここは、清泉女学院の西北の山裾にあたる谷戸である。

3. 海軍の壕跡と長尾城址

すこし離れて、海軍によって掘られた南北縦長の壕跡へ行く。この壕は丁度、運休中のドリームランド・モノレールに沿った形で、玉縄5丁目から柏尾川のそばまで通じていて、地図上で直線約700メートルに及ぶ。霜田さんによって、穴の入り口（3ヶ所）を確認する。

このモノレールの線から東は、行政区画上は横浜市栄区に帰属する。

ここに長尾城の跡地を見学する。鎌倉市と違って、土地に余裕のあるせいか、開発の手から免れている。

4. 大船観音の山裾

大船観音のある山の北西側の山裾（長尾台町）にいくつかの穴の入り口を確認する。大きな穴の入口には土嚢が積み上げられていた。この中は、八畳敷くらいの複数の部屋に通じており、霜田氏自身、戦後内部へはいった経験があった。

5. 細谷邸の裏山

細谷喜平氏宅を訪問、同氏裏山に戦時中掘られた壕（複数）の穴を確認する。一つは隣の洗馬谷戸に通じている。細谷氏自身は、終戦の直前は軍務についていて、自宅

周辺の軍隊行動は関知していない。同氏は県会議員をつとめた。

6. 関谷インター近くに銃眼

細谷邸を出て川沿いの道を関谷インターまで歩き、左手の山を振り返ると山の中腹にポツカリとあいている穴が見える。手前の山の途中から穴を貫通させて作った銃眼である。実際はこの山は前面が削られているので、この穴は銃眼の先端より中に入った位置にある。横浜方面に向かう敵を撃つためのものか。

7. 城廻配水池付近と清兵衛山あと

石井博さんの案内で、同氏旧宅の付近を検証する。先ず城廻配水池付近の高台へ行くと、江ノ島まで見通せる。ついで見張り台のあった清兵衛山あとなどを確認。石井旧邸は現在は幼稚園（鎌倉しろやま幼稚園）になっている。

写真 (A)

小泉園の裏山

竹ざおで指しているところが穴で、玉縄城守護の時代に掘られたといわれるトンネルが洗馬ヶ谷に通じていたという。



写真 (B)

ドリームランドモノレールガード下の入口

金網を通して穴の入口がうかがえる。現在のモノレールに沿った山の尾根の下を玉縄五丁目台まで (写真C) 穴が続いていた。その途中に支道が何本か掘られていたというようである。



写真 (C)

モノレールの下を通る横穴の入口 (出口)

玉縄五丁目。この穴は柏尾川のそばまで通じているとのこと。



写真 (D)

大船観音の山裾 長尾台側

山裾にはいくつかの穴の入口があり、中は八畳敷くらいの複数の部屋に通じていたという。

海軍の地下事務所が予定されていたといわれている。



写真 (E)

細谷邸の裏山

戦時中に掘られた壕が複数あり、庭の奥の壕の中は歩けるほどの状態であった。

この壕の中はトンネルで玉縄城（小泉園の裏山）に通じていた。



写真 (F)

関谷インター近くに見える銃眼



玉縄（植木）地区・現地探索（2）

平成11年12月27日

案内人 霜田繁男さん 小坂勝代さん

1. 七曲のマンション付近

植木の七曲り下にある小坂邸に至り、夫人の案内で、大成建設のマンション建設現場の横の道（玉縄城へぬける通称「七曲り」）を上る。

大成建設からも案内が二人来て説明。この道と建設現場を遮る山のコブに、陸軍の掘った壕があり、入り口が確認された。

2. マンション裏山

建設現場になっている広場にヘルメットを被って入り、山の傾斜地を切り崩して援壁でカバーされた部分を見る。ここは上記の壕の出口の部分に当たり、今は壁で覆われて見えない。マンションは10階建て168邸を有する巨大なものとなる予定。

3. 小坂邸裏山

小坂夫人の招きで邸内を案内され、庭先から裏山へ掘られた壕の中に入れてもらう。壕の大きさは、大人一人が立って歩けるくらいで、幅1メートル、高さ2メートルぐらい。中は乾燥していて、ジメジメした感じはなく、路面はほぼ水平で歩きよい。霜田さんのカンテラを先頭に奥へ進む。途中で二股に岐れ、いずれの道も突き当たりとなり、長い方で100メートルぐらい。中は空気が暖かい。昨年以来の壕探訪で中を見たのはこれが初めてである。

写真 (A)

七曲のマンション付近

玉縄城へ抜ける七曲を上
がった山の途中で陸軍が
掘ったといわれる壕の入
口があった。



写真 (B)

マンションの建設現場裏山に 掘られていた壕の内部

大成建設の現場で撮影さ
れた作業員のめずらしい
重装備姿。
天井の高さが容易に想像で
きる。



写真 (C)

建設中の10階建て マンション

この岩肌には壕が通じていた
が、今は埋め立てられてし
まい、コンクリートで嚴重
に固められている。



玉縄（岡本）地区・現地探索（3）

平成12年1月20日

案内人 霜田繁男さん

柏木巖夫さん

稲垣顕之介さん

1. 壕の探訪

壕の探訪は昨年11月18日、霜田さんによって現場に案内されたことのある岡本地区に移動。岡本2丁目の柏木巖夫氏を訪問、同氏の説明を受け、神明神社近くの壕の入り口に案内してもらおう。コンクリートのかけらや、レンガで塞がれ平常は入れないようになっている。この日は大部片付けられているとはいえ、身体を振って這うようなカタチで足から押し込まないと入れない。幅3～4メートルはある蒲鉾型で、床には写真のように埋め戻しの土とジャンクが積み上げてあるため足場は悪く、天井は低く、まともに歩けない。霜田さんのカンテラを先頭に、各自のトーチで足下を照らして進む。入り口から引いた距離テープが53メートルになったところで行き止まりとなる。壕の奥に住んでいたと思われるハクビシンの番（2匹）が、目を光らせて入り口の方へ駆けて行く。壕の中は乾燥していて、地下水が垂れることはない。天井は写真で見る如くである。

ここは横須賀海軍艦政本部事務所の一部が引っ越してきて地下艦政本部事務所にした所だったと聞いている。ここはほとんど使われないうちに終戦になったらしい。

2. 大船観音の山裾

帰路、この現場から100メートルくらい離れた玉縄2丁目の稲垣顕之介氏宅訪問、同氏宅前の山に掘られた壕の入り口を見せてもらおう。今はコンクリートブロックで塞がれている。

ここは横須賀海軍艦政本部事務所の一部が引っ越してきて艦政本部事務所になった所で、稲垣さんによれば「蒸し暑い穴の中から 昼休みになると事務員などが走って出てきていた」という。

この山は大船観音の立っている山続きで、側面の山裾に当たる。

写真 (A)

岡本の壕の全容

入口付近、入ったときは先が暗くて奥深く感じられ、何となく不安であった。



写真 (B)

壕の中央部

中は天井も高く、横幅も相当広く、やはり艦政本部事務所があったことが想像できる。

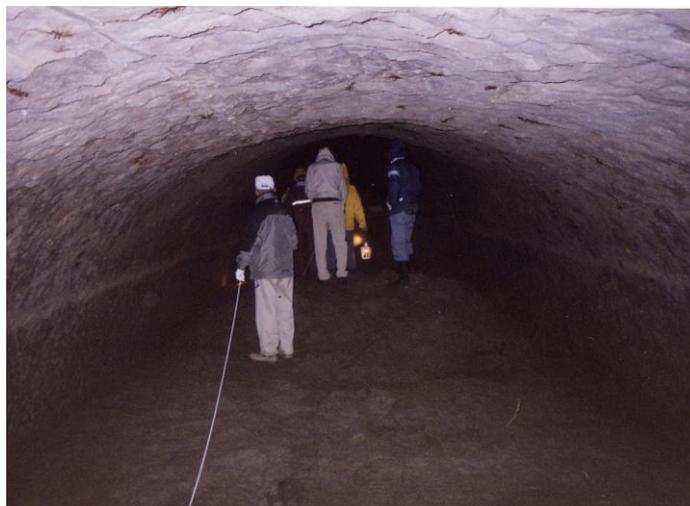


写真 (C)

壕の奥

突然の闖入者に驚いた動物が、不気味に眼を光らせていたが、ついに逃げ出した。丸々太ったハクビシンのツガイだった。



写真 (D)

横須賀海軍艦政本部事務所跡

大船観音の側面の山裾に大きく入口があいていたが、今はコンクリートブロックで閉じられている。



写真 (E)

写真 (F)

名越にも穴があった

平成13年12月13日

語り手 大野昭諭さん

「名越の我が家の近くの山は穴だらけであった。」JR名越隧道の近く長勝寺のそばにお住まいの大野昭諭さんに、戦争末期の状況についてお話しを聞く機会を得た。

1. 軍隊の掘った穴

私は昭和7年生まれ、終戦の時は中学校の1年生であった。家は長勝寺の正門から少し隧道よりのところにあった。家の前から南方向の山にむかって「老人福祉やすらぎセンター」に通じる道がある。この道の左の崖に今でもたくさんの穴が見える。穴の殆どは入り口が塞いであるのでうっかりすると通り過ぎてしまう。その一番手前の穴は軍隊の掘ったもので、入り口の幅は見たところ4～5メートルはある。大砲を据え付けるための穴であったようである。穴は相模湾に向ってななめに角度をつけて掘ってある。目の前の山の上を越えて材木座海岸に着弾するように設計されている。敵が材木座海岸から上陸を企てた場合、打ち込める隠れ砲台という使命であったと思われる。

軍隊の掘った穴はもう少し坂を上った所にも2つあり、合計3つある。兵隊は当時何処に寝泊まりしていたのか分からなかったが、終戦になるまで作業をしていたことは確かである。終戦の日にウチの庭で20名くらいの兵隊が、直立不動の姿勢で天皇陛下の玉音放送を聞いていた姿をこの目でみている。

2. 民間人が掘った防空壕

軍隊の穴とは別に、小さい穴が8つある。これは土地の民間人が掘った防空壕の穴であって、穴の中には6畳くらいの部屋が4つある。この8つの穴はその出入口である。戦争中、この防空壕にはしばしば逃げ込んだ。特に、3月10日の東京大空襲の日や、5月末の横浜空襲の時などは、味方の高射砲の破片が落ちてくるので、外にいと危険であった。(防空壕には滅多に入らなかったと言う十二所の住民とは対照的である。土地によって空襲に対する受け止め方が違っていたようである。)穴は素掘りで、つるはしで掘っていた。つるはしで削れる程度の堅さの岩である。われわれは「ドタン」と呼んでいた。掘ったあと、コンクリートは使っていない。

このやすらぎセンターへの道は、当時は道幅が狭くて車は通っておらず、春ともなると桜並木が美しく、この近くでは桜の名所として知られており、ごぞをもって桜見物に来る人が多かった。

3. 乗馬クラブ

この坂道の山へむけて上がる途中、右の下に馬場があって、乗馬クラブとなっていた。クラブのオーナーは知らないが、細川護熙元首相の父君がメンバーでよくきておられた。私の父は当時長勝寺からここの借地権をもらっていたので、クラブに貸していた。父は第一次世界大戦に中国に出兵していた軍人で、馬を愛用してこの乗馬クラブにも一頭持って乗っていた。しかし、戦争が激しくなると馬も徴用されたので、乗馬クラブも寂れてしまった。このあたりは別荘地帯で、東京から利用にこられる方が多かったが、中には戦災で東京の家が焼けたために、ここに住み着いた人もおられる。

4. 海軍の双発の飛行艇の墜落

戦争中の記憶として残っていることの1つに、海軍の飛行艇の墜落事故がある。これは、昭和18年の節分の日の朝のことであるが、シンガポールに向かう2機の飛行艇のうち、1機が濃霧のため、鎌倉の北の山の松の木に激突し、一旦上昇したのち墜落炎上して、海軍の将校が30余名、即死した事故である。落ちた場所は、JR線の名越トンネルの200メートルばかり北側の山間で、たまたま畑のまんなかであったので、住民を巻き添えにする惨事は免れることができた。現在、その土地は谷間が切り開かれ住宅地となっている。(これは当時近くに住んでいた酒井富美雄さんの証言とも一致する。その時酒井さんは、新聞配りの作業のため町内の世話人の家にいた時、ものすごい音がして惨事を知った。霧の深い朝のことであった。)

5. 中学での勤労働員

当時、われわれは中学に入って英語を習い始めたが、すぐ勤労働員で農家に手伝いに行かされ、じゃがいも掘りや麦刈りを手伝った。上級生は鉢巻きを締めて工場へ動員された。7月からは辻堂の海岸での塹壕掘りに回され、松の木の皮剥きをさせられた。家から鎌を持って行って作業した。兵隊の切り倒した木を生徒が皮剥きをする。この丸太は穴の内部の補強のための枠組みに使われた。昭和20年の7月から8月にかけての酷暑の中で級友たちと作業に取り組んだことが今でも記憶に残っている。現在、玉縄の歴史の会で活躍している山田三郎君とは同じクラスで「さぶちゃん」と渾名で呼んで親しくしていた。この作業中終戦を迎えた。

6. 東京空襲

東京空襲の時には、ここ鎌倉北側の山の上まで空が真っ赤になった。探照灯が追っかけてB29に合わせる。一機被弾して墜落して行くのが見えた。翌日聞いたところ七里が浜沖に落ちたということであった。

7. 横浜空襲

横浜空襲の時はすごかった。鎌倉の上空を通過したので、高射砲が激しく打ち上げられ破片がバラバラと落ちた。頭に当たったら即死したであろう。東京の時は高度高くはいつてきて一気に降下したが、横浜の時は高度が3,000メートルくらいであったと思われる。B29の編隊が上空を通過する直前に空を見ていて面白い場面を見た。8,000メートルくらいの上空をB29が太い飛行機雲を引いて飛んでいた。すると細い飛行機雲を引いたゼロ戦が反対側から飛んできたが気がつかないまま擦れ違ってしまった。次に来たゼロ戦がこれを見付けて、グルッと一回転してB29に追い続いた時、B29はジェット噴射を掛けたようにすごいスピードで逃げて行ってしまった。B29にそのような機能がすでに備えられていたのかも知れない。それを眺めていると間もなくゴオッという音がして南側の山の上にB29が三機編隊で現れた。豆粒のようなB29ではなく、本当に大きなB29であった。その途端高射砲が打ち出した。慌てて防空壕へ必死に飛び込んだ。まっぴるまの空にピカピカと稲妻みたいに筋状に光るものがある。これはアメリカの新兵器かと思っていたら、次に金色に燃えた火の塊りが落ちてくる。結局は電波妨害の錫のテープと分かったが、広がって伸びてくると細くキラキラと輝く。中にほぐれないで塊りのまま落ちてきたのが太陽に反射して火の玉みたいに見えたのである。近くに落ちてきた塊りを家に持って帰ったら、母親からアメリカのものには毒が塗ってあるかも知れないから早く手を洗えときつく叱られた。

8. 相模湾を覆いつくした米軍艦隊

終戦後の圧巻は何とんでも8月末、相模湾を覆いつくした米軍軍艦の一大集結であった。勤労働員から解放されて学校に戻ったある日、江の電で藤沢に通学していた友人が、「凄いぞ海が」と知らせてくれた。帰校の時に江の電に乗り、それを見たが壮観としかいいようがなかった。あれを見た時、鎌倉の山に少しばかり穴を掘って大砲を据えつけても勝負にならないとつくづく思った。夜になると病院船だけ明りがついていた。アメリカ兵もこわかったと見えて、おそろおそろ小型艇に乗って海岸に近づいてきて、勇敢なのが上陸を果たした。すぐ戻って行ったが、きっと日本上陸一番乗りを誇ったことであろう。海岸に米軍の携行食糧が流れ着いて拾ったという話も聞いた。

9. 陸軍の非常用食糧庫

名越のトンネルの1つ（現在の南行き一方通行の2つ目）が陸軍によって閉鎖されていて、中に非常用食糧がぎっしり保蔵されていた。終戦と同時に日本の将校がこれを持ちだし始めていた。父が区長をしていたので、すぐに報告がはいった。父は地元の人達数名を連れて、地元にも還元するよう将校と掛け合い、一部を確保し、

地域の人達に分配した。牛肉の大和煮やコーンビーフの缶詰、それに乾パンなど当時としては見たこともないご馳走だった。

10. 終戦後の配給物

終戦しばらくたった頃、配給物のひとつとして米軍の携行食糧が配られたことがあった。ボール紙の箱の表にブラックファースト、ランチ、サパーなどと書いてあって色分けされていた。コーンビーフ、粉末コーヒー、砂糖、チューインガム、ビスケット、チョコレート、煙草などがセットになってはいていた。米軍の兵隊はこのような食糧を十分に食べて戦っているのだから、日本の兵隊が負けるのは当然だと思った。また大豆の絞り粕、トウモロコシの粉などが配給になり、皆、いろいろなものに混ぜたりして工夫したがバサバサしていて食べにくい代物だったことを覚えている。

11. 私の学友たち

私は、小学校は国大附属で湘南中学に進み、学制改革でそのまま高校に進んだ。石原慎太郎君とは中・高を通じて同学年であった。戦後、池子の弾薬庫で爆発事故があり、JR線が不通となって藤沢から自宅まで歩いたことがある。その時、石原君は、逗子に住んでいたので私の家の前を通ったが、暑かったので家の横の桜並木の樹蔭でひと休みしたそうである。その時、私の母がたまたま見つけて「湘南の生徒さんネ」といってお茶を出してくれたということ、彼はのちのちまで覚えていた。真珠湾、ミッドウェー、サイパン戦の司令長官として知られる南雲忠一大将の4男とは、小学校から高校まで一緒であった。彼は父君の一字をとって忠彦という名前で、背は小さかったが、頭も良く粘り強い性格であった。東大を出て実業界で活躍したが、比較的早く亡くなったのは残念である。名越の海軍村と呼ばれている地域に作間という陸軍大佐の子息が住んでいたが、彼とは中・高を通じてよく遊んだ。彼の父君は太平洋戦争最大の悲劇の戦いといわれたインパールの最前線で部隊を率いて奮戦した作間喬宜連隊長である。作間大佐は、多くの人から厚い信望を得ていた方だということを高木俊朗著の「インパール」で後日知らされたが、終戦後帰還された時は、骨と皮の栄養失調の身体で、相当苦勞されたことが伺えた。謹厳実直な方で、戦後公職追放の間、陸軍のカーキ色のマントを着て、地域の夜警の仕事に就いておられた姿が、まだ目に焼きついており、頭の下がる思いである。

写真 (A)

名越地区の穴

老人やすらぎセンターへ向かう道に入ったところにある。砲台陣地は左側、山の斜面に3ヶ所ある。砲はこの山を飛び越えて、材木座海岸に着弾するように照準された。



写真 (B)

名越地区の穴

穴の大きさは間口4～5メートルくらいの大きなもので、民間の防空壕と混在している。



写真 (C)

大野邸の応接間

大野さんに説明を受けるCPCのメンバーたち



山ノ内に穴を見る

平成14年1月21日

案内人 荒井昇さん

激しい雨の中、山ノ内地区の3ヶ所にある軍隊の洞窟を見てまわった。地元育ちの荒井さんに案内を願い、明月院と浄智寺の住職にもお目にかかり、成果を上げることができた。地図を作成された地元の平出金平さんの娘さんも暫時同行された。

1. 好々亭周辺

J R北鎌倉駅の下りプラットホームの大船寄り、ホームが尽きるあたりに、会席料理店好々亭へ向かうトンネル（通称好々洞）があるが、そのちょうど真ん中あたりの両側に穴の入口がある。今はコンクリートで塞がれているが、右の穴は人が立てる高さのアーチ型で、中は直角に曲がりながらだんだん広くなり、崖の中腹のコンクリートで囲った銃眼に通じているという。銃眼の下にある稲荷の横の穴にらせん階段があるが、双方が中でつながっているかどうかはわからない。銃眼は横須賀線のホームを向いている。鎌倉方面から入ってくる米軍をねらったものらしい。

好々洞を抜けて、坂を右方向へ登ってしばらく行くと八雲神社を過ぎて雲頂庵の正面に出る。J R線に向かって急な階段がある。三分の一ほど下がった右側に自然の洞穴と、人口の穴の入口が見える。人口の穴は急な下り坂となって左に折れ曲がっている様子が見える。現在は土砂が床を埋めて通りがたい。

明月院

明月院に向かう道路の右側、崖の中腹に洞窟の入口が見える。（写真E）そこから図面のように長いトンネルが掘られている。

明月院に入って右の竹林の中に穴の入口があるが、今はブロックで塞がれている。平出さんによれば、この穴は大分伸びて、J R線の見える崖の所まで続いているそうである。明月院住職のお話では、終戦当時、中に電線が引いてあり、照明器具を取り付けてあったという。

浄智寺

浄智寺では前住職（閑栖）朝比奈宗泉さんが自ら穴の場所を案内して下さる。正門を入ってすぐ右側にある駐車場の左奥に海軍の掘った穴の入口が見える。終戦当時、同氏は陸軍で軍務に服し東京の高射砲隊に属していたが、ある日、寺に帰った際、海軍が作業中なのを見た。草鞋を自ら作っていたり、筍や人参をかじっていたりして、軍部の困窮ぶりを目の当たりにした。終戦で作業が中断したと見えて、貫通してはいない。同氏は大正12年生まれ、早稲田大学出身、東京大空襲の時には東京の守りか

ら群馬県太田市へ移動していたので、被害を受けることはなかったという。

山ノ内にある穴の地図

地図の作成者 荒井昇さん

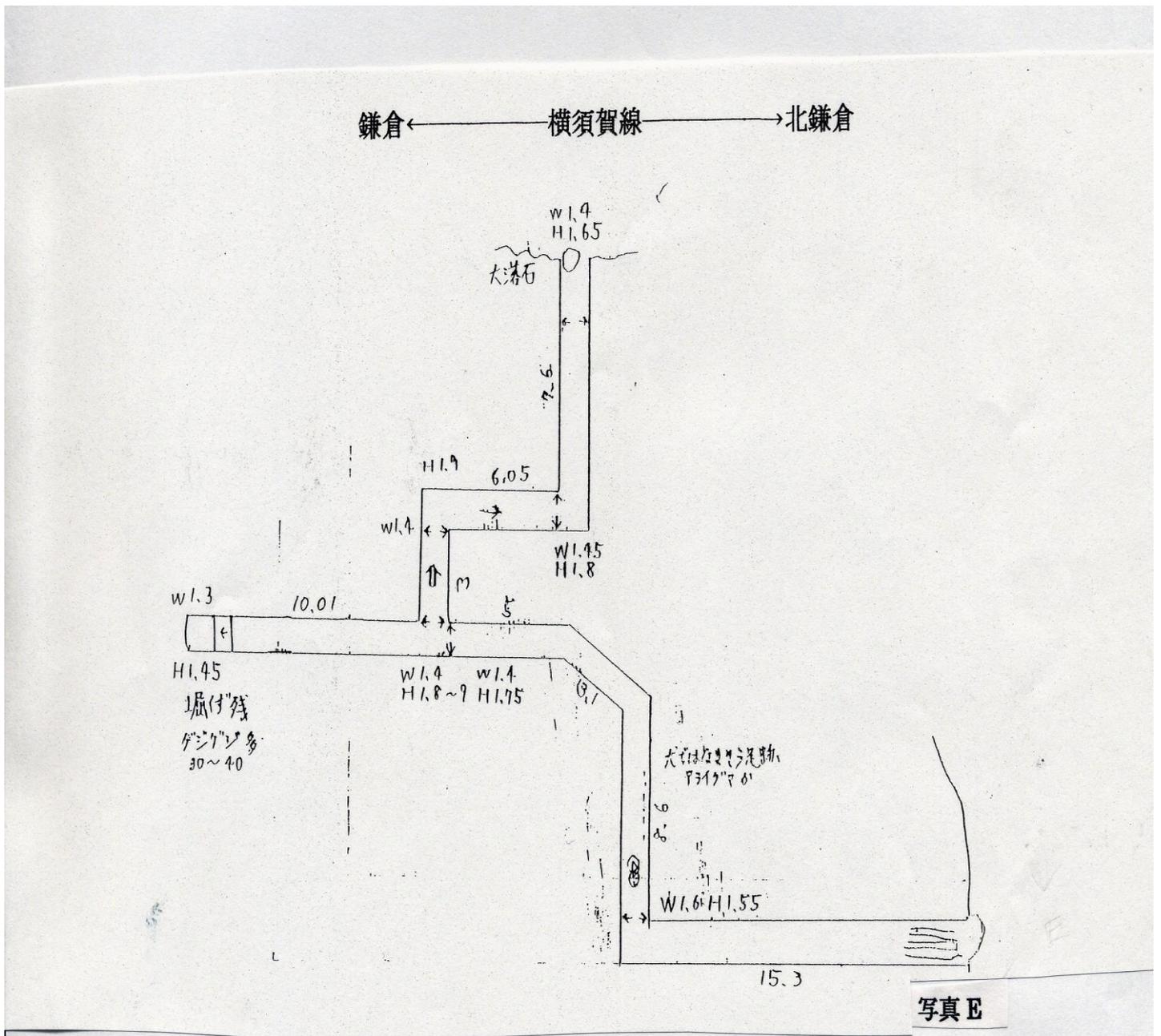


写真 (A)

好々亭トンネル

トンネルの中程左右に穴の入口が確認できるが、今はコンクリートブロックでふさがれている。左の穴は写真 (B) の銃眼に通じている。



写真 (B)

北鎌倉駅付近の銃眼

北鎌倉駅下りホームの大船寄りの JR 線に沿った住宅の裏山に洞窟の出口があり、銃眼が見える。鎌倉によく見られる「やぐら」の穴と銃眼とが同居している様はここならではの光景である。



写真 (C)

北鎌倉駅付近の洞窟

JR 線下りホームの大船寄り山側にある洞窟の出口。現在は測量のあと封鎖された。写真 A の前面



写真 (D)

雲頂庵下、急勾配の洞窟

途中で左折して下降している。



写真 (E)

明月院前の洞窟入口

JR線から明月院へ向かう道路の右側は、すぐ険しい山となっており、見上げるとこの山に軍隊が掘った洞窟の入口が見える。



写真 (F)

浄智寺にある洞窟

浄智寺山門に至る右側駐車場の奥に海軍によって掘られた洞窟の入口があり、終戦で未完のままとなっている。

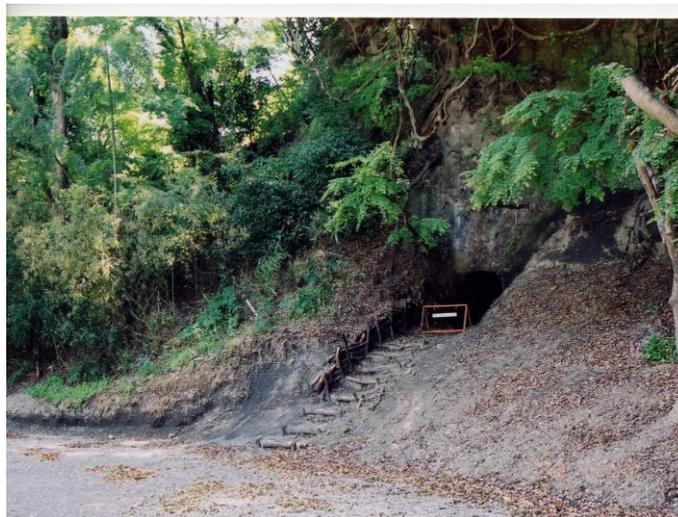


写真 (G)

呑龍の慰霊碑

呑龍は百式重爆撃機の名前で、フィリピン作戦で特攻を敢行した。円覚寺総門を入ってすぐ左の塔頭・桂昌院の中にある。



写真 (H)

北鎌倉駅前にある「要塞」の石柱

「要塞」は国防のため、国境・海岸などに築造した建造物のことで、この石柱の内側は要塞地帯であったことを示している。一般人の立ち入りは禁じられていた。この石柱は北鎌倉駅の西側改札口を出たところ、自動車道路の道端に立っている。



写真 (I)

岩瀬・今泉地区の陣地構築の跡を探訪

平成14年3月28日

案内人 清水辰男さん

今泉・岩瀬地区に戦時中構築された陣地の跡を、清水辰男氏の案内で探訪した。

「案内人の略歴」

清水さんは、この寺の寺侍の家系に属し、この寺門の側で昭和3年に出生、昭和40年鎌倉市市会議員に初当選以来9期連続当選の方で、市議会議長も務め、岩瀬地区の歴史発掘には個人としても活躍されている。

1. 岩瀬の大長寺

岩瀬の穴は大長寺の境内にある。大長寺は浄土宗で亀鏡山護国院といい天正17年(1589年)北条綱成の創建になる。寺域は広く、背景は緑に覆われ、鎌倉の寺院としても、風格を備えた寺である。北条氏が滅亡した後も徳川幕府の庇護を受けて栄えた。

2. 大長寺の穴

穴は海軍によって掘られ、寺の本堂に向かって左に位置する御堂の後ろに入口があり、今も塞がれないまま開いている。穴の出口は、三本に分かれて鎌倉街道に面した崖に達し、その中の一つはコンクリート製の銃眼となって見事な形で残っている。あと一つは湧き出す水が溜まってプール状になっている。水面は道路面より高く、コンクリートの堰堤で水漏れを防いでいる。水量は豊富で防火用水として今でも使われている。

3. 今泉の穴

大長寺から南約1キロのあたりに別の穴があるというので、調査に出向いた。住所表示が岩瀬から今泉に変わったすぐの所(今泉1-9)を左手の谷戸に入って行く。情報の主、長島富男さん(注)は不在であったが、住宅が切れて長島家の墓地がある地点のすぐ先に右手の山に向け2ヶ所の穴があり、穴を覗くと50メートルくらい先の出口が見通せる。この穴は銃眼用のものではなく、二つの谷戸をつなぐためのもののようなものである。

念のため、50メートル先と思われる地点(今泉1-8)に回って見たが穴(出口)を発見できなかった。

他に、横浜市栄区^{くでん}公田に通じる穴があるようだが、穴の位置は確認できなかった。大長寺から公田の町までは、直線距離にして僅か200メートルくらいである。栄区本郷台には海軍の燃料廠があるので、穴は相互の連絡用のものであったと思われる。

(注)平田が今泉白山神社の大注連縄神事に参加した際に紹介を受けた。

写真 (A)

海軍が掘った大長寺の穴

御堂の後ろに入り口が開いている。



写真 (B)

大長寺に残るコンクリートの銃眼

鎌倉街道に面した崖にある。

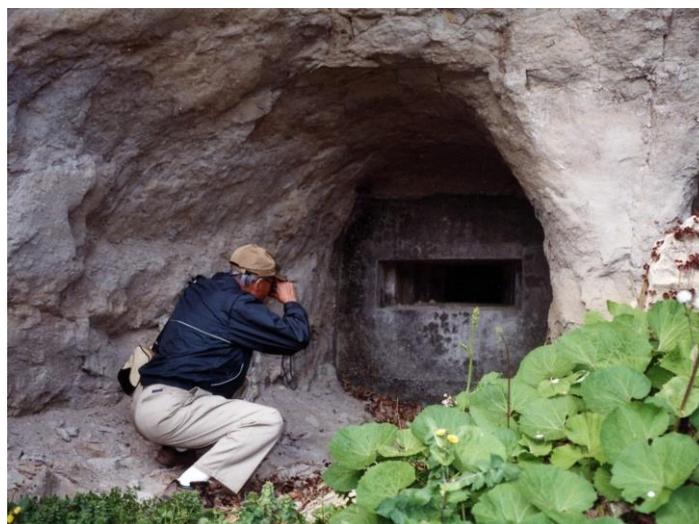


写真 (C)

湧き出す水でプール状になっている穴

水面は道路面より高く、コンクリートの堰堤で防いでいる。水量が豊富で防火用水として今も使われている。



極楽寺地区の横穴を見る（1）

平成14年6月4日

案内人 岩沢文一さん

1. 極楽寺馬場ヶ谷

岩沢さんのご自宅は稲村ガ崎小学校から馬場ヶ谷ばんぼがやつに入る入り口に位置し、今も立派な茅葺屋根が残っている。広い前庭のタブの木の古木がこの家の歴史の古さを物語っている。季節の花々も賑やかに咲いていた。右手の山肌は、現在急傾斜地の工事中有るが、見事なカヤの木の太木は切らずに残されるらしい。

目当ての穴は馬場ヶ谷をかなり奥へ入り、左手の住宅の間から山に上る。岩沢さんは鎌で草を刈りながら道を作って進んでくれた。階段を10段くらい上ると、上は平場になっていた。左手の山肌の側面に黒い穴がぽっかりと開いている。しかし入り口の手前は枯葉や落石土などが積み重なり、暗い穴に滑り落ちそうになるので、入ることは出来ない。一帯の地盤は崩れ易そうである。

岩沢さんは戦地から帰り、終戦後にその穴に入ってみたらしい。幅、高さともに2メートルくらいあり、松ノ木（黒松）で支えを組みながら、掘ってあったという。今はその木組みを見ることは出来ない。出口は200メートルほど先の山の中腹に開いており、そこから山あいを縫って、まっすぐ稲村ガ崎方面に向いていた。中に大砲などの銃器は残っていなかった。たぶん据え付けないうちに終戦になったのであろう。

写真 (A)

横穴の現状

横穴の入り口は枯葉や落石土に覆われ、中には石油缶などが捨てられている。



写真 (B)

穴の中を覗く

案内をしていただいた岩沢文一さんが邪魔になる木の根や石油缶を取り除いてくれたが、中は見通うせなかった。



写真 (C)

極楽寺地区の横穴を見る（２）

－極楽寺住職と会談－

平成14年6月15日

語り手、案内人 極楽寺住職 田中蜜隆さん
案内人 岩沢幸久さん 五木田孝次さん
平井 勇さん 大里蔵之助さん

午前10時、極楽寺駅そばの赤橋に集合、すぐ極楽寺に向かう。集会室に通され住職の田中蜜隆さんとお会いする。住職は重く分厚い一冊の書物を抱えておられ、この中に戦時中この寺の本堂で起居して穴掘りに従事した兵隊さんの手記が載っているという。この本は、豊橋予備士官学校の同窓会OB達による戦時中の体験証言集で700頁に近い大作である。ちらりと見た瞬間手記の当人はCPCの曾根さんと同期生であることが分かり、話題に花が咲く。本の名前は「鍛腕鍊胆賦」といかめしいが「きたえしかいな ねりしきもの うた」と読ましてある。手記の本人は神宮角太郎さんといい、本籍群馬県、現在東京にお住まいと聞く。手記の中に、寺に「小柄だが目の澄む利発そうな少年がいた。日がな一日私のあとをつけ回していて……」との表現がある。この少年が現住職である。この本が出版されたあと、神宮さんから住職に寄贈されたものとお見受けした。

「私の小隊は本堂に駐屯し、米軍の相模湾上陸迎撃のため三交替で作戦壕構築を急いでいた。私は住職の居住区の一室を拝借していた。……敵は上陸前に徹底した艦砲射撃をしかけてくるだろう。橋頭堡への挺身奇襲攻撃に少年が同行するといっぺ聞かなかつたらどうする」というくだりがある。当時の逼迫した様子が読み取れる。神宮さんは戦後ちょうど50年たった時点にこの極楽寺を再訪、現住職に会われたという。さらに「半信半疑で聴いた玉音放送から数日が過ぎると、鎌倉という住民風土がかもし出す土地柄か『戦争は終わった』という安心感が兵隊の胸中にも溢れてきた。壕作業は中止されて、手持ち無沙汰となった。……私たちは8月23日夕刻、小隊全員が本堂前庭に整列し、お世話になった極楽寺の皆さんに対して、私の号令で『頭らアなかッ』のお別れをした」

住職のお話が終わったあと、住職にその穴の場所に案内してもらおう。極楽寺の裏手の道を稲村ガ崎小学校のグラウンドに向かい、途中左手に入った道の奥にその穴はあった。穴は岩盤に素掘りされ、その入り口は塞がれることなく、容易に見ることが出来る。未完のまま終わっているとのこと。ここの岩は「どたん」といわれ、落盤の危険が少なく、枠組みで補強して行く必要はなかった。

極楽寺を後にして切り通しへ向かう。成就院の下に穴の入り口があって、海の方に掘り進められ、坂ノ下の坂道に抜けていると言う。穴の中から見付かった五輪塔が土地の人によって、切通しの向かい側の山の上に移され安置されている。

ここから134号線を稲村ガ崎へ向かう。地域一帯が鎌倉海浜公園として整備されているが、海に突き出した一段と高い山の江ノ島に面した崖の中腹に、壕の銃眼を見事に望見することが出来る。銃眼の向かう先には、米軍上陸地点に想定されていた茅ヶ崎海岸がある。1銃眼の少し下に、人の高さくらいの穴があって、鉄格子で塞がれている。これらの壕は切通しの海側の崖から掘り進められたもので、穴の入り口は塞がれているが、これだと認知できる穴の入り口がある。

写真 (A)

極楽寺裏横穴の現状

竹藪の中に横穴の入口があったが、落石などでふさがれることも無く当時のままの姿を残している。



写真 (B)

極楽寺田中住職の説明を受ける

横穴の手前は緩やかな傾斜地で畑地になっている。ここで住職からいろいろとお話をいただいた。



写真 (C)

極楽寺坂横穴の現状

極楽寺坂ノ下方面から見て左手、成就院参道の下に横穴の入り口が2ヶ所ある。土砂で塞がれ、さらに落石防止用のネットに覆われ内部を窺うすべもない。



写真 (D)

坂ノ下海岸に面する銃眼と 推測される横穴

坂ノ下海岸から霊仙山に上がる道路の上り口のすぐ右手、ブロック塀の奥にそれらしい横穴がある。周りは草で覆われ、横穴はブロックで塞がれている。



写真 (E)

稲村ガ崎の銃眼

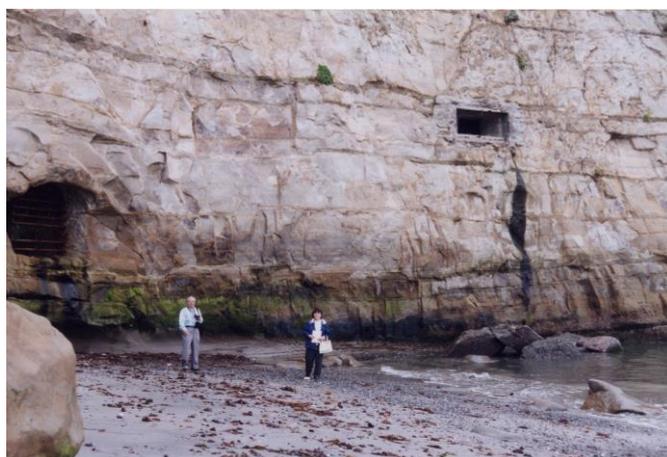
稲村ガ崎の突端に近い急な斜面の中腹にコンクリートで固められた銃眼を望見できる。付近は立ち入り禁止となっており、潮が満ちてくると近付くことも出来ない。



写真 (F)

間近で撮影した銃眼

潮が引いているときに銃眼の直下で撮影した写真である。銃眼の大きさを確認できる。なお左端に写っている洞窟らしきものは、人間魚雷「震洋」の基地であったという話もある。



極楽寺地区の横穴を見る（3）

—成就院住職と会談—

平成14年6月19日

語り手 成就院住職 原 照雄さん

6月15日極楽寺地区住民有志との横穴探索時に果たせなかった成就院住職との会談は、6月19日に実現した。住職は昭和19年5月生まれの58歳、戦前の体験は無いが寺で成育され、戦後のこの地区の移り変わりには詳しい。最初に極楽寺切通しの歴史について言及あり。一般に間違えて伝えられていることは遺憾で、これを正すために正しい経緯を記した書物を準備中で、いずれ門前に掲示板として掲げようと考えているとのこと。

切通しの海側ノリ面から掘り進められた穴については、当時指揮を執った人が現存されていて、寺にもしばしば訪問されるが今は氏名を明かしたくない。伊豆地方に住まわれており80歳半ば、当時は横須賀海軍基地に所属されていた将校である。成就院の坂ノ下、長谷より一軒の廃屋があり、穴はその廃屋の下から海の方角に二本掘り進められた。途中、井戸が2ヶ所あって出水の被害にあった。作業は海軍の少年兵によって掘られ、海側のノリ部分に貫通、出口は2ヶ所ある。2ヶ所は鎌倉ビュウパレスの裏に抜けており、アパートの5階部分の高さにある。道路面からは見えない。あとの1ヶ所は6月15日に極楽寺地区有志の方々に案内された場所（坂ノ下から霊仙山に上る坂道）である。ビュウパレスへの出口あたりに五輪塔や沢山の人骨が発見された。骨の層は一・二尺にも上ったという。五輪塔は鎌倉ホテル（現在は駐車場）に移され、あとで地区の人によって現在の安置場所（切通しの成就院向かい側の山の上）に移された。廃屋らしき家の下辺りにある穴の入り口を夏などに通り過ぎると海からの空気が感じられ、この穴が貫通しているのが分かる。

なお、坂ノ下から霊仙山にのぼる坂道の右手山頂は仏法寺のあったところで、今鎌倉市によって発掘が進められている。霊仙山にはかつてドイツ人の別荘があり、またコッホ博士の碑があった。風車もあったという。ここでも五輪塔が多数発見された。

写真 (A)

成就院原住職と会談

原住職との会談は、成就院の一室で1時間を越えて行われ、いろいろと有益な情報を得ることが出来た。

写真中央が原住職



写真 (B)

写真 (C)

鎌倉山に戦跡を訪ねる（1）

平成13年2月15日、3月15日

案内人、語り手 郷原久二男さん

以下は2月15日の記録であるが、3月15日の証言をもとに加除訂正した。

1. 2月15日午後、郷原さんのご自宅へお邪魔した。平田さんの紹介でわれわれが、庭先で向かい合う形で郷原さんを取り囲んだ。同氏はこの地区でイチゴ園など手広く経営されており、終戦時は中学校5年生（昭和2年生まれ）であった。学徒勤労動員で終戦の時点では自宅から大船の工場に働きに出ていた。終戦で兵隊の立ち去った剥きだしのままの陣地構築の跡を少年の興味で探検した。恐らく終戦このかた、地元の人や家族などにも、口にしたことがない終戦の記憶が、次々と語られ始めた。郷原さんの顔は、少年の昔に戻ったようであった。郷原さんの家は「源太塚」のすぐ近く、仏行寺の深沢寄りにある。自宅の裏には縄文時代の遺跡もあるという。
2. そこら中に兵隊の掘った壕があり、その中には小銃など兵器が遺棄されていた。実弾もあった。子供たちはめいめいこれを拾ってうちへ持って帰ったり、こっそり試し打ちをしたりした。穴の中には裸電球があったが真っ暗で、懐中電灯がない当時では蠟燭をたよりに穴の奥にはいっていった。穴の木組みは燃料になるので大人たちが運んでいた。その内に米軍がこの地区へも来て、武器が残されていないか調べ始めた。子供たちは慌てて、鉄砲などを夫婦池へほうり投げた。部落は40軒ほどの小さい集落なので、米軍による各戸への調査はわけもなかった。3回くらい来たと思う。どの家にも先祖伝来の日本刀などがしまっているものだが、ごっそり持ってゆかれた。
3. 展開していた兵隊の指揮官は近くの徳増氏宅の離れを宿舎としていた。兵隊は民家に分宿していた。深沢国民学校のそばにあった地区役場のところに、炊飯場があり、そこから食事を配っていた。部隊は野戦部隊で4桁の数字の部隊名がついていた。
4. 庭先での立ち話のあと、壕の跡を見学に行く。萩郷の住宅を横切って「老人福祉教養センター」の後ろ側に回る。細い道は山裾をくねって、急坂となって鎌倉山ロータリー近くの播亭のオープン駐車場のところに通じる。この道は古道で、江戸時代の小説にも引用されているという。センターの丁度後ろに共同墓地がある。いずれのお寺にも属さないお墓で、郷原家、徳増家などの墓がある。この墓地の後ろの山肌に壕の穴が見えている。これが銃眼で、鎌倉山をこえて夫婦池方向から進撃し

てくる敵を攻撃するために照準されていた。穴の入り口はこの山道の少し上ったところにあるのが見えた。穴は、今は自然に塞っていて中には入れない。

5. 萩郷住宅団地は開発される前はかなり小高い山であった。この山の砂はもろくて、火山灰を含む粗い砂で、東名高速道路建設の基盤としてコンクリートの下地として用いられた。「市福祉センター・あおぞら園」の正面に向き合った山が削られて地肌が剥きだしになっているが、この砂も東名高速道路に転用された。
6. 夫婦池へ向かう。下の池の奥が小さく開けていて個人の家庭菜園となっているが、その一番奥に壕の跡が数ヶ所ある。一つは崖の中腹にポツカリと口をあけている。これも銃口の穴で、戦後このかた手を加えていないもとのままの姿で残されている。穴の大きさは銃口用なのでせいぜい1メートルくらいなものである。穴の入り口は別のところにあると思われる。場所としては、「ローストビーフの店鎌倉山」の真下にあたる。
7. 上の池の奥にも穴は一杯ある。上の池の先端は丁度「鎌倉山碑」の真下あたりで、上のバス道が一番細い尾根になっているあたりである。おそらくこの穴は山の反対側へ突き抜けて、海の方へ伸びていると思われる。郷原さんも江ノ島方面へ向けて貫通することを目論んでいたのではないかと推測されている。夫婦池から上は当時は要塞地帯となっており、民間人の立ち入りは許されていなかったので、当時の軍または米軍の資料でも出てこない限り穴の数、位置などは知るよしもない。
8. 夫婦池については、江戸時代このかた、水利について隣接の部落との間で熾烈な争いがあり、明治の初めに裁判にてようやく決着した。笛田の青蓮寺しょうれんじ（鎖大師）に明治33年建立の碑があり、簡単ながらこの間のいきさつを記している。（後述）終戦後、上の池は時々水抜きをして、たんぼとして利用することがあった。池の底はどろどろで、歩くことが出来ないくらいであった。池に放擲されたものは泥の中にもまれていた。下の池は水抜きはなされないままである。
9. 現在の「市深沢クリーンセンター」のある場所は、その周辺が穴だらけである。ここの穴はJR深沢工場のところにあった海軍工廠に付属の穴で、地下工場として掘られたものである。したがって穴の中は大きい。終戦当時は、穴が完成したばかりで、旋盤の機械が二台はいつていた。稼働していた様子はなかった。郷原さんも、中学4年の時にこの工場に学徒動員で働いたことがある。魚雷のリベットをやすりで磨く簡単なものであった。

10. 戦後、鎌倉山の別荘地帯は進駐軍の高級宿舎や娯楽施設として米軍に収容されることになったことはいうまでもない。戦前鎌倉山には有名人が多数住んでいた。近衛文麿公爵は、夫婦池を着地点とするゴルフの打ち放しの練習によく見えていた。一番熱心なゴルファーであったようである。よく子供が小遣い目当てに御神輿を担いで近衛公の別荘におしかけて行ったが、守衛に阻まれていたのを二階から見て、子供だから入れてやれということで、別荘の中に入れてもらったことがある。そこで出されたコーヒーが、生まれてはじめて口にしたコーヒーであった。田中絹代も大船の撮影所に行くのに護衛をつけて鎌倉山から歩いて行く姿を見掛けたことがある。

(注) 夫婦池紛争に関する碑 ^{しょうれんじ}青蓮寺

手広笛田之地古来不便灌漑年々有水利之爭終至葛藤結而不解矣明治九年村人使和田七郎左衛門内海源右衛門二者決之法衛二姓拮据從事五年會由有志者調停而僅得解焉於是二姓相議曰雖葛藤解矣水利如舊則他日復有結宜於今日斷其緒也仍新築提塘又造分水器置之内堀川第一號演堰及堺川第二號堰使分水量明確而不可爭焉爾來十數年兩村和融田々苗秀家々給足無復往日爭鬭之態嗚呼若微二姓則事未可知也頃者村人媚謀建碑以不朽壓功求余銘乃係銘曰

善斷葛藤 鎮効平和 有德之作 金石不磨
明治三十三年庚子秋九月二十又八日
特住圓覺大教正釋宗演撰弁書

なお夫婦池騒動の詳細については、木村彦三郎氏が「溜池始末記」と題して『鎌倉記憶帳』に5回に亘って連載しておられる。

写真 (A)

郷原さんの庭先で

郷原久二男氏（中央）から
鎌倉山の戦跡について説明
を受けるC P Cのメンバー



写真 (B)

夫婦池の奥の山

郷原さんの案内で鎌倉山の
陣地を見に行った。夫婦
池の奥にある横穴



写真 (C)

銃眼のあと

共同墓地のうしろの山肌に見える穴。
夫婦池方向から進撃してくる敵をねらって作られたもの。



鎌倉山に戦跡を訪ねる（2）

平成14年10月6日

案内人 鎌倉山町内会有志
(徳増さん、中野さん他)

1. 鎌倉山町内会からの問い合わせ

鎌倉山1丁目1400番において、社会福祉施設建設の話が持ち上がり、近隣では、その工事にともない、戦時中に日本軍が掘った地下トンネルの崩落・陥没などが起こるのではないかと不安の声が上がった。このままでは工事に同意できないとして、事業者や市役所にも安全確認と調査を依頼し、町内会自ら「トンネル」などの情報を収集することになった。そこで、私たちCPCの会が戦争の遺跡の調査をしていることを聞き、穴の状況など調査していたら教えてほしいという依頼があった。

しかし、反対に私たちが教えてほしいと思っているぐらいなので、一緒に歩いてもらうことになった。

2. 若松バス停から笛田公園グラウンド下を通り夫婦池方面へ

10月6日（日）の朝、若松バス停に鎌倉山町内会のみなさんと私たちCPCの会のメンバー合わせて約15名が揃った。若い方も多く最初から町内会の方達の熱心さが伝わってきた。

なかでも中野さんは小学生時代、このあたりの穴に入って遊んでいたというので、一番頼りになる案内者であった。

若松バス停から笛田方向に少し歩き左の住宅に沿ってグラウンド下あたりまで行く。福祉施設建設予定地あたりには桜の大木が数本立っていてそれが無くなるのが残念に思われた。このあたりにははっきりした穴は確認できなかった。個人の家の裏庭にあるのかも知れない。落ち葉が積もった長くて急な階段を下りて、「福祉センターあおぞら園」の前あたりの崖下に出る。この山にはトンネル（陣地）があったが、山自体が削り取られているので、今は痕跡すら見られない。（前項、郷原さんの案内参照）通りに出て、夫婦池の奥を見ることにした。下の池の奥に以前は畑があったが、今回は雑草が生い茂り、水が溜まり、それより前へは進めない。前回の調査で山裾に洞窟が3～4個あったはずだが、残念ながら近付くことができなかった。このあたりは公園整備のため鎌倉市が買い上げたという。

次に上の池の横にある資材置き場の裏手に回ってみた。ここは中野さんの記憶で、子供の時に入って遊んだ穴があるという。中野さんは木につかまりながら2～3ヶ所登って、とうとうその穴を発見。（写真B, C）アーチ型で人が入れる位の穴の入口が見えたが、奥は土砂に埋まって勾配が付いて滑り落ちそうであった。出口は池の奥の方に通じていたらしいが、足もとが悪くて確認するすべはなかった。

はっきりした洞窟はこの1ヶ所であったが、2時間ほどの探索を終えて解散した。

3. 鎌倉山町内会で独自に調査・情報収集

その後町内会では、各自が家のまわりにある壕を調べてファックスなどで情報を持ち寄り、担当者が結果をファイルにまとめておられる。それによると全部で10ヶ所の壕が認められるという。その中で緊急に対策を講じた方がよいと思われるのは1ヶ所とのことである。それには次のようなコメントが付いている。

「入口の大きさからして意外に奥があるのかも知れず、住居地に近接しているので入口周辺の整地と埋戻しが望ましい。」

また、10月6日に町内会の人と歩いて、最後に見つけた夫婦池奥の穴については、「入口は現存するものの中で一番大きいと考えられる。幅3メートル、高さ2メートル前後か。4～5メートル入った所から急に狭くなり、土砂が流れ込んで、先はどこまでということはわからない」というコメントである。

そのほかにも次のような記述があるので転載させていただくことにする。

「AさんとBさんの境界線の崖に掘られたキチンとしたもので、戦争中Aさん邸に駐留した兵士の防空壕と貯蔵庫に使われたと思われる。6～7メートルで出口がある。」

「(鎌倉山集会所から)夫婦池に向けて下る道の右側3～4メートル上に口を開けている。笛田公園の下周辺の壕につながっているという話もあるが果たしてどうか。」

「大きな入口が開いており、しばらく奥まで出入りが出来ていたようだが、入口を土で閉鎖したものである。」

「場所的にもあまり意味のあるものと思えず、タコツボ的な防空壕かとも。」……………

またこのファイルにはおおよその所在地を示した地図も添付されている。鎌倉山町内会の方々の熱心さとご苦勞の結晶であると強く感じた。

地下壕所在地図（鎌倉山町内会作成）



地下壕所在地図（鎌倉山町内会作成）

①～⑩の10ヶ所は町内会で入口の所在を確認したもの。さらに赤で印を付けた場所は、個人の記憶に残っているものである。

写真 (A)

鎌倉山若松バス停に集まって、
穴の調査に出発する鎌倉山町
内会有志の方々とC P Cの会
メンバー



写真 (B)

鎌倉山集会所から夫婦池へ下
る道沿いの山の中腹に残る穴
を探索



写真 (C)

案内者の中野さんが子供の時
に穴の中で遊んだ記憶をもと
に穴を探す。

夫婦池の奥で一つ発見。
現存するものの中で一番大き
いと考えられる。

(町内会の調査により撮影)



おぼけトンネル

平成14年6月15日～

語り手 神宮角太郎さん

関崎 時朗さん

1. 鎌倉山

鎌倉市の西部に鎌倉山と通称されている丘陵地帯がある。モノレール深沢駅と西鎌倉駅の間にあるトンネルあたりを西として、東は大仏トンネルあたりまでの丘陵地帯で、昭和の初め若手実業家によって別荘地として開発されたところである。この山塊の東の基部にトンネルが南北に貫いている。戦後になっても十分な整備がされず、内部に横穴があったりして、地元ではおぼけトンネルと呼ばれていた。このトンネルは、常盤地区と極楽寺地区をタテに結ぶ道の峠となっているところで、整備された現在でも車一台しか通れないほどの狭い道路であり、交通量も多くない。このトンネルの極楽寺側の出口のそばに軍隊が終戦当時、兵器・弾薬などの貯蔵に使用していた大きな地下洞窟があった。

このトンネルを覆う丘陵地は、戦前『わかもと』のオーナー長尾欽彌氏の所有になる土地で、広さは6万坪あるといわれ、地元では長尾別荘と呼ばれていた。長尾別荘には長尾氏が贅沢三昧で収集した内外の美術品や、移築された飛騨の合掌造りの民家などがあった。「鎌倉別荘物語」の記述によれば、「既存する中で最大のものは旧長尾欽彌邸であろう」と書かれている。戦後、経営が頓挫したあとは長尾美術館として一般に開放されたり、一時料亭になったこともあった。しかし、戦時中ここに巨大な貯蔵庫を持つ軍隊は、ここを「わかもと別荘」という呼び名で呼んでいて、長尾別荘とは呼んでいなかった。

神宮角太郎さん

この「わかもと別荘」のことを、われわれに紹介してくれたのが神宮角太郎さんであった。CPC代表の曾根と神宮さんとの出会いは今回が初めてで、しかも大変劇的なものであった。いくつかの偶然が重なりあわないと起こりえない類いの出会いで、神の糸で結ばれたと表現してもいいくらいのものであった。

戦争遺跡探訪も4年目にはいり、鎌倉市内のあちこちをほぼくまなく現地見聞したなかで、まだ手つかずになっている数少ない場所が極楽寺地区であった。平成14年も梅雨どきを迎えていた。地元の人に案内を乞うことにしていたその二回目、6月15日の会合の時に、今日は、極楽寺の住職さんが会ってくださることになっていると現地で知らされた。こちらから頼んだわけではなく、地元の人が好意でしてくれたものであった。われわれ総勢8人、地元の人5人、この大勢がドヤドヤと庫裏に入ってここの住職の出を待つ。住職の名は田中蜜隆氏で、一冊の分厚い図書を抱えておられる。ご自身のことを記した本であることは察したが、その時、サシを挟んであるペー

ジをめぐられたとたん、住職の左隣に座っていた私（曾根）の目に飛び込んできたものは、その筆者の肩書き「特甲幹第一期生」の7文字であった。「特甲幹」とは旧陸軍の特別甲種幹部候補生の略称であって、一期生とは私と同期ということである。戦争末期昭和19年10月、敗戦の色濃くなった時期に文科系学生の就学機会を奪って、下級将校を濫造するため、新設された陸軍の制度であった。もともと軍人を志していないわれわれを戦地に駆り立てるための陸軍の苦肉の制度であった。「特甲幹」の文字は、それだけで私に特殊の思いを駆き立てる文字である。「何それ！」思わず私は住職に口走った。「この方、私と同期です！」と。聞けば昭和20年6月、つまり終戦3ヶ月前、士官学校を卒業した神宮さんという人が、最初の赴任地として着任されたのが、この極楽寺であったというわけである。住職の持参された部厚い本は「豊橋陸軍予備士官学校」の卒業生になる思い出の文集、いうなればOB誌である。住職は終戦間近のこの時まだ小学生で、自宅に寝泊りする青年小隊長にまつわりついて、瞬間も離れなかったそうである。住職はご自身の戦争との関わりが記されているこの書物を、われわれに見せようとされたわけである。私は、この貴重な重い書物を住職に貸して下さるようお願いをして熟読した。実は、私は終戦後これまで「豊橋」と連絡をとりあったことはなく、ましてやOB会が存在することすら知らなかった。早速、神宮さんと連絡をとりあったこと勿論である。このあと年末に至るまで、二人の間で数々の接触を重ねることとなる。

3. 巨大な地下洞窟

神宮さんは、当時、鎌倉に着任するや前任将校の案内でまさきに鎌倉山の洞窟に案内された。彼がOB誌に寄せた記述をしばらくそのまま引用してみる。

「・・・鎌倉山の地下壕の印象だけは忘れ難い。あの膨大な兵器・弾薬は終戦処理で米軍に引き渡したとしても、身の丈を数倍する高さで、テニスコート数面にも及ぶ広さの空になった角型の大洞窟はその後どうなっただろうかと、時に思い出している。

そこで私が見聞きしたのは、一つには日露戦争時代に旅順にあった28センチ榴弾砲を本土決戦に備えて鎌倉山に移し据えたという代物。二つ目は弾薬庫に汗をかき鈍く輝いていたその弾列群の驚くべき偉容さと迫力。99式歩兵銃や軽機関銃に加え手榴弾ぐらいしか知らない歩兵小銃科育ちのものには両肩幅に手をひろげないと弾丸の周囲が測れないほどの巨大な化け物には度肝を抜かれた。それが段組みで積み重ねられているのだから圧巻の様には驚嘆した」

われわれの要請に応じて神宮さんが8月29日、自宅のある東京国立くにたちから鎌倉へこられた。6月の住職会見以降この日までの間、一体そんな巨大な地下洞窟が鎌倉山に存在するのかと、地元のかなりの方に接触した。民間では「長尾別荘」と呼び、軍隊では「わかもと別荘」と呼ぶ地点が、同一の場所であることはすぐに分かったが、その別荘の中にそのようなものはないとする地元の人たちの証言で、地下洞窟の存在

が謎となっていくこととなる。

神宮さんは現地に案内されても、周囲の環境が終戦当時のものとすっかり変化しているの、その場では臨場感がご自身の抱く半世紀前のイメージと一致しない。まして別荘の中に立ち入ることが禁じられていて、塀の外から窺うしかないの、邸内に壕の入り口があるのではないかとの疑問も捨て切れないうおられた。このような疑問が氷解しないまま年末になってしまった。最後の決め手として、この敷地を管理する会社の責任者がひょっとして、情報を持っておられないかと思ひ訪ねることとした。管理会社D社は、横浜市戸塚区にあり、12月24日に社長の村田良二氏との面接が実現した。村田氏によれば、管理を委任された30年前から、村田氏自身がこの邸内に居住されたという。くまなく邸内の調査に当たった結果、邸内にそのような洞窟も、壕の入り口もない。あるとすればただ一つ、庭園の一番低いところの地下にトンネルがあつて、そのトンネルに隣接して洞窟があつたといつて「おぼけトンネル」のことに言及された。

この洞窟は、入り口がトンネルの極楽寺側出口の左に隣接してあり、穴はかなり広く、幅は5～7メートル、高さは5～6メートル、奥行きは20～25メートルはあるといつて略図を画いて下さつた。内部はトンネルと平行して存在するが、トンネルと合体の構造ではない。この壕とトンネルとはいくつかの細い横道で連なっていること。自分が管理するようになって、地元の要請もあり危険予防の観点から、この壕の出入口は全部コンクリートで閉鎖することとした。

この広さはかなり広いもので、神宮さんの記述されたテニスコート数面には及ばないにしても、コート一面分くらいはある。われわれとの接触を深めるに従つてご自分の表現が少し過大であつたかもしれないと修正のお気持ちのあつた神宮さんも、今回の村田社長の証言などをふまえ、自分の見た洞窟はこれではないかと歩み寄つてきておられる。しかし、まだ完全に納得されておられないとお見受けする。戦後半世紀の月日は永く、変化は激しいのである。

武器・弾薬

さて、この洞窟の中にどのような武器・弾薬が貯蔵されていたのかについて、神宮さんが、この弾薬庫を当時利用したことのある、前任将校が現存されているのをつき止められ、この方を東京の自宅に訪問、次のような貴重な証言を得て下さつた。この方は関崎時朗さんといひ、当時、兵技将校として連隊本部のあつた深沢国民学校に勤務されていた。以下の記述は関崎さんの証言内容である。

「何時だつたか記憶が定かではないが、某大隊から小銃弾丸支給要望があつた。わかもと地下壕の蓄積から出庫し、大隊まで届けるようにとの部隊長命令を受けた。その時まで、私はわかもと地下洞窟の所在も、弾薬貯蔵の事実も知らなかつた。懐中電灯で探すと、壕の最奥に40センチ四方で深さ30センチ大の木箱が十段積み三列に

並んでいた。手前二列は空箱であったが、奥の一行の十段は梱包のままで、下ろすと20キロ超の重量はあったと思う。他に何が合ったかと思いついても、広大な地下洞窟で、外光は奥までは届かず、内部を詮索する余裕はなかった」

このあと終戦後、武装解除があつて、部隊長より「関崎兵技少尉は部下を指揮し、現地に残置せる兵器類を回収してわかもと別荘地下洞窟に集積せよ。なお完了せば、員数表を作成し部隊残務整理役員（竜口寺にあつた）に報告すべし」と命令された。人員は私以下、下士官4名、兵員40名、トラック2輛（1台は故障）軽重車、大八車数輛、宿舎は深沢国民学校裁縫室を共同使用した。

「洞窟内は開口部から奥に向かって二間の通路を確保して、両側壁に寄せて軽量兵器は洞窟奥に搬入し、重量兵器は開口部近くに区画した。右奥から小銃5～6000挺、その手前に軽機関銃200挺、その手前が重機関銃20挺くらいだったかと思う。重機関銃は重く脚があつて扱い難いので、脚を外して転がした。左側には弾薬類築壕掘削器材や通信機器に軍用諸器材など。先に述べた空の木箱が双眼鏡や軍用時計など小物類の収納に重宝した。また、歩兵砲を三門回収したが、洞窟内に引き込むことが難しかったので、開口部の坂下の山道に放置しておいた。そうしたら、いつの間にか二門になってしまった。大型兵器とあつて探し回ったら、片瀬の進駐軍本部前に陳列してあつた。驚いて片言の英語で理由を述べたら先方も了解し、取り戻した笑えぬ一件もあつた。集積した兵器・弾薬はすべて進駐軍に引き渡した」

他に、神宮さんと関崎さんとの興味ある一問一答、次のごとし。

神宮「わかもと別荘地下洞窟の位置は、関崎さんのおられた深沢国民学校から大まかな距離でどれくらい？」

関崎「約3キロ前後か」

神宮「深沢村から鎌倉山の山塊に入り込むと、洞窟の開口部は遠望出来ましたか？」

関崎「見えません。近所の人にも知られておらず、国民学校の小使さんでも知りませんでした」

神宮「真近になって突然開口部が開いているのが、目に飛び込んでくる感じですか？」

関崎「人が通らない山並みに包まれた、荷車がやっと通れる山道を行き、周りこむと上部に洞窟口が現れた」

神宮「開口部に至る方法は？」

関崎「山道から25度くらいの斜傾面を約30メートル、藪漕ぎして上がると開口部に達する」

神宮「開口部の形と大きさ、地下壕の広さを数値で」

関崎「開口部の形状はアーチ形、間口4間、高さ6間、奥行きは12間くらいか」

この関崎さんの証言について、いま一間を1.82メートルとして上記の数値をメートルに直すと、間口7.28メートル、高さ10.92メートル、奥行き21.84メートルとなる。これは偶然にも村田社長の記憶に残っていた数値と共通する。

最後に、この巨大な壕を何時、誰が掘ったかについては、「茅ヶ崎市史 現代2」に当時の独立工兵第64大隊中隊長瀬谷胖氏の証言として次のように記載されているのが参考になる。

「私は昭和20年3月、第53軍が出来た時に、旭川の工兵第7連隊から内地防衛に来ました。その時に工兵第64大隊が出来て、中隊長をやっておりました。53軍の下に140師団「護東」が出来て、私の中隊が配属になったわけです。それで鎌倉山（岩盤で強かった）から大磯山までの築城をやりました。私の中隊の部下（4個小隊）は250名で、その他に馬が15、6頭いました。穴を掘る専門の工兵隊は私たちだけで、民家に一個小隊くらいずつ分宿して作業をしました。

戦後、昭和21年の1月に、米軍の爆撃調査隊の少佐という人が私の家に来て鎌倉山、伊勢原の奥、千畳敷を一日がかりで案内しました。そうしたら、みんな空中写真で分かっているが、鎌倉山の1ヶ所だけが分からなかったと言っていましたとある。

事実、鎌倉山の岩盤は強くて層が厚く、今でも「おぼけトンネル」の極楽寺寄り出口のところに立ち止まって上を仰ぐと、十数メートルの高さに岩がそそり立っているのが確認出来る。

第53軍司令官赤柴八重蔵中将は個人的な日記「53A重要日誌」を残しておられるが、その中で鎌倉山に関する記述が次のようにある。（茅ヶ崎市史現代2）

「5月18日（金）午前江ノ島海軍備作業を見学す。午後1300より物部師団長、平沢連隊長と共に鎌倉山陣地を視察し、1700より・・・」

6月27日（水）阿南陸軍大臣あなみ1100司令部に到着さる。昼食、突台山、護東鎌倉山陣地視察あり。夜会食に招かる」

写真 (A)

旧わかもと別荘玄関

鎌倉山の東はずれに6万坪の敷地を持つわかもと社、元社主の長尾欽彌氏の旧別荘がある。この玄関は林間病院へ行く道の途中にある。



写真 (B)

おばけトンネル

極楽寺側の出口で写真左手前の三輪車のうしろに弾薬庫入口があり、現在はコンクリートで塞がれている。



写真 (C)

おばけトンネル

当時の様子を体験された神宮角太郎元少尉の案内でトンネルを視察した。



写真 (D)

おばけトンネル

トンネルは写真のように岩盤の下に掘られた。戦後、陣地を視察した占領米軍が、ここだけは空中撮影で探知出来なかったと述懐したという。



写真 (E)

おばけトンネルのイラスト

管理会社の社長の村田氏が弾薬庫閉鎖以前の状況を思い出して描いた図面をイラストにしたものである。



写真 (F)

海軍による鎌倉防備計画

平成14年10月17日

語り手、案内人 加藤 俊作さん

坂倉 孝一さん

今回の戦争遺跡調査において唯一海軍関係者による証言を得ることができた。

まず語り手（案内人）加藤俊作さんについてであるが、平成8年8月に戦争体験記出版委員会より発刊された「回想 戦争と鎌倉人」の出版代表者が、当時海軍鎌倉防備計画担当者のひとりで予備学生出身の海軍少尉であった加藤さんである。

この「戦争と鎌倉人」の一項に鎌倉中央図書館近代史資料室の平田恵美さんが執筆しているご縁により、今回加藤さんと同期の海軍少尉で、やはり防備計画担当者のメンバーとして同時に鎌倉に赴任された坂倉孝一さんのお二人が出席され、主に坂倉さんの体験談を中心として話しが進められた。

1. 入隊より鎌倉赴任まで（坂倉さん）

坂倉さんは昭和18年12月、学徒出陣の二等水兵として神奈川県武山海兵団に召集され、翌19年12月第4期予備学生出身の海軍少尉に任官。20年2月に横須賀警備隊より新任少尉20人が三浦半島防備計画要員として計画立案と設営指導を命令された。内4人が鎌倉方面陸戦指導官として赴任し、その中に坂倉さん、加藤さんが含まれていた。

2. 防衛計画着手まで

三浦半島防備計画は、陸戦のベテランといわれた、横須賀警備隊参謀の柚木哲少佐が主任で、鎌倉方面のヘッドは予備学生出身の山口竜雄大尉が発令された。大体の構想は示されたが細目は指導官に一任され、陣地構築の重大な計画と工事の実行を任官2ヶ月の新米少尉に負担させる大胆さにびっくりすると共に、任務の重さに背筋が寒くなる思いがした。

当初、山口大尉の着任まで4人の少尉は鎌倉に自宅のある加藤邸に集まって意見を闘わせ、米軍の最終目標である東京占領には、まず湘南海岸に上陸ののちに、横須賀海軍基地の制圧に向かうと予測、鎌倉は朝比奈峠を経て横須賀方面に向かう通路に当たると想定した。

4人で鎌倉の裏山を歩き廻り、最終的に対上陸迎撃陣地を下記6方向に選び、横穴陣地の掘り出し口や銃眼の位置を決定、各地点に2銃座を設置する計画を立てた。

- (1) 小坪方向（光明寺の裏山）
- (2) 材木座方向（五所神社の裏山）
- (3) 名越方向（安養院の裏山）

- (4) 佐助方向 (旧柳原二位局邸裏山)
- (5) 長谷方向 (甘縄神明社付近の裏山)
- (6) 稲村ガ崎 (海岸に面して)

3. 陣地構築の経過

海軍では、サイパン・硫黄島・沖縄での戦闘経験により、米軍は上陸作戦の開始より徹底的な艦砲射撃と空爆実行のパターンにより迎撃の火器は横穴式の陣地深く設営するよう教育されていた。

当時の火器は25ミリ対空機関銃で、上陸地点に集中射撃を浴びせるように配置を計画、即ち、小坪と稲村ガ崎の地点からは側面から、他の4地点は正面からの射撃となるように設計した。

なお、交戦時、爆風の被害を最小限に止めるため、坑道は屈折部分を多くし、機関銃発射の際、噴出ガスが逆流することなく外部に出るよう坑道は仰角にするなど、細部にわたって検討した。

小坪のように銃座の位置が海面に近く、裏側が逆に高くなっている所では、裏からの坑道を一旦掘り下げる必要があるため階段をつけたり、五所神社裏山では、落盤があって、担当者加藤さんは木の根っこに助けられもした。

又、反対側から掘り進んでいるうちに現在位置が分からなくなって、斜面に耳を当てて、内部からの音をうかがうなどといった笑い話もあった。

安養院の裏山は坂倉さんが担当したが、地盤が弱いので丸太を組んで補強した。

又、穴の出口が民家の裏庭に出てしまい、住民からゴトゴト音がすると苦情があり、まさか陣地構築とは言えず、いいわけに苦労した。

一度「穴があきました」との報告があり、見に行くと昔の洞穴にぶつかり落ち込んだものとわかった。(鎌倉時代のやぐらと思われる)

又、掘りだした残土を放置すると上空から発見される恐れもあり、処理にも手数を要した。

穴掘りの測量は、海軍施設部が担当、作業の補助に朝鮮の若い人が働いているのが散見された。実動部隊は海兵団から別途派遣され、堀削は当時のこととてすべて手掘りで、一日の進度はせいぜい2メートル位と思われる。

どの穴も居住区や弾薬・食糧などの場所も必要とされたが、そのような付帯施設は別にして、一応、貫通はしたが肝心の火器類は未到着のまま終戦となってしまった。

4. 陸軍との関係について

陸軍と海軍との間には、上層部での話があったか明らかではないが、現地の指揮官レベルでは役割分担などの取り決めはなく、只、稲村ガ崎から東は海軍、西と鎌倉山から内陸は陸軍がやるものと了解していた。

ある時、坂倉さんが稲村ガ崎の先へ行き、陸軍の中隊長と会う機会があった際の会話ではお互い情報を共有していないこと、又、どうもこのような築城では上陸阻止は無理だろうとの認識を持っていたこともわかった。

5. 終戦日前後の状況

沖縄の敗戦や、連日の都市空爆の激化により、本土決戦が現実味を帯びてくるようになって、海軍もついに臨戦体制（対上陸作戦）を敷かざるをえない状況となり、20年7月1日付で、横須賀鎮守府連合特別陸戦隊が編成された。

内訳は、大船・鎌倉地区、逗子・葉山地区、久里浜・大津地区、三浦・野比地区の4地区に各1個戦隊。他に砲隊1、戦車隊1、計6個の特別陸戦隊である。

この時点で、坂倉さんは久里浜・大津地区の中隊長代理に配属されたが、中隊長が着任する前に、大津小学校駐屯中に終戦を迎えた。

加藤さんは、編成以前に転出されていた。

海軍の陣地構築の跡を検証

平成14年10月17日

語り手、案内人 加藤 俊作さん

坂倉 孝一さん

午前のお二人の話に引き続き、午後はマイカー2台に分乗、お二人の担当個所に出向いた。

1. 安養院裏山

坂倉さんが担当した穴は、安養院の東奥にある大宝寺の前を通り抜けたY氏宅の庭、左手の斜面に原型のまま穴の口が開いていた。

天井は人が立って通れる高さがあり、壁面は素掘りのまま、足元も凹凸のままである。特に出水や落盤の形跡はなかった。

入口より20メートル奥で左右に分岐しており、左側は下り傾斜となって安養院方向に向かっていると思われる。

又、右側は10メートルでやや直角に曲って、やはり下り傾斜で八雲神社方向となっている。(別紙参照)

安養院側の入口は、最近火災にあった民家の敷地内にある為、確認できなかった。

2. 五所神社裏山

加藤さんが担当した、材木座五所神社社殿のすぐ裏が山であり、この斜面の上方向に穴の出口があるということで、確認したかったが、急斜面の上に樹木や藪が深く、現場に入ることができなかった。

ここは作業中に位置がわからなくなり、地肌に耳を当てて中の気配をうかがったところである。

掘り口である反対側の、「紅が谷」に廻ることは当日は時間がなく、次回に訪れることにした。

加藤さん、坂倉さん共々、ご自身の担当個所では足どりは軽く、50数年振りの構築現場に感慨深い様子に見えた。

安養院裏山陣地構築の跡

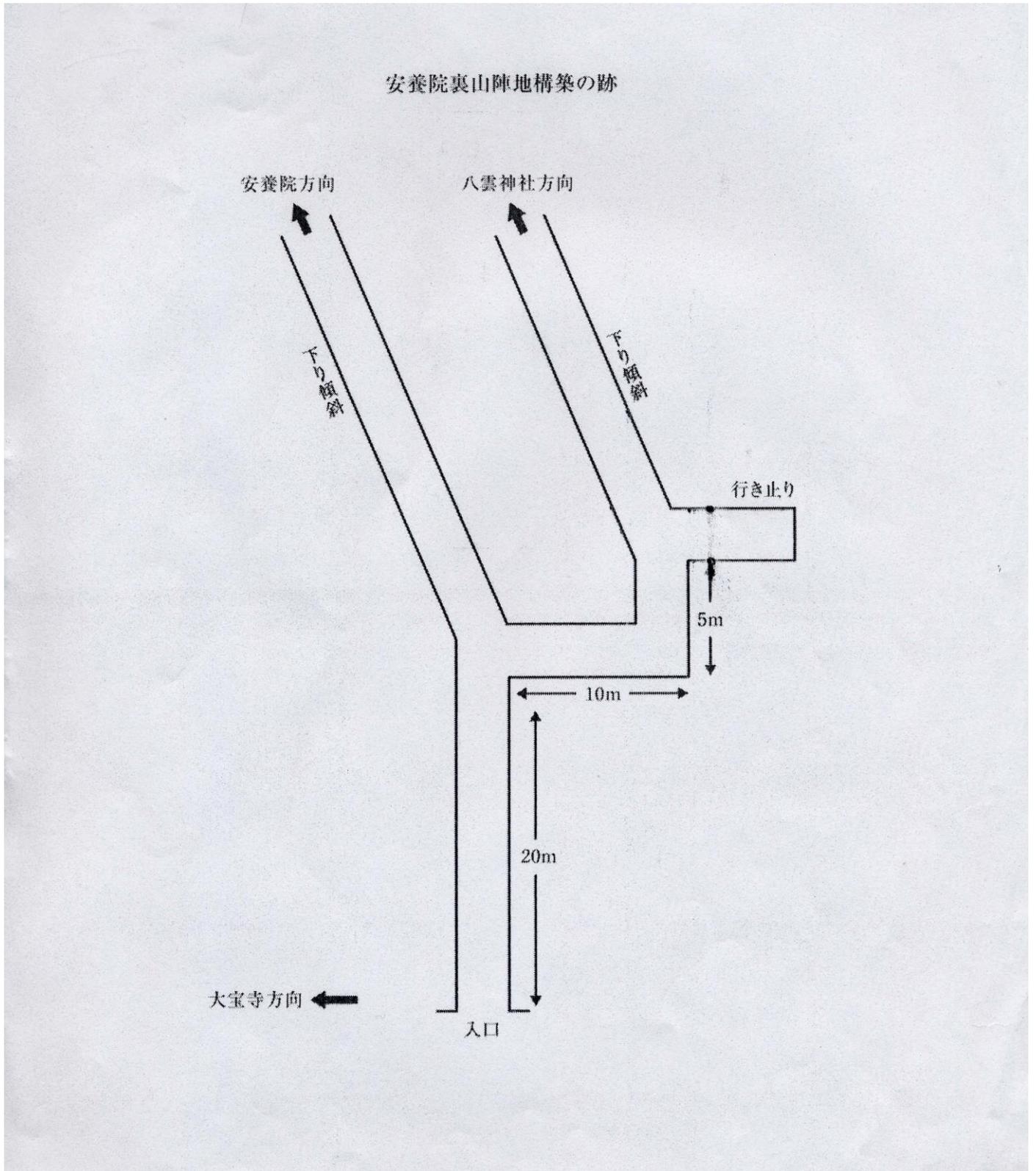


写真 (A)

安養院裏山の横穴

写真左より計画担当者の加藤さん、坂倉さん、図書館の平田さん、C P C小林(英)さん。



写真 (B)

安養院裏山の横穴の内部

上の写真の内部で安養院方面に出る左側の部分



写真 (C)

材木座五所神社の裏山

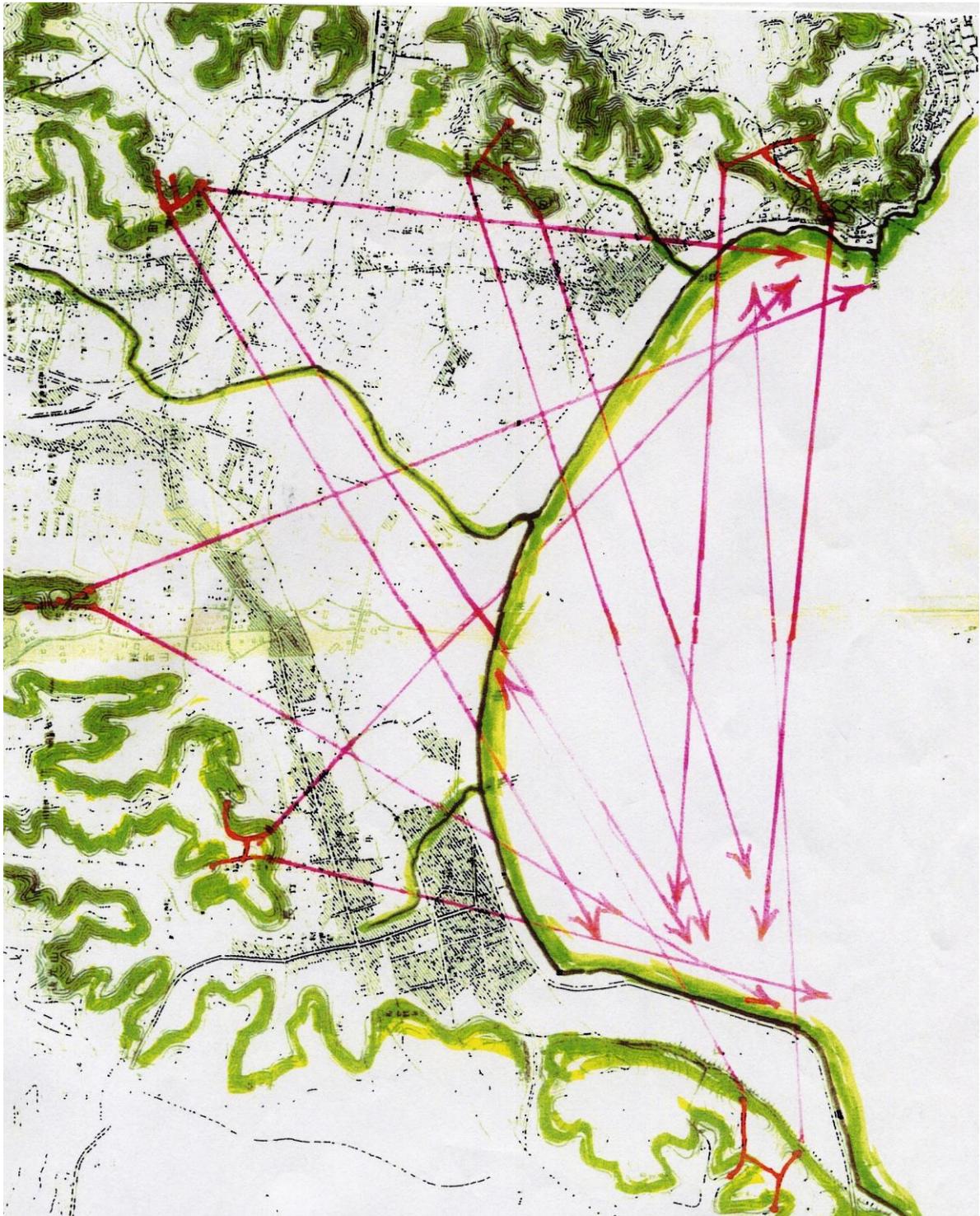
穴の出口は斜面上部にあるが、急斜面のうえ、樹木や藪が深く現場確認が出来ない。



海軍の鎌倉方面防備計画（坂倉氏作成）

昭和20年2月、任務に就いた予備学生出身の海軍少尉達は、鎌倉の裏山を歩き回り、6ヶ所の迎撃用陣地の地点（小坪、材木座、名越、佐助、長谷、稲村ガ崎）を決め、構築作業に取りかかった。

（当時の関係者が記憶をたどり作成した略図であるが実際とは異なる部分もある。



II 軍関係施設

鎌倉で海軍の練習機を作っていた富士飛行機（1）

平成12年2月17日

語り手 西山利彦さん

この記録は、山崎のこの工場の近くに住み、工場の立ち上がりから子供の目で見ている西山利彦さんの話を伺ったものである。

「語り手の略歴」

西山さんは、昭和4年生まれで、終戦のときは16才であった。家が山崎天神の山裾にあり、工場のあった場所から目と鼻の先であった。

1. 工場の敷地

工場の敷地は今の湘南鎌倉総合病院を含むその裏一帯の場所で、ここには低い山と水田があった。山は山崎天神の山よりも低く、今でもその一部が残っている。

敷地のあらまは、病院の前を走るモノレールに沿って大船より最初の道を右折、青果業者「いっきゅう」の地点で右折、大船病院に至り、さらに右折して山のガケに沿って総合病院へ至る区域である。

「いっきゅう」から、大船病院への道は、山崎と^{だい}台（地名）を分ける境界線であり、工場は山崎から台へは踏み込んでいなかった。

2. 山の取り崩し

この山を取り崩し始めたのは、昭和12年私が小学校2年の時であったと思う。

当時のことであるから、今のような大きな機械はなく、手作業で山を崩し、トロッコで土の搬送を行っていた。土は水田の埋め立てに使われ、残った土は4～500メートル先の東洋化学の所へトロッコと牛の引っ張る車で運ばれた。トロッコは今も残る鎌倉バッティングセンター横の小川の土手にレールが敷かれてあり、子供たちがそれに乗って遊んだものである。

病院のところだけ二次工事とされた。ここは、西山さんら多数の人の土地が入り組んでおり、また共有地もあった。病院のところの山裾には7軒の墓地もあり、すべて強制撤去されることになった。

竹やぶから往時のものと思われる刀の柄が出土した。西山良平さんのところには、大きな松ノ木があって、子供たちが木登りをしてカラスの卵をとったりして遊んだ。

当時の作業員は、ほとんどが各地から集められた土方であった。みな大船駅から歩いて通っており、その数数百人であった。終戦に近い頃は動員学徒もいたと思われる。

3. 富士飛行機

工場群の中に鉄筋の建物があり、リベット打ちで溶接の代わりをしていた。ここはエンジンの組立工場であったようである。あとは木造の建物ばかりであった。

この工場で作っていたものは海軍の練習機いわゆる「赤とんぼ」であった。木と布で出来ており、身軽な動きは米軍の注目を引いた。ただ出来上がった製品の搬出を見たことがない。分解して搬出していたのだろうか。

富士飛行機は大阪の日電工業の子会社で中島飛行機の関連会社である。戦後は富士興業を経て、昭和24年明治工業となった。

昭和20年2月11日に撮った米軍の航空写真では、この富士飛行機が空爆のターゲットにされていたのが解る。終戦がもう少し長引けば、空襲にあったことと思われる。

現在、当時の建物が一部残っている。湘南鎌倉総合病院の裏手に位置する「東京スリーブ株式会社」の建物がそれで、表面入り口の鉄製の蛇腹や階段の作りなどにその面影を残している。

この会社の総務部長さんの話では、先日埋没工事のため、地所の一部を掘ったところ、固い地盤（山であったところ）と柔らかい地盤（水田を埋め立てたところ）が出てきて、見積り外の工費がかさんだとのことである。

もう一つ、大船病院の旧病棟の建物は当時のものである。軍用工場には必ず付属の病院が建てられることとされた。

鎌倉で海軍の練習機を製造していた富士飛行機（2）

平成12年3月22日、5月17日

語り手、案内人 小川英次さん

この記録は、戦時中富士飛行機に勤務していた小川英次さんから、当時の様子を伺ったものである。

「語り手・案内人の経歴」

小川さんは、大正14年生まれで、昭和14年に小学校（高等）を卒業するや、地元にあるこの会社に第一期少年工として働きに出た。場所は現在の湘南鎌倉総合病院のあるところである。この会社は昭和12年頃から畑製作所という名前で操業していた。本社は東京の蒲田にあり、従業員はここから来ていた。

1. 畑製作所で製造していたもの

当時この工場では、海軍の巡洋艦や駆逐艦から水上飛行機を発射する装置であるカタパルトを作っていた。これらの軍艦には、航空母艦のような滑走路がないので、この発射台のエンジンをフル回転して飛行機を火薬で後ろから突き出し、飛び出した飛行機は空中に舞い上がったあと、帰りは脚代わりに水上に二本のフロートによって着水する仕組みになっていた。飛行機は吊り上げ機によって甲板に戻される。私が入ったときには、カタパルトの製造はやめていて、94式水上飛行機のフロートの修理をはじめていた。

材料はジュラルミンで出来ているが、使用している内にビスが緩んで水が漏れて入ってくるので、ビスの取替え、塗料の塗り固めなどの作業をして再生していた。この作業の班長は渡辺という人で、その下に海軍兵曹の若林さんがいた。

ジュラルミンを延ばす作業は渡辺さんの特殊技能によるもので、彼が徴用されたあと作業が止まってしまい、急遽徴用解除とされることがあった。

私はこの二人の補助役で、三人はチームワークを組んでいた。

私は午前中は工場の中にある青年学校に通って授業を受けており、午後に作業に参加した。青年学校は4年制で、中学程度の教育を行い、校長は大野厚行という海軍中佐であった。3ヶ月の実習で機械をいじらせてもらい、私は板金の技術を会得した。

2. 富士飛行機に社名変更

昭和16年頃、畑製作所は富士飛行機となった。仕事はそのまま引き継がれていた。

富士飛行機の主な仕事は93式中級練習機の製造で、われわれはこの飛行機を「93中錬」と呼んでいた。

工場の従業員は2,000人くらいであった。北鎌倉女学院や鎌倉学園から動員学徒がきていた。また宮城や福島などから徴用工がきていて、鎌倉八幡宮の近くの長沢

旅館や松岡旅館などに宿泊して、朝ゾロゾロと歩いて出勤するのが見られた。

工場のレイアウトは終戦時の記憶によって描いてみると、今の郵政宿舎のあたりに門があり、すぐ本社事務室の建物があった。二階に更衣室があつて、階下は工具置き場となっていた。今現存する「東京スリーブ」の建物は、本社事務所に続く当時の工場のものである。工場は幾棟にも分かれており、組み立て工場が大きなスペースをとっていた。他に機械工場、旋盤工場、塗装工場など、必要に応じて増築されていた。

飛行機の胴体は、四本の鉄パイプからなり、すじかいで固定し、それを木片で囲むように抱かせて胴体を作っていた。木の上に衣張りをし、最後に塗装で目潰しをして（いわゆるコーチング）水漏れに備えていた。金属製と同じように流体に仕上げているわけである。翼の製造も同じで、パイプを芯にして木で覆った。

最後、全体をオレンジ色に塗り上げて仕上げた。エンジンはここでは作らず、群馬県の中島飛行機から取り寄せて取り付けた。エンジン・テストは、今の湘南鎌倉病院の玄関の場所あたりに作られたドームの中で、夜間に行われた。その際には、飛び出さないようにフックで固定して、昇降舵も方向舵もテストされた。取り付けとテストのために、中島飛行機から工員が出張で来ていた。

当時、当工場に徴用されていた内田喜代子さんの証言によれば、一機出来る度に、太鼓をドンと打ち鳴らして完成を祝っていたとのことである。機密であるから生産台数は知らされてなかったが、十日に一機ぐらいではなかったかと思っている。（戦後に米軍が、この練習機の身の軽さが木製であることに驚いたとのこと）

3. 青年学校と生徒寮

青年学校は今のJRの社宅のあるところにあり、県外から多くの少年工がきて四年制の授業に参加していた。生徒の数は200人くらいおり、「忠」「孝」「義」と呼ばれていた三つの寮で生活していた。「忠」の寮は学校の敷地の一画にあり、「孝」の寮はその少し奥、松下社宅の北側の丘陵地（現在は一般住宅）に、「義」の寮は一番奥、台神明神社の前にあった。食堂は工場の裏門を入ったところにあり、生徒は食事をすませて、それぞれの現場へ向かった。

実習は最初、機械工場の一角を借りて行っていたが、工場が忙しくなって移転することとなり、今の藤和シテイホームズのところにあった西山さんの養鶏所の跡二棟を借りることになった。トリの餌に不自由して養鶏所は閉められていた。

現在のシテイホームズのオーナーである西山さんの叔父さんにあたる人である。山崎のバス停から大船病院への道は、寮に向かう生徒の通行路となり、当時の軍国調を反映して軍歌行進をしていた。「歩兵の本領」などの軍歌が歌われた。私は3年くらい工場で働いたあと、実習指導員となって工場の現場から離れた。

時には休暇の人に代わって寮長もつとめた。食堂の献立は、当時の食料不足から粗

末なものであったが、じゃが芋などの野菜は深沢の矢沢さんが一手に納めていたように思う。24時間勤務ではなかったが、木工所など工場によっては夜勤があったようである。

4. 工場の敷地と地下壕

工場の敷地は、畑製作所の時に山が切り崩され、低いたんぼが埋め立てられた。山崎の谷戸から流れている川は、大船病院前から今の道に流され、東京スリーブ社のところにある鉄塔のところで左折して土中に入り、大きな土管で工場の下を斜めに横切って今のバッテングセンターのところに出されるよう工事された。

大船病院旧棟の前、JRの社宅のところに青年学校の校舎と講堂およびグラウンドがあった。一方、大船病院旧棟のうしろの道を山の方に行くと、今貯水池になっている山のとっぺんに高射砲陣地があり、その下に兵舎があった。

ここは今、Sさんという人の家であるが、戦後この兵舎を住まいとして使った。当時、Sさんは食堂の責任者であった。

青年学校の上に、会社の幹部の使用するような建物があった。このクラブの下に3ヶ所か4ヶ所穴の入り口があって、中は碁盤の目のような壕が掘ってあった。軍は恐らく、富士飛行機の地下工場にしようとしていたのではないか。

現在この壕の上に住宅が建てられている。私は終戦時は軍隊にいて、しばらくここにいなかったが、復員して帰ってみると、私の知らなかった壕があり、しかもまだむき出しになっていたので、自由に中へ入って探検したことがある。中は立派なもので、いつのまに掘ったのかびっくりしたものである。恐らく昭和18年頃から掘っていたのではないか。(内田さんの証言によれば、朝鮮人労働者が作業に当たっていたという)

5. 対ソ戦争用

「93中鍊」に仕掛かる前、昭和14年頃、畑製作所で急遽対ソ戦争用の雪轆車を作ることになり、10台ばかり納めたことがある。小型バスくらいの大きさで、車輪のかわりに前に一つ後ろに二つ轆がつけられ、車体の内部は木製で外はジュラルミン、屋根には360度回転の機関銃座が据え付けられていた。エンジンは自動車用のものではなく、飛行機用のものでプロペラ付であった。日本は丁度昭和14年にノモンハンでソ連にやられたので、戦争が長引くとの想定で発注されたのではないか。その後、日本はソ連との間に不可侵条約を結んだので、雪轆車の製造も不要になった。

6. 当時の給料

私が入社した昭和14年の時の給料は、時給で7銭であった。一日8時間として日給56銭であった。3年くらいして時給10銭くらいになった。ボーナスはあつ

た。渡辺組長や若杉伍長がポケットマネーをくれたことが、とても嬉しかった。内勤の事務系の人の給料はとてもよかった。

7. 戦後の富士飛行機

復員で戻ってきてからは、富士飛行機も明治工業となっていて平和産業に従事し、リヤカーや下駄の製作をしていた。当時の食糧難から会社も農業に力を入れるようになって、じゃが芋など作っていた。また木工からおがくずが出るので、これを燃料として製塩などもした。ここで取れる農作物は貴重なもので、退職金代わりに現物支給したり、お金に換えたりした。

しかし昭和23年に農地法が出来て、素人農業も駄目になってしまった。

鎌倉市の消防署に勤務するようになったのは、昭和25年のことである。

「追記」

鎌倉の太平洋戦争の痕跡展を見て、当時富士飛行機に学徒勤労動員されていた佐藤栄作さんから資料を提供していただいた。

1. 富士飛行機に動員された学校は下記の7校である。
北鎌倉高女（5・4・3年）・神奈川県立新庄高女（4年）
東京物理学校（一部生徒）・鎌倉中学（3・1年）・山形県立新庄高女（4年）
乃木高女（5年？現湘南白百合学園）・横浜工専
2. 富士では「木製機」を作っていたとあるが、主翼が木製、胴体が鋼管溶接の木金混合製で、それを羽布で覆ったものである。

鎌倉で海軍の練習機を作っていた富士飛行機（3）

平成14年6月27日

語り手 後藤鉄男さん 八重田和久さん
館 泰生さん 金子富雄さん
清田昌弘さん

もと富士飛行機に勤務していた4人の方が、清田昌弘氏（郷土史家）の案内で図書館を訪問され、証言をいただいたものである。

「語り手の略歴」

後藤鉄男さん：明治43年（1910年）生まれの93才、鎌倉市台^{だい}に在住。富士飛行機勤務中の昭和19年8月に召集を受け、昭和21年8月復員された。

八重田和久さん：現在、愛知県一宮市に在住。

館 泰生さん：当時は小田原中学の4年生であったが、父親が富士飛行機の常務取締役とし活躍中で、谷戸池の富士飛行機の役宅に住んでおられた。父親の館賢三さんは昭和16年7月管理部長に就任、航空機機体製造の業務を担当、後青年学校の校長を経て、17年8月に常務取締役に就任された。終戦とともに、飛行機の製造を中止、9月に社名を富士興業と変更、民需品の生産会社に転換、取締役として生産、労務を担当、労使の調整に苦勞された。

金子富雄さん：昭和19年4月から8月まで機械部門に勤務されていた。
現在、横浜市南区に在住。

1. 富士飛行機の生い立ち

もともと中島飛行機の技術指導を受けていた富士飛行機は、日本電力という電力会社から資金と人のでこ入れを受けて大きくしてもらって、蒲田に本社工場を作った。

その後、昭和17年頃深沢にあった畑製作所が一（館さんの記憶では）一日本航空兵器を合併して富士飛行機の大船製作所になった。

2. 活動内容

作っていたのは海軍の93式練習機で、戦争末期には特攻兵器である「桜花」とか「秋水」という飛行機を作りはじめた。実際に完成したかどうかは知らない。

この「桜花」は建長寺の「神雷戦士之碑」に刻まれた桜花部隊の桜花ではない。

谷戸池の館さんの役宅の場所には富士飛行機の役員などの住居があり、今もその家族や子孫が居住されている。青年学校の先にあった「義」の寮は家族の社宅であったが、最近まで台友荘として一般に利用されていた。

青年学校に隣接した大きな地下施設は機械・旋盤工場として終戦時まで稼動していた。終戦直後、壕に探検で入った館少年は機械類がぎっしり詰まっているのを目撃している。

なお、工場の大船寄りの山の上に設置された高射砲は高射機関砲であるとのこと。一機落とすと、一週間の休暇がもらえたということである。

富士飛行機は戦後社名も変えて平和産業に転換したが、昭和23年7月に倒産した。館さん宅の近くには穴がいくつもあった。とくに稲垣さんのうちに掘られた穴は大きく、海軍の横須賀艦政本部の疎開事務所として利用されていた。戦後中に入ると書類など一杯散乱していた。水が溜まるので板が張ってあった。穴は柏尾川まで通じていた。一方陸軍は関谷へかけて穴を掘っていた。

富士飛行機と海軍工廠深沢分工場周辺の航空写真（出典 鎌倉市中央図書館）



写真 (A)

旧富士飛行機跡地に建設された東京スリーブ (株) の工場
全景



写真 (B)

現存する当時の工場の一部
現在の東京スリーブ (株)



写真 (C)

当時の富士飛行機の付属
病院

大船病院の旧病棟



写真 (D)

富士飛行機の地下工場

入口はコンクリートブロックで閉じられている。



写真 (E)

写真 (F)

写真 (G)

富士飛行機に学徒動員された鎌倉中学4年生

(長谷 立川実氏写真提供)



横須賀海軍工廠深沢分工場（1）

平成12年11月21日

語り手 石井道喜さん

1. 海軍工廠分工場の建設

私は昭和4年、深沢で生まれ、今年71才になる。ここに海軍工廠の分工場ができた昭和17年は、私が丁度旧制中学校2年の時であった。私の家はこの工場の正門を入ったところにあった。梶原の部落は、私の家が一番奥にあり、屋号は「大瀬戸^{おおせど}」といていた。背戸とは奥の意味で、その一番奥にあったからこの名前がつけられた。周りはたんぼばかりで、まだ専用道路はなかった。私の生まれる1年前の昭和3年に道路建設の話があり、昭和4年に完成したが、家は道路によって母屋と庭が横にぶたざられることとなった。工場が建つまでは、私の家から東海道線の線路まで遮るものがなく、汽車の行き来が見えていた。鉄道の前に柏尾川が流れており、狐火が川に沿って連なって見えることがあった。昭和17年の暮れから18年の春にかけて工場が建つというので、母屋や物置など4棟が、専用道路の北側から反対の南側へ移転させられることとなった。この移転は建物を壊すことなく、コロで運ぶ方法がとられた。当時の母屋は藁葺きであったが、昭和35年ころ、瓦葺きに葺き替えた。当時道の北側にあった家は6軒といわれているが、4軒だったと記憶している。

昭和17年に海軍技師が二人来て、私の家の物置を事務所にして測量を始めた。中沢という技師とその下に技丁として竹村という人がいた。竹村さんはいい人で懇意にされていて、終戦近くまでいたと思う。工場になる土地は、私どもの土地や、梶原、寺分、町屋の人の土地であったが、接收されることになった。父は補償の交渉に深沢の役場ではラチが明かず、横須賀の憲兵隊まで出向いていた。かくて2町歩あったたんぼや畑は接收されたが、移転の費用など差し引くと半分も残らなかったと祖父や父がぼやいていた。たんぼはまわりの土で埋め立てられ、移転の遅れていた我が家が、2メートルくらいの埋め立ての土で取り囲まれてしまった。移転は専用道路のバスの運行に支障のないように、真夜中の10時から朝の4時くらいの短時間のうちに行われた。高圧線が邪魔になるので、それを高く持ち上げたりした。

2. 泣き塔のこと

私の家の近くに「陣出^{じんで}温泉」と「神明^{しんめい}温泉」があった。陣出温泉は坂道を下ったところ、今の児童会館のところであり、神明温泉は泣き塔の左わきにあった。ラジウム温泉で、茶色い水が出ていた。陣出温泉は寺分の岩壁という人の所有で、鉦脈から掘抜き井戸でくみ上げていた。かつては梶原の山を下ってこの温泉に寛ぐと、目の前は鎌倉山まで遮るものもない一面の田んぼで桃源郷のようだという人もあったくらい

である。泣き塔は、このあたりが古戦場であって、戦死者の供養として建てられた文和五年（1356）の銘のある宝篋印塔であるが、昔、この塔を手広の青蓮寺に移したところ、住職にもとのところに移してほしいと塔が泣いたと伝えられている。また分工場が塔の回りの高みを掘削して地下工場を造成しようとした時、ハッパがかからなかったということである。

専用道路が出来る前は深沢から大船の方に行く道は、二つしかなかった。一つは今のセブンイレブンのところから奥にはいって深沢中学の方から山崎へ抜ける道と、泣き塔のところから山へ上って町屋へ行く道とであった。等覚寺は通称「休み場山」といい、全国から鎌倉へ来た人が休憩する場所であった。専用道路は町屋の方から山を開いて通されたが、はじめ勾配がきついというので1メートルか2メートル高さを削ってつくられた。防空壕の穴や地下工場が今の市営住宅の下に掘られた。1ヶ所、石を切り出していた石切り場があった。鎌倉には散在ガ池のところにも石切り場があったが、こちらの方が大きいと思っている。中は奥深く、昔は蝙蝠もいた。今は取り崩されて見る事が出来ない。

3. 疎開工場で働く動員学徒

疎開工場が梶原の道手谷戸^{どうて}にあった。現在の梶原2丁目あたり、梶原のロータリーから左奥の台地になっているところである。ここで動員学徒として働いた鎌倉郷土史研究家の清田昌弘^{せいた}さんによれば、「建物内には各種の機械がところ狭しと並び、床上には何本ものコードが縦横に延びていた。ここでは川名の工員宿舎から通ってくる坂下高女^{ばんげ}の4年生たちが、鉢巻きにモンペ姿で旋盤に向かって作業をしていた」「東京帝大、日大予科、藤沢中学（藤嶺学園）、福島県坂下高女、湘南中学などの各校から330人が動員された。製品は魚雷、水雷、爆雷、水中探信機などであった」とある。『回想－戦争と鎌倉人』 私は昭和19年の6月から兵役についたので、勤労働員でやってきた学徒たちの働きぶりについては直接には知らない。

4. 鎌倉山の人たち

当時工場周辺の人々は専ら農業に従事していて、米、麦など供出にいそしんでいた。工場に直接納めたりすることはなかった。うちの父は若い気のあった3人、中田さんと島村さん（片岡幼稚園経営）とで野菜や花卉の品質改良などをしていた。特に父は鎌倉山に顧客を開拓して売りに行っていた。近衛（文麿）さんや田中絹代さん、山本譲二さん、藤原義江・アキさん夫妻などに入出入りしていた。正月前になると、鏡餅の注文がはいる、リヤカーで笛田の夫婦池の横を通過して運び上げたものである。私も後押しをした思い出がある。

（注）海軍工廠深沢分工場は戦後間もない昭和20年10月、占領軍の承認を得て国鉄大船工場へ転換した。

写真 (A)

泣き塔

元横須賀海軍工廠敷地内に
ある泣き塔



写真 (B)

泣き塔周辺の風景

右側の森が泣き塔のあると
ころで、左側は東日本 J R
の社屋である。



写真 (C)

分工場敷地東側の地下工場
の跡と思われる入口



横須賀海軍工廠深沢分工場（2）

平成12年11月16日

語り手 水谷耕一郎さん

1. 深沢分工場の建設と終焉

はじめに

大船駅から湘南モノレールで、三つ目の駅「湘南深沢」で降り、駅前の道を大船へ150メートルほど戻ると、左側にJR東日本（株）の鎌倉総合車両所の看板が見られる。ここが、嘗ての「横須賀海軍工廠 深沢分工場」の跡地である。（現在、その西に住宅展示場があるがここもかつては分工場であった。）

当時の状況についてはJR東日本の前身である日本国有鉄道が発行した「大船工場三十年史」（昭和51年10月30日刊）に詳しく記載されている。それにより同工場の建設とその終焉について簡単に記すこととする。

（1）工場の建設

昭和16年、戦雲急を告げる頃、横須賀海軍工廠の拡張が計画されて、同年5月6日には一旦、逗子市池子に分工場の立地を内定したが、ここには火薬庫があり、工場を建設するには危険が伴うということで、新たな候補地の選定を急いだ。海軍は、担当者をこの深沢村に派遣し検討した結果、広大な土地と四方山に囲まれたこの場所が最適地であると判断し、昭和17年（1942年）1月、海軍工廠の工場拡張を深沢村に変更し決定をみた。そして、17年7月「横須賀海軍工廠造兵部深沢分工場」の建設が決定された。

直ちに土地の買収がはじまったが、その面積は約12万坪（396,000平方メートル）であり、そこは、ほとんどが水田で、建築物は民家が6軒ばかりで、土地所有者50名ほどの協力も得られ移転補償がスムーズに進んだといわれている。

土地買収が済んで、昭和17年9月、海軍の手によって工事が開始された。周囲の山を崩して水田を埋め立て整地したうえで、昭和18年4月、建築工事が始まった。この分工場は魚雷の生産を目的としており、魚雷組立工場、第一魚雷部品工場、第二魚雷工場、精密工場などそれぞれの面積3,000平方メートルの建物がつぎつぎと出来上がった。（最終的には9棟になる）そして、昭和18年10月、海軍の幹部職員と熟練工員約200名が赴任し工場は稼動を開始した。

建物は急拵えの木造であったが、数多くの精密機械を備え、当時、呉など全国数ヶ所で生産していた魚雷工場のなかでもトップクラスの生産高であったといわれている。二式魚雷は最盛期には月産60台であった。従って、従業員も増加し、昭和20年5月には職員、労働者、勤労働員学生（大学生から中学生まで）、受刑者、植民地時代の朝鮮人労働者など、すべてを含めて3,139名にも達し、さらに、増員計画もあった。

これらの作業従事者のうち動員学徒は、川名（藤沢市川名）、村岡（藤沢市宮前）の寮や遊行寺、鎌倉山の民家などに分宿していた。

（２）学徒勤労働員

戦火が激しくなるにつれ、成年男子は前線に出てゆき、労働力不足が目立ってきた。そのため時の政府は、昭和19年1月、緊急学徒勤労働員方策要綱を制定、学生を軍需生産に駆りだすことになった。

深沢分工場でも労働力不足が甚だしく、魚雷の生産を勤労働員の学生に頼らざるを得なかった。当時の記録によると、昭和20年3月では合計330名で東京帝大、日大予科、藤沢中学、坂下高女（福島県）、鎌倉高女、湘南中学などの学生が生産に従事していた。330名のうち123名は坂下高女の女子挺身隊であった。その後、20年6月には、東京の動員先から回されてきた、都立一中の約100名が加わることになった。

藤沢にある藤嶺学園・藤沢中学校（現藤沢高校）のレポートには次のように記されている。「昭和20年の始めから深沢の海軍工場には、通年勤労働員の学生・生徒が連続して送り込まれた。同種の軍需工場としては、むしろ遅すぎる受け入れだった。トップを切ったのは藤中の二学年一クラス、次いで藤沢に分校を持つ日本大学予科学生の一団、そして動員学徒のリーダー格の東京帝国大学法学部学生たちが加わる。末期の様相を示し始めた戦局下、工場にはすでに動員学徒たちが手掛けるべきまともな生産作業は残っていなかった。深沢の主生産兵器は魚雷・機雷だが、枯渇状態の資材・部品は、それまでのレギュラーの工員と若干の女子挺身隊の作業量だけで十分といえた。それに熟練を要する旋盤・ボール盤の操作や、複雑な魚雷内部の組み立て作業は、ポット出の手につく仕事ではなかった。いきおい少年たちのエネルギーは、工場内外の雑役万般に振り向けられることになる。せつかくの動員学徒、集めた生徒たちを遊ばせることもなかった。資材運搬、防空壕掘り、清掃、仕事はいくらもあった。」

しかし、この頃には魚雷の製造もほとんど行われず、作業もなく、空襲警報が出るたびに、工場のはずれにある地下工場（と称されるが、実際はただの横穴に工作機械を置いただけのものであった）に避難した。この工場は米軍の空襲で爆撃を受けたことはなく、終戦まで工場の施設はそのまま残っていた。

（３）工場の疎開、分散

工場側は、日本各地に対する空襲が激しくなるため、工場の疎開、分散を計画した。

工場敷地の東側の山に横穴を掘り、工作機械の一部をそこに格納した。さらに、工場を梶原谷戸（現梶原二丁目あたり）に作り、作業を行っていた。当時、湘南中学から動員されていた清田昌弘氏によると「私たちは分工場入所後、まず研修所で基本的なヤスリの掛け方の講習を受けた。二、三日後には分工場を出て深沢国民学校のわき

を通り、大仏坂に向かう途中の脇道を左に折れた梶原谷戸に連れて行かれた。畑や水田の奥に幾棟かの木造平屋の建物が並んでいた。そこが疎開工場の一角であった。」（『戦争と鎌倉人』の「銃後の小国民かく戦えり」）ここには川名の工員宿舎から通ってくる坂下高女の四年生が働いていた。

もう1ヶ所の疎開先は、現在笛田にある深沢清掃事務所の裏山に横穴を開けてそこに移転する計画であった。しかしながら、どの程度作業が進んでいたかは今日では不明である。

（4）終戦

昭和20年8月15日、終戦を迎えた深沢分工場の従業員は約2,800名であったが、この頃にはほとんど魚雷も生産されず、工場から魚雷が運び出されることは無かった。8月18日には第一回目として希望者の帰郷が許され、以後9月にかけて帰郷が行われた。

その後、運輸省からこの分工場を鉄道工場に転換する希望が出され、昭和20年10月、当時の占領軍の許可を得て鉄道工場への転換が実現した。そして、現在は東日本旅客鉄道株式会社が鎌倉総合車両所として使用している。

2. 学徒勤労働員の学生の日常生活

この工場に動員された都立一中生は、終戦を間近に控えた昭和20年6月26日に、それまで働いていた東京の中央气象台と風船爆弾製造工場（帝劇、有楽座、日比谷劇場など）から移動をさせられたものである。当時のもようを記述している「都立日比谷高校百年史」によると、戦争も押し詰まった昭和20年7月1日現在の在籍数は、3年生3クラスで183名であり、そのうち何人が深沢への動員に応じたかは定かでない。おそらく100名ないし150名であったのではないかと推測される。

さらに、「3年生3クラスは、再度の動員として6月26日より大船の深沢分工廠で宿泊動員に入るが、人間魚雷運搬等の重労働に加えて食事状況も悪く、栄養失調や病人続出で終戦まで困苦の一月半であったという。蓋し本校動員中でも最悪例ではなかろうか」と記されている。

当時水谷耕一郎（筆者）は一中の生徒として深沢の工場で終戦を迎えたものである。今回の調査にあたり当時一緒に働いた仲間をさがし、当時の記憶を呼び覚ましてもらい、貴重な資料の提供をいただいた。以下に当時の工場における生活の一端を記することとする。（資料提供者秋山慎三氏、江波戸靖二氏）

（1）日常の作業

私たちが配属された6月26日から終戦の8月15日までの1ヶ月半の間、工場では出来上がった魚雷を見たことはなかった。おそらく資材もなく生産はストップしていた

のであろう。秋山氏によれば「1ヶ月ほどは、壕を掘る（機械移転のため）ためのモッコ担ぎばかりしていた。そして一応機械の移動が終わって、さて、これから仕込んでやるということで、各持ち場に配置された。（配置というよりは配分という実感）自分はミールリングであった。ネジを切る機械だったようである。2年もいれば、旋盤からセーパーなどすべての機械を使えるようにしてやるといわれた記憶があるが、すぐに敗戦となってしまった。工場敷地東側にあった横穴の中にあった地下工場はひどく湿っぽかったこと以外は覚えていない。」また、江波戸氏は「雑用ばかりで機械（旋盤）には触れなかった。地下というよりは工場のすぐ側の山（岡？）に開けた掘削式の壕で、中に機械・工具などがあったが、ほとんど作業はしていなかった。」。その他のものも、満足な仕事を与えられず、輪切りにした魚雷の胴体に錆が出ると、やすりでその錆を落とす作業で、再び錆がでるとまた同じ作業を繰り返すのみであった。

（2）寄宿舎

当時、学徒動員の学生の寮は2ヶ所あり、私たちが収容されたのは、村岡工具寄宿舎（藤沢市宮前町353番地所在。8棟約3,000平方メートル 収容人員1,000名）であった。その場所は、秋山氏の記憶によると「毎日、工場を出て、塀を廻って、東海道本線の方に帰った気がします。東海道線の列車が走るのをよく覚えています。ですから、地図でいうと、工場と東海道線の間には位置するのではないのでしょうか。」とある。

現在、地番変更で該当する番地はないが、これだけ広い地所があったところなので、現地を調査した結果、現在の神戸製鋼所藤沢工場のあるところにほぼ間違いないものと思われる。隣接地が360番台であることもそれを証明している。また、東海道線が間近に見えるところはここしかない。

寮の正門は境川に面しており、門を入るとすぐ左側に病棟があり、（江波戸氏も擬似赤痢で入棟していた。）また、すぐ右には面会所があった。そしてその後ろに8棟の寄宿舎が存在したもようである。また、敷地はすべて鉄条網で囲まれていた。

「建物は木造のバラックで、建物の中は真ん中に通路があり、両方に分かれて何畳かの畳敷き、寝るときは棚だったように思う。」そこに自分で持ち込んだ布団を敷いて寝ることになる。（秋山、水谷）

（3）日課と食事

伸び盛りの中学生にとって最大の関心事はなんといっても食事であった。たまたま、秋山氏が当時の日課と食事の内容を日記にのこしているが、日課は軍人並に厳しく、食事は代用食に汁とタクワン、時に魚がつくという誠にお粗末なものであった。

江波戸氏はつぎのようにのべている。「地元中学の生徒が自宅から通いできていた。自宅から弁当を持参しその上、工場から出された昼飯を食べていたので羨ましかった。家から持ってきた揚げ餅をカンから出して一人でそとフトンの中で食べた侘びしい思い

出であった。」

秋山氏によれば、寄宿舎の中に蚤、虱がいた。下着にびっしりとついていて、血を吸った虱の半透明のなかに赤い血がよく見えた。つぶすときは蚤のほうがいい音がした。また、栄養失調のため、病人が続出した。同氏によれば「軍医は厳しかったです。何人かの友人が、熱があるといって診療に出かけ「8度までは平熱だ」といわれて帰って来たことを知っていたので、小生の水虫の発見が遅れたのは事実です。小生の場合は「どうして、こんなになるまで来なかったんだ」と叱られ、見ていた友人の話では、メスを入れるとピンセットで足のうらをメリメリと剥がしたのだそうです。そんな治療でした。」

このような厳しい環境にあっても、勉強に打ち込むものもいて、時間ができると英語のリーダーを出して勉強していた者もいたし、秋山氏のように読書に熱中する者もいた。ちなみに秋山氏が7月に読んだ本を以下にあげることにする。

藤沢恒夫「大阪」、山本有三「路傍の石」、永井荷風「腕くらべ」、夏目漱石「三四郎」、
「虞美人草」、「坑夫」山中峯太郎「大陸非常線」、大下宇陀児「鉄の舌」

なお、JRの年史によるとこの寮には静岡刑務所から受刑者250名が動員された記述があり、さらに、朝鮮人労働者もいたことになっているが、私たちの知る限りでは、受刑者については寮から見えるところに、受刑者の寮だといわれるものがあり、人が生活していたことをおぼえている。また、朝鮮人労働者については同じ工場で働いており、江波戸氏は、「夜間、空腹で寮を抜け出し朝鮮人労働者の宿舎へ行って濁酒をご馳走していただき、有り難かった。」と述べている。

(4) 終戦

8月15日朝、工場にゆくと、海軍の軍人が、私たちに、昼に重大放送があるから本部前に集合せよと命令された。この頃には、学生の中には政府の役人の子弟もおり（木戸内大臣の息子の東大生もいた）うすうすポツダム宣言のことも知っていたので、おそらく敗戦ではないかと話していた。重大放送が始まると何を話しているか判らなかつたが、そのうちに前列で聞いていた軍人が大きな声で泣き出したので、ようやく戦争が終わったことが理解できた。その日は、軍人や受刑者、朝鮮人労働者に不穏な動きがあるという噂もあり、引率の先生が夜陰に紛れて自宅に帰るよう許可を与えた。生徒の中には、その日のうちに荷物をまとめて帰宅した者もいたが、江波戸氏のように、終戦後2～3日たった頃に、リンゴを二個おみやげにもらって帰った者もいた。

□ 献立 昭和20年(1945年)

6月	朝	昼	夕
28日	飯 1 味噌汁(キャベツ) 1 椀 タクワン 8切	飯 1 カレーあえ (キャベツ、人参他) ジャガイモ煮つけ 2切	飯 1 汁(キャベツ) 1 大根煮つけ 魚(不明) 塩焼
29日	飯 1 味噌汁(実なし) 1 椀 漬物(大根の葉)	飯 1 魚煮つけ(骨多し) ジャガイモ・人参煮つけ	飯 1 汁(昆布・うどん入り) 1 魚・ジャガイモ煮つけ
30日	飯 1 味噌汁(かぶ) 1 椀 タクワン 3切	飯 1 魚煮つけ 少量 キウリ 塩漬	飯 1 汁 1 魚煮つけ キウリ 塩あえ
7月1日	飯 1 味噌汁(キウリ、大根) 1 椀 タクワン 3切	飯 小井 2.5杯 雑魚煮つけ 5, 6匹 タクワン 2切 キャベツいため、大根葉ぬか漬	飯 1 汁(キウリ) 1 魚煮つけ キウリ 塩漬 キウリ 味噌あえ
2日	飯 1 味噌汁(キウリ) 1 キウリ 塩漬 4切	飯 1(大豆入り) 味噌汁(カンパン、ジャガイモ) 1.5人分(余り) キウリ 2切	飯 1 汁(キウリ) 1 ジャガイモ、ウリ、魚ソーセージ 少々 キウリ 塩漬 2切れ
3日	飯 1 味噌汁(キウリ) 1 椀 キウリ 塩漬 2切	飯 1 ニシン・カズノコ・煮つけ	飯 1(大豆・高野豆腐・ ソーセージ入り) 汁(キウリ) キウリ

□ 勤労働員

■ 住所

神奈川県 藤沢市 宮前 252 横須賀海軍工廠 村岡工員寄宿舍

■ 日程

朝 5:50 総員起こし 寝具修め 甲板洗ヒ

6:05 朝礼用意

6:10 朝礼 食事

6:45 登廠用意

6:50 登廠 日直指揮

夕 7:00頃

7:55 点検用意 人員点呼（総員・事故・現在員）

8:00 点検

9:15 巡検用意

9:20 巡検 体ヲ動カスベカラズ

■ 日直

一人ヅツ副直

朝礼 班長ヨリ人員ヲ調べ 人員報告

一箇班 掃除当番

各班三名 食卓番 総員起コシト共ニ烹炊所へ

食事後 食くわんを洗ひ返ス 食器洗フ

写真 (A)

横須賀海軍工廠深沢分工場
の跡地

現在は、J R 東日本旅客鉄
道 (株) の鎌倉総合車両所
となっている。



写真 (B)

国鉄大船分工場正面

(昭和 2 1 年)

(旧横須賀海軍工廠深沢分工
場)



大船分工場正門 (昭和21年)

写真 (C)

深沢分工場の敷地にあった
地下工場跡

深沢分工場の敷地の東側
にあった地下工場の跡で、
現在、穴の入り口はブロ
ックで塞がれている。



写真 (D)

海軍施設部への連絡用トンネル

地下工場から専用道路（大船～江ノ島）の下を通過して道路の南側にある海軍施設部への連絡用トンネルが作られ、現存している。
次頁「寺分の横穴を見る」を参照。



写真 (E)

深沢分工場の疎開先

戦争末期に分工場を疎開させることになり、梶原道手谷戸と、現在の深沢クリーンセンターのところに工場を作った。前者は宅地造成で所在が不明であるが、後者はクリーンセンターの裏山にあり、現在はコンクリートで入り口は固められている。



写真 (F)

終戦の玉音放送を聞いて記念撮影におさまる勤労働員の学生たち。



寺分の横穴を見る

平成15年5月23日

案内人 木村 マスさん

深沢にあるJR大船工場の近く、寺分一丁目の民家の裏に海軍の掘った横穴があるというので、検分に出向いた。

木村さん宅は、JR大船工場のモノレール寄り、グランドの北東隅の信号機のある場所を少し東に入ったところにある。深沢幼稚園へ入る路地の突き当たりの家で、マッサージ師の看板の掛かっているお宅である。この裏口が岩の剥き出しになった崖になっていて、横穴の口が開いている。納戸代わりに利用されているので、道具類が雑多に置いてある。

木村マスさんは、この家の中年の主婦の方と一緒に対応してくださる。聞けば大正7年(1918)生まれの84歳ということであるが、お年を聞くまでは60代か70代のおばあちゃんに見えた。懐中電灯で照らしながら奥をうかがう。30年以上前のモノレール建設で、橋脚工事のため穴がコンクリートで塞がれたため、10メートルくらいで行き止まりとなってしまったが、以前は専用道路の反対側まで貫通しており、中学生くらいの子供がロウソクで照らしながら、反対側から探検に来るのが見られたという。

穴は素掘りのままで、アーチ型がくっきりと見える。入り口は中世の「やぐら」の形をしている。穴の入口近くに五輪塔もある。床には水が溜まっていた。入り口から入って穴は左にも枝分かれている。われわれの推測では穴はモノレールの下を潜って、市営深沢住宅の下に達し、かつて、ここにあった海軍工廠隣接の地下工場に繋がっていたのではなかろうかと思われる。

幼稚園の場所には海軍の施設部の建物があつたということである。

木村さんは鎌倉・常盤の生まれ、昭和16年に結婚されて、終戦当時は実家に帰っておられたため、海軍の動きは直接見聞きされていない。なお、大町の名越地区で防空壕掘りに勤労働員されていたそうである。昭和27年現在の場所に定住されたので、コンクリートで塞がれる前の穴の状態はご存知である。ここは鎌倉特有の堅い岩盤で、穴の上に民家が建っているが、落盤などの恐れはないようだ。



大船捕虜収容所（1）

平成11年7月15日

語り手 青木みつ子さん 田所 泰男さん

田中 八郎さん

平成11年7月15日、大船NPOセンターにおいて、三人の方から、主題についての貴重な経験談を聞くことが出来た。三人は終戦直後まで存在した大船捕虜収容所の近くに住み、三年少しの間、年少ながら直接捕虜を見聞された実体験をお持ちのかたがたである。なお、この後、8月26日、田中さん、青木さんの案内で、実地検証をした。

お話しに先だって、当方は鎌倉中央図書館にある捕虜収容所関係の資料に一応は目を通し、竜宝寺の向かいの現場（P113の地図①及び③）を実地に確認して、多少の資料と写真（航空写真を含む）を持参してお話しを伺うこととした。

1. 小学校・中学校時代

収容所のあった場所は、昭和17年4月に収容所が出来る前はどのような状態であったかを尋ねたところ、玉縄小学校が昭和12年に山の向こうに引っ越したあとは、畠や草原であった。田所さんの記憶では、古い校舎は二棟残っており、桜の並木もそのままであったとのこと。運動場のスミにあった小学校当時の足洗い場が残っていて、これは収容所が出来たあとも、捕虜たちが洗濯するのに利用していたということである。手漕ぎ式のポンプと井戸があった。田中さんは終戦の時は小学校5年生で、生徒は雨の日などは、ハダシで登校したものである。カバンなどはなく、風呂敷に帳面や弁当をくるんで腰に縛ったり、肩に斜めに背負ったりしていたものである。またハナを垂らしている子が多く、着物の袖口はテカテカに光っていた。風呂にはいらないと見えて、首筋などアカがたまって黒くなっている子がいた。夏には馬に食べさせる茅を刈ってきて校庭に並べたりした。また、今の昌運工作所のところに農作物の手伝いに行ったりした。

田所さんは、昭和6年生まれで、終戦の時は中学2年生、自宅（地図4）のすぐそばが収容所の南の塀に当るので、塀際の土手に寝転んで、中を見ることが出来た。丁度一般の道とは反対側で、人の目からは死角になっていた。昭和16年以前は戦時色というものはなく、戦時色になっていったのはその後のことである。たとえば、運動会の騎馬戦が「敵陣攻撃」と名称が変わり、5年生ころからは、手旗信号が教えられた。手旗信号は今でも覚えている。歴史教育も変わり、楠正成や東郷平八郎の話など天皇中心の話がだんだん出てきた。爆弾三勇士など忠義をつくした人々が取り上げられた。唱歌の時間には軍歌が歌われた。体育の時間には、剣道、柔道といった格闘技が小学生にも取り入れられ、軍国少年育成が目的とされた。また、飛行機乗りがやるような、球状回転機で空中回転もやられた。12月8日は

開戦の記念日に当たることから、「大詔奉戴日」といって、毎月8日に鎮守様である諏訪神社（地図2）へ参拝、君が代斉唱、東方遥拝することが恒例行事となっていた。君が代で思い出すことは、最後の「苔のむすまで」のところを「ムーウスーウマーアアデ」と引き伸ばすが、息継ぎをしてはならないといわれた。無用の息継ぎをして殴られる子もいた。当然のことながら、先生も徴兵に取られて行った。4年生の担任は、神奈川師範出の若い先生で、私（以下田所さんの話）を可愛がってくれた先生であったが、半年で海軍に取られ、間もなく戦死された。学校に残っている先生は、当然のことながら年配の先生、それに女の先生であった。

さて、中学に入ると、戦時色は更に濃くなった。私は昭和19年に旧制中学校にはいり、2年生の時に終戦となった。昭和18年に神奈川県は「戦時動員体制要項」なるものを制定、その中に教育に関するものとして「戦時非常措置方策」が出来、ここに学徒動員という言葉が出てくる。さらに、昭和19年4月にはそれが国によって法制化され「学徒動員令」が制定されることになった。私は中学へ入って半年間は授業を受けたが、そのあとは動員されることになった。JR鶴見線の海芝浦駅の前にある東芝重電機の工場で1年生の後半から2年にかけて働くことになり、ここに通った。何を作っているのかわれわれには知らされはしなかったが、魚雷であるとの噂を聞いたことがある。しかし魚雷作りの資材も十分になく、工場はあまり動いてはいないようであった。工場での楽しみは、お昼の食事に食券が出て、雑炊が食べられたことである。軍需工場だけあって、ここの雑炊は魚や肉など、通常では手にはいらぬようなものが入っていた。実は、私はここで捕虜を初めて見た。どこから来た捕虜かわからないが、10人ばかりが強制的に働かされていた。工場は始終空襲にあっており、生徒はすぐ地下壕に避難してよいが、捕虜は避難は許されず、機械の下か建物のかげに隠れるかしていた。勿論、生徒と捕虜との接触は許されるものではなかったが、同じ工場の中で、捕虜と一緒に働くという経験をしたわけである。終戦間近の何べん目かの空襲で、捕虜の何人かが死んだという話を聞いた。壊れた建物の中に捕虜の死体の一部が引っ掛かっているといわれたがよくはわからなかった。

工場が壊滅して、しばらく自宅待機となったが、再動員となり、今度は平塚の北、金目村の農家の手伝いに2週間ばかり行った。ここはよかった。じゃがいもが食べられたし、麦の収穫の手伝いをして、粉にしてうどんを作って食べたりした。合間に、高麗山の高射砲陣地に角材を担いで片道15キロを行進させられた。兵隊が前後についていた。生徒は農家に分宿していた。このあとは、横浜の学校も空襲で焼けてしまっていて、5月から8月まで、再度自宅待機となった。この間に、大船捕虜収容所での捕虜を見た。小学生であった時に見て以来であった。

2. 収容所のスケッチ

ここの収容所は昭和17年4月に作られた。当時のことだから、軍の機密に属する

こととして、住民に事前説明があるわけでもなく、突然板囲いが出来て兵隊の監視のもとで、大工さんが入って工事が始まった。住民は何が出来るとやら、何も分からなかった。今現地に立てば、当時を忍ばせる面影は殆どないといってよい。ただ、われわれには思い出になるものが、二つ残っている。一つは青木さんから教えてもらったことだが、監視塔の礎石である。一メートル立法体で中に鉄筋の入ったコンクリートのブロックである。植木115番の椿原さん（地図3）の庭の中にそれがある。そこには捕虜を高めから監視するためのやぐらが立っていた。四六時中、着剣して双眼鏡を持った兵隊が、目を光らせていた。やぐらの足であるから、少なくとも四つあるはずであるが、椿原さんによれば、取り壊しの際に、業者に頼んで一つだけ壊すのを勘弁してもらったとのこと。もう一つの名残は桜の木である。ここは桜の並木があったところで、そのうちの二本が今残っている。一本は椿原さんのお宅の庭のすみにあり、これは今も外から見える。あと一本はトンネルを出たすぐ左のところにある。この桜はわれわれは早咲きの桜と呼んでいる。

鎌倉市の同人誌「鎌倉」平成8年5月号に、星野勇治さんの「大船捕虜収容所について」という記事がイラスト入りで載せられた。（スケッチ図1-6）この星野という人は私の小学校の同級生で、長く郵便局勤めをしていたが、在職の頃から郷土のことに関心があり、郷土史の研究会に入って記録の作成などをしていた。その彼が平成7年の年末に私の家に突然尋ねて来て、今戦争中のことを調べているが、捕虜収容所のことが分からない。教えてほしいとのことであった。彼は竜宝寺の住職のところに行ったところ、住職は戦争中は中国に行っていて、捕虜収容所のことは知らない。田所さんが詳しいので彼に聞いてはと紹介されて来たとのこと。私はスケッチのコピーを持っていたので、それを提供するとともに、そのほか覚えていることを伝えた。星野さんの記事の中で「T氏」とあるのは私のことである。またこのスケッチを描いた人は「K氏」と書いてあるが、これは小坂善和^{よしかず}という人のことである。この方は亡くなっているが私はこの方の弟さんと同級である。私が何故このスケッチを持っているかといえば、私は平成4年に公立学校の教師を退職したあと、たまたま竜宝寺の境内で写真を撮っていたところ、住職が何しているのだ、自分が司会している玉縄郷土史研究会に入らないかということで、参加させてもらった。話題が捕虜収容所のことになった時にこのスケッチが配られたのである。住職は戦後、小坂さんから、このスケッチの提供を受けていたものである。

3. 捕虜の生活

さて、これからこのスケッチ（添付 図1）に基づいてお話し申し上げる。このスケッチは当時の面影をよく現している。ただ間違いと思われる箇所もある。先ず図の左上に竜宝寺の本堂が描かれていて、昭和25年頃火事で全焼とあるのは間違いで、火事は昭和26年4月26日に起きている。ついで本堂のま下にお堂と石段が描かれ

ているがこれは金毘羅宮であるが、今はない。今は寺の境内のなかにほこらだけ残されている。なぜ海の神様、航海の神様である金毘羅宮がこんなところに祀ってあるかといえば、このあたりは大船にかけて3千年－4千年前は海の入江に当たっていて、船が粟などを積んで行き来していた。大船の地名の起こりもこの「粟船」から来ている。山門の上のところに鐘突き堂が描かれている。これは今も残っている。この鐘はなかなか由緒のあるものであるが、本日の課題ではないので説明は省略する。現在の県道はこの山門の位置あたりから金毘羅宮あたりにかけて昭和46年に作られた。この時金毘羅宮のあたりの山が削られた。山門はこの図の位置からうしろに下げられた。図の右上に小さなトンネルが二つ描かれている。この一番右のトンネルは大正8年に掘られたもので、僅かに人間が二人やっと通れるくらいの狭いものである。植木小学校がここにあった時に岡本の子供の通学のために掘られたものである。(現在の県道の北行きトンネルの出口の右上に跡がある) 左の少し大きいトンネルは大正14年に掘られた。これは牛車やリヤカーなどが通れるように作られた。今のトンネルではない。トンネルのすぐ下に丸で囲って、十字架が四つ描かれている。「捕虜の墓地 4－5ヶ所の十字架があったと思う 後に回収して持ち去って行った」とあるはその通りである。十字架の下に建物が三つ描かれている。これは昭和12年まで玉縄小学校が使っていた校舎である。「一時糸工場があった」とあるが糸工場であったかどうかは定かではない。大同製作所という工場があったと記憶している。たしか鍋、釜などを作っていた。当時のことであるから、軍需工場として昌運工作所の下請けの仕事をしていたのかもしれない。

それから柵で囲まれた捕虜収容所の敷地の中のお話をする。桜並木は玉縄小学校の時にあった桜がそのまま収容所の中に取り入れられた。桜並木の真ん中あたりに門があって、すぐそばにトンガリ屋根が見える。これが衛兵所であって、着剣した衛兵が監視していた。その上部に「捕虜たちがここで洗濯をしていた」とあるのが先ほどお話しした小学校の足洗い場である。ここに手漕ぎのポンプがあった。門を入ったところに建物が二つあるが、これは倉庫のようなものであったと記憶している。雑多なものが入れてあったと思う。倉庫の下に空間があるが、ここに給水のタンクがあった。そしてそのそばに先ほど申し上げた監視所のやぐらがあった。さて大きな建物の方に移ると「TDV」と書いて「屋根に何かマーキングがあったようですが何が書かれていたか私は知りません」とあるが、私の記憶では「TDV」と書いてあった記憶はない。おそらく戦後すぐ書かれた「PW」のことではないかと思う。PWとは **Prisoner of War** の略であって、ここに捕虜がいるとの表示である。これは捕虜が書いたのではなく兵隊が書いた。きっと敗戦で、上から指図があったのであろう。(横浜 伊勢崎町に本社のある大型書店「有隣堂」が発行している新聞「有隣」平成8年9月10日第346号によれば、元大船捕虜収容所の捕虜であったブルース・ヤングクラス氏の証言として、PWの表示を終戦直後収容所の屋根に書いたと記載されている)

次にグラウンドのことであるが、バレーボール・コートと書かれてある如く、ここにバレー・コートがあったことを私は覚えている。収容所は杉板で作られた塀がぐるりと巡らされていたが、この板塀が粗悪なものであったがために、私は中を覗き見ることが出来た。私がおつぱら覗いていたのは、収容所・南側の塀であって、ここは道路ではなく、たんぼの土手になっていて、道路を通行する人からは全く見えない場所であった。当時、戦時真っ最中で歩いている人といえば、年配者か子供くらいのものであった。衛兵の見回りも道路側だけであって、ここには来なかった。私の家に大きなけやきの木があって、そこに登っても、中で運動している捕虜の様子を伺うことが出来た。もう一つ、ここは寝そべって日なたぼっこをしながら本を読むのに絶好の場所であった。私は当時本を読むことが好きであったので、よくここへ来ていたが、いやでも中の様子が伺えた。私の家から30か40メートルと離れていなかった。

次に捕虜の個室であるが、これは戦前には中へ入れないので見たわけではないが、戦後捕虜たちが出ていった後に見たものである。個室は廊下からノブ式の取っ手で入ると、すぐのところに箱をさかさまにした板作りのものがあつたが、これがトイレであった。まんなかに穴が開いていて、地面に更に穴が開いていた。更に部屋の奥に壁に沿って板のベットがある。天井の真ん中に裸電球が一つぶら下がっていた。壁に小さな窓があつて金網が被せてある。終戦後2週間経ってわれわれが部屋の中で見たものはこれだけであつた。広さは幅がこれくらい、奥行きがこれくらい、30～40室くらいあつたろうか。天井の高さは覚えていない。尋問室(図4)はこの絵の通り4～5畳くらいであつた。

これは後で分かつたことであるが、この捕虜は士官級つまり高級軍人であつた。軍事的に貴重な有力情報を集めるのが目的でこの捕虜収容所が設けられたために、当然処遇は当初は丁重であつたはずである。次のことからそれがうかがえる。喚声をあげてバレーボールをやらせてもらっている。また静かに収容所内外を自由に散歩している。天気の良い時は上半身裸になって日光浴をしている、などの光景である。特に、大人が裸になって日光浴をするなどは日本では当時そういう習慣がないものだから、子供心にとつても奇異に感じられた。いずれにしても日本の兵隊が強制的に何かをやらせているということはなかつた。この図2に「上級将校は番兵と一緒にこの付近を散歩していることが、しばしば見受けられた」とあるが、私はこんな風景は見たことはない。小坂さんは見られたのであろう。日本の兵隊がついて、捕虜を収容所の外へ連れて行くということがあつたのではないか。

4. 捕虜への同情

ここで青木さんの発言・・・実は防空壕を田中さん(地図6-8)と白崎さんの家の間に掘る時に派遣隊(収容所)の隊長さんが、何人かの捕虜をつれてきて手伝わせるからという申し出があつた。手伝って下さるのなら何か食べさせてあげないといけ

ないと思って、みんなで持ち寄って、いろんなものを作って食べさせてあげた。その時にある捕虜がプカプカ煙草をふかして、「何日になると日本はこの煙草のように灰になるよ」と言っていた。本当に灰になってしまった。何か捕虜には事前の情報があったのではないか。また図6のように「地域の運動会に招待されて（2～3人）100メートル競争に出て一着になり賞品は「さつまいも」などというのも私は記憶がない。このように捕虜に手錠をかけるとか、強制的に何かをさせるといことは一切見られなかった。それから捕虜のなかに黒人兵が一人もいなかった。黒人には上級将校になるような人はいなかったのではないか。捕虜の服装はまちまちであり、髭を蓄えた人がいたり、体格も威風堂々とした人がいた。全員が胸にカタカナのネームをつけていた。

当時、地域で小学校高学年の生徒と高等科の生徒がグループ活動をしていて、たしか日曜日には諏訪神社の清掃をしていたが、ある時付き添いの鋤柄先生が清掃の終わったあと、これから収容所の兵隊さんの慰問に行くよと行って引率されて行ったことがある。男子はこれから相撲を取るというので、正門すぐの空き地の地面に円を描いて子供同士の相撲を取らされた。日本人の衛兵が20人ばかり回りを取り囲んで、その外側に捕虜が遠巻きに眺めていた。これは日本兵への慰問であったが、間近で捕虜を見たのはこれが初めてであった。この時捕虜が言葉は分からないが、盛んな声援を送ってくれていた。勝負がつくと、拍手して喚声をあげていた。相撲のあとで、海軍のビスケットか何かもらって食べている時、捕虜の一人が私に近寄って、空を見上げながら「クラウド、クラウド」といって「空」の英語を教えてくれた。この時の印象が鮮明で「クラウド」という言葉をその時のエピソードとしていまだに覚えている。こういった捕虜への厚遇も戦争初期のころだけであったようである。戦局も悪くなってくると、様子が違って来たようである。

昭和19、20年は私は中学生で横浜に通っていたが、ある時、大船駅で捕虜が20人ばかり兵隊に引率されて電車から降りてくるのを目撃したことがある。皆手拭いで目隠しをされ、中には負傷して血の滲んだ服のままの者もいた。このことを裏付ける話をたまたま最近椿原さんのおばあちゃんからうかがった。それによれば、3年くらい前に横田基地から大変えらい将校が車二台で椿原さんの家を訪問、自分がかつてここの収容所に収容されていた捕虜であった。B29に乗っていた時に保土ヶ谷の上空で撃墜され、パラシュートで降下した。その時、怪我もしていたが上着は脱がされ、上半身裸で目隠しをされて大船につれてこられ、大船からリヤカーで捕虜収容所に収容されたとのことで、大変懐かしそうに回りの山の様子などを眺めていたということである。この頃になると強制労働、使役といったことが捕虜にも課せられるようになった。防空壕掘りなどであった。私の亡くなった祖母が、お茶をいれて捕虜のところへ持って行っていたのを覚えている。地元の人、何の関係もない人に対しても、ご苦労している人を見れば、お茶を持って行くなどのことは当たり前のことであった。

さつまいものふかしたのなども持っていった。捕虜はかたことの日本語で「これ上等」などと言って食べていた。「今日捕虜が日本語をしゃべったよ」と祖母が言っていた。近隣の人との交流はこのような形で行われていた。終戦が近づく頃、よく一般的に「鬼畜米英」などといわれたが、ここで捕虜と接している限り、鬼畜などといった感情は全く持たなかった。

5. 終戦

そして終戦、終戦の日は特に変化はなかった。その翌日には厚木基地から飛んできた日本海軍の飛行機が、徹底抗戦のビラを撒いていた。その翌日ころであったと思う。米軍の小型の艦載機が南の方から収容所の上空へ飛んで来た。その時収容所の屋根に前述したように黄色いペンキで大きく「PW」と描かれていた。先ず落としたものは小包みくらの大きさで紐が付いていて、パタパタと音をたてて、収容所の庭に落とされた。これは新聞、雑誌、衣類のたぐいではなかったかと思われる。恐らく「君たちはもうすぐ解放される」というメッセージがあったかもしれない。その日の夜は中で、ダンスをしたり、華やかな歌声が聞こえてきた。大きな飛行機が飛んでくるのは、その後である。小坂さんがスケッチの図3に書いているように「終戦から一週間くらいの間、天気の良い日は毎日飛行機で補給が行われた。関谷の農家から牛車を借りて補給の品々を回収、捕虜たちはうれしそう。地域の人々が多数集まった」「私の印象ではB29ではなかった。小さく見えたが、下に落ちてきたら、何とドラム缶であった。捕虜が数十人まとまって外に出てきたことは初めてのことで、立場が完全に逆転した。番兵は後方について見張っている程度、捕虜たちは自由になすがまま、トラブルはなかったようだ」。私は四発のB29であったように記憶している。これが数百メートルの高さまで降りてくるのもものすごく大きく見えた。印象的なのは、弾倉がガチャッと開く音であった。戦争中はあそこから焼夷弾が落ちてくるのだが、この時はドラム缶が落ちてくる。数百メートルの高さであるから、必ずしも収容所の周辺に落ちてくるとは限らず、あらゆるところ、かなり遠くにも落ちてきた。ドラム缶にはいろんな色のパラシュートがついていて、とても綺麗であった。諏訪神社（地図2）の杉の木にもドラム缶が落ちて来て、裂けているさまは今でも見られる。もう一つ印象的であったことは、これらのドラム缶を収容所に届ける人に朝鮮人が多かったことである。朝鮮人はドラム缶を収容所に届けることで何がしかの報酬を受けていたのではないか。植木にも朝鮮人がいたが、終戦と同時に「われわれは戦勝国である」と言っており、日本人と朝鮮人との立場も完全に逆転した。市営住宅にもだいぶドラム缶が落ちてきた。拾った人は収容所に届けるようにと言われたが、言うことを聞かない人もいた。チョコレートだとか煙草だとか、コーンビーフの缶詰など、みんなほしいものばかりだった。（青木さんの話）

それからスケッチ図5に描かれてあるような、物々交換が収容所の塀越しに始まっ

た。チョコレートやチューインガムと日本のものとを交換するのである。ケースにはいった日本人形は特に捕虜に喜ばれた。私たち子供は差し出すものがないので、大人たちのしていることをただ眺めるだけであった。ここで私は英語を塀越しに習っている。B29を「トエンチナイン」というと捕虜は「違う」という。「トエニナイン」だという。「サーリーワン」しかり。その後学校で英語を習ったが、学校でこんな発音をするわけがないので、この時に教わったことが頭に残っているわけである。その後、捕虜は次第に数が少なくなり、やがて日本の番兵もいなくなった。私たちが、収容所に忍び込んだのはその後のことである。9月には中学校に復学しているので、忍び込んだのは8月の下旬頃のことであった。ここにゴミ捨て場があって、子供たちはこのゴミを漁ったがその中でおいしいものを発見した。チューブにはいった練り歯磨きである。これがおいしくて夢中で食べたものである。香料が入って、甘く、世界一おいしいお菓子と思った経験を今でも持っている。今まで岩塩で歯を磨いていたのだから。

このような時にある日突然大人が一人現れた。「何してるんだ」「ここは間もなく取り壊しになるから、入ってはいけないよ」と、この人こそ派遣隊（収容所）の隊長である海軍少尉の飯田角蔵さんであった。普段は軍服を着ているが、その時は平服であったので気がつかなかった。青木さんによれば、飯田隊長はその時、青木家の裏に住んでいた。当時としては珍しく、職場の近くに家を持っていた。その隣に北村という獣医さんもいた。また畑さんというコックさんも住んでいた。チューブ、チューブといていたが厨房担当であった。北村さんや畑さんは今どうしておられるか分からない。飯田さんの下におられた清水さんは、飯田さんの仲人で稲垣さんの妹さんと結婚された。その飯田さんは、後に横浜軍事裁判にかけられ、終身刑の判決を受けた。裁判では30人の人がBC級戦犯として裁かれ、ここの収容所関係では19人が処罰された。飯田さんは最初巣鴨の刑務所に収容されたので、青木さんはご主人や子供とともによく面会に行った。地元では、気の毒だという受け止め方で、住民の中に減刑の署名運動が起こったものである。飯田さんは何年か後に減刑となって釈放された。ある時、週刊誌に「私は貝になりたい」という題で記事を書かれたが、この週刊誌は取っておいたら参考になってよかったと思う。飯田さんは4～5年前に亡くなられたが、息子さんが横浜に住んでおられるとのことである。裁判は勝った方が勝手に裁くわけで、大船の収容所で虐待があったかどうかはこの裁判記録を検証して見る必要がある。虐待といっても、食事が十分与えられなかったということもある。当時は日本人だつてまともに食べてないのだから。ただ青木さんによれば食べ物はこの収容所に関する限り、十分にあったと見ている。前述の畑さんがいつもたっぷりの肉を持って行っていたのを見ているから。さて捕虜収容所にあった十字架であるが、戦後アメリカから引き取りにきて、住職も立ち会いで遺体を持ち帰ったとのこと。この時、牧師に加え考古学者（法医学者か）も来た

そうである。6人の捕虜の名前は分かっている、竜宝寺では毎年お盆の時期に慰霊をかねて、法要を続けている。

収容所が取り壊されたあと、上の校舎は幼稚園として再開された。桜並木のところは一時期養鶏所（松本さん）となっていた。その後養鶏所もなくなり、家が建ち、県道が出来、今では収容所を忍ばせるものは冒頭に述べたように何も残っていない。ただ椿原さんの庭に監視塔の礎石が一つ残っているだけである。前記スケッチの図1に書かれた右上の大きい方のトンネルは拡張されて、県道北行きトンネルとなり、金毘羅宮のあった山は壊されて県道になってしまった。この収容所に関する正式な記録は殆どないといってよい。

田中さんによれば、テクソンという大男の捕虜が戦後5～6年経って奥さん同伴で現場へ尋ねて来た。私は16～17才になっていて、秋の稲刈り作業をしていた最中のことで、呼ばれて行ってお茶を飲んだ。彼は自分の掘った壕やあたりの風景を懐かしそうに眺めていた。田中邸と白崎邸（両家は親戚同志）の間には馬の背のような山があって、かつて、両家の先祖が人工のトンネルで繋いでいたが、このトンネルにT字型に新しく防空壕を掘り進んだ（約6～7メートル）際に、前述の如く収容所側の申し出で捕虜が手伝いにきたことがあったが、テクソン氏はそのうちの一人であることがわかった。また青木さんによれば、ベンジャミン・ウイルソンという人が尋ねてきて、現場を見たあと、東京でどこかオペラを上演しているところに案内してくれと所望されたそうである。青木さんは子供をおぶって東京まで行ったが、オペラなどしているところはなく、そのうちにはぐれてしまったとのこと。

当時この地区には日本の軍隊も展開しており、多くの兵隊が竜宝寺、玉縄小学校や付近の民家などに分宿していた。竜宝寺には「め隊」の連隊本部があり、田中家は部隊本部になっていた。青木さん方では兵隊がミシンを使ってガタガタとつくろいをしており、田中家の奥の部屋では将校が作戦会議を開いていた。「隠居や」が部隊本部の事務所で、電気を引いて通信などやっていた。鋤柄さんの家（地図10）の裏の谷戸から穴を掘って、七曲りの下を通過して今のオーベル（マンション）（地図9）（当時は藤村さん宅）の方向に掘り進んでいたようである。このトンネルは初期には芝浦製作所が工場移転を目的に掘らせたといわれている。奥は広く長大で要塞化を目的とし、ところどころに地面に銃眼を出して、江ノ島方面から北上する敵に照準を当てるはずだった。このトンネルには白崎さんの裏の谷戸からも通じていたが、今回の調査では、その穴の入り口は確認出来なかった。今はないが「象が鼻」の山を掘って「昌運工作所」の機械類を入れていた。

週刊読売が別冊で「大船捕虜収容所始末記」と題して（昭和49年8月号）実松讓氏の記事を載せている。実松氏は当時海軍の参謀で、東京から尋問のため、大船にしばしば出張しては捕虜から事情を聴取していたようである。実松元参謀によれば、この捕虜収容所はわが国では唯一海軍に属する収容所であった。

通常わが国における捕虜の管理は陸軍が担当していた。陸軍の管理下では、捕虜は正式に登録されて万国赤十字に通報される。捕虜は敵に利するような情報を提供することはなく、聞き出そうとする管理側の脅迫、暴行を受けることが多かった。海軍では、情報を持っている高級レベルの捕虜をむしろ厚遇して、高度の情報を入手することが、戦争の遂行に有利であると考えた。ここ大船は東京や横須賀に近く、地理的にも便利なところであったし、何よりも当時玉縄は人口も少なく目立ちにくい土地柄でもあった。収容所の名称にも捕虜という言葉を使うことを避けて「横須賀海軍警備隊植木分遣隊」として発足した。ここに延べ1,000人の捕虜が集められたとの証言もあるが、本日の三人の話では、それほどいたとは思えないとのことである。終戦時には135人（内士官70人）が収容されていた。ここに収容されていた元捕虜たちが、戦後何年か経って、時には夫人同伴で、ここを再訪し懐かしがっていることは、ここでの待遇が国際的感覚から見て、不当なものでなかったことを物語っている。

参考資料

- 「大船捕虜収容所」について 星野勇治 冊子「鎌倉」平成8年5月号
「撮影所のある街 大船物語」 升本喜年 ホンゴ出版
「大船捕虜収容所始末記」 実松 譲 「別冊週刊読売」昭和49年8月号
「大船捕虜収容所」 鈴木 淳（栄光学園高校） 社会科個人研究
1997年6月
「撃墜されたB29パイロットの証言」 有隣 346号 有隣堂
「大東亜戦下外地俘虜収容所」 茶園義男 不二出版 1987年
「大船捕虜収容所」余滴 「かまくら春秋」316号 1996年8月
かまくら春秋誌編集部
「聞き書 日本人捕虜」 吹浦忠正 図書出版社
現地航空写真 <鎌倉市中央図書館所蔵>昭和23年米軍航空隊撮影

図1 大船捕虜収容所の全景

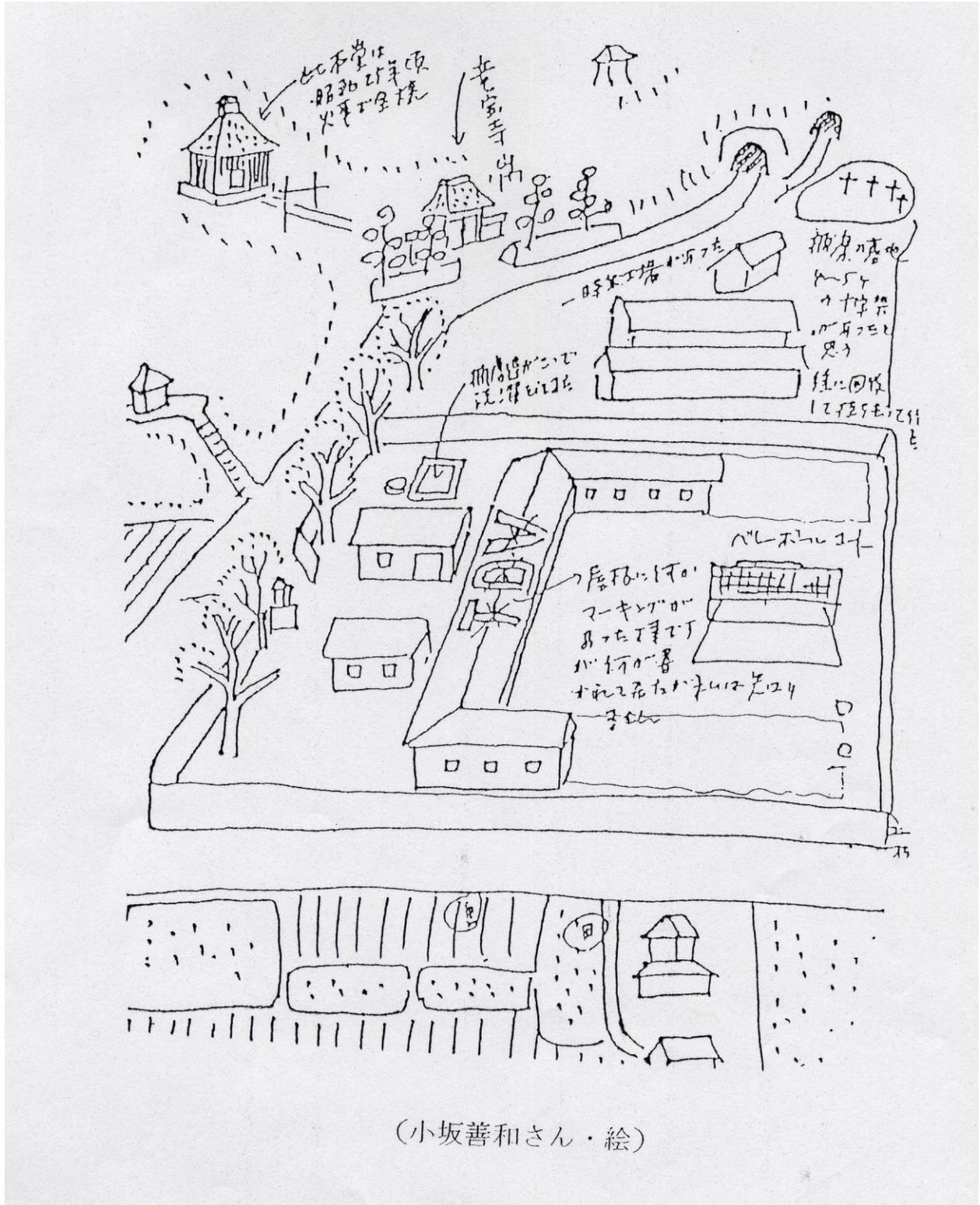


図2 捕虜と散歩をする番兵

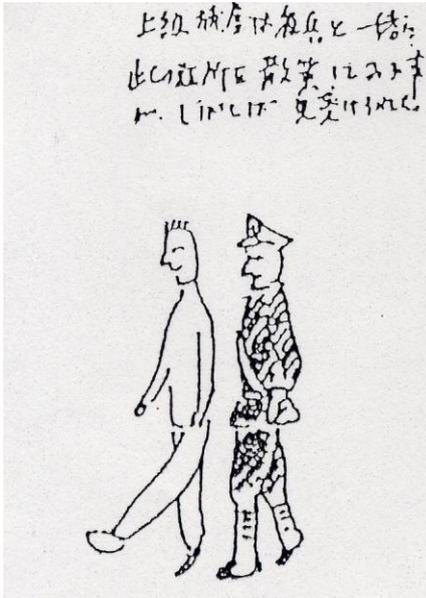


図4 尋問室 (4~5畳)

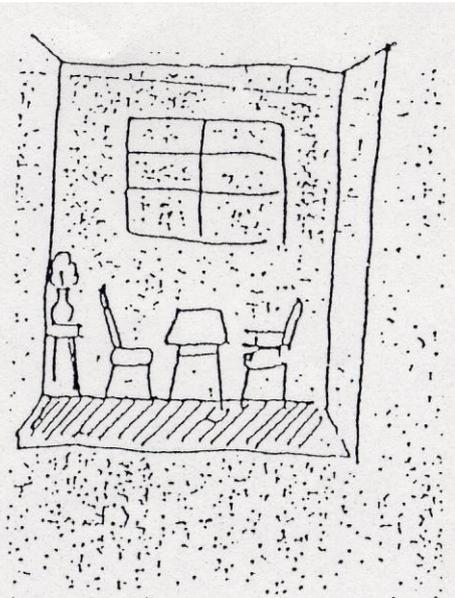


図3 終戦直後米軍が捕虜収容所に物資を投下

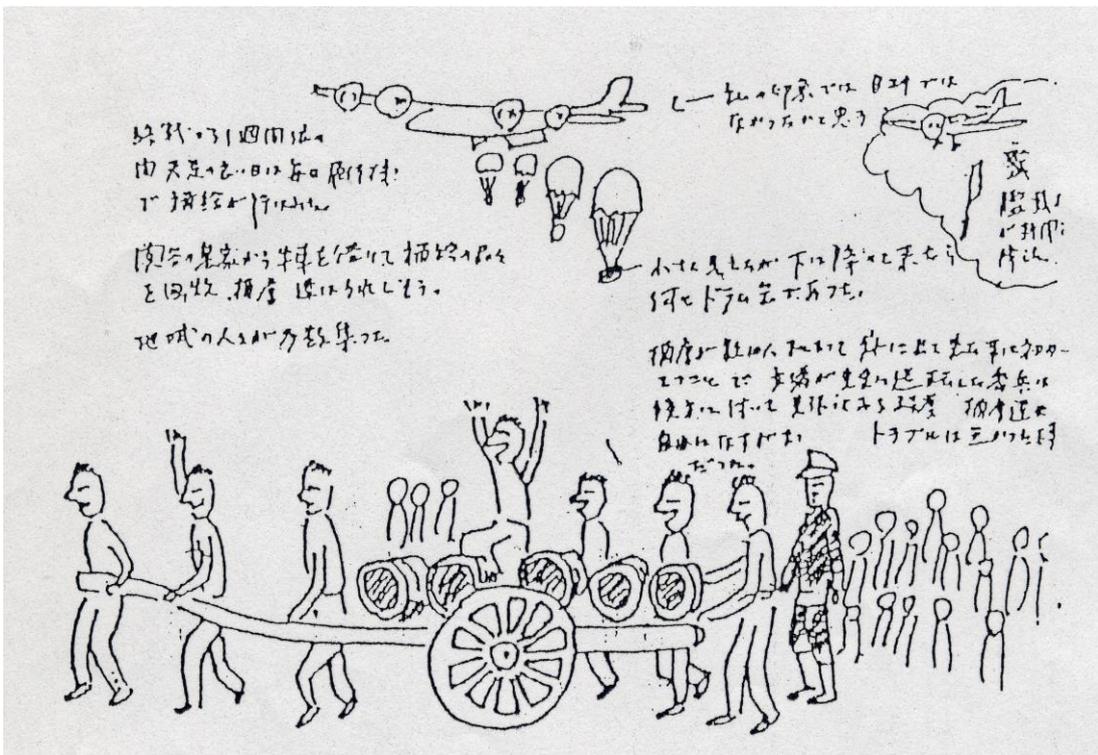
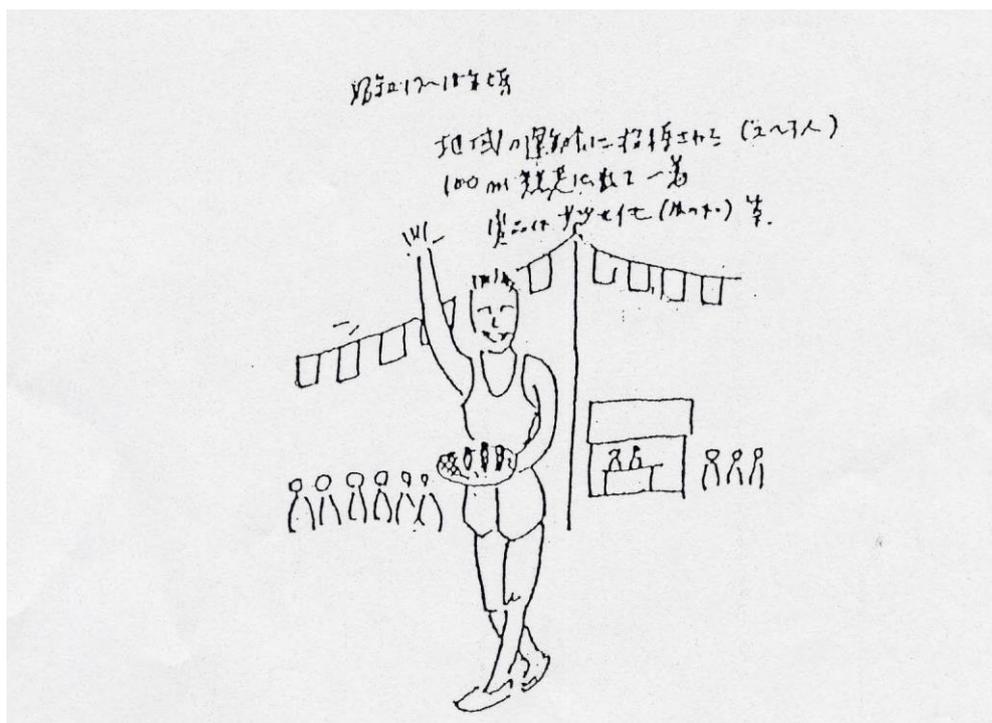


図5 捕虜と物々交換をする民間人



図6 地域の運動会に招待された捕虜



大船捕虜収容所（2）

平成11年8月26日

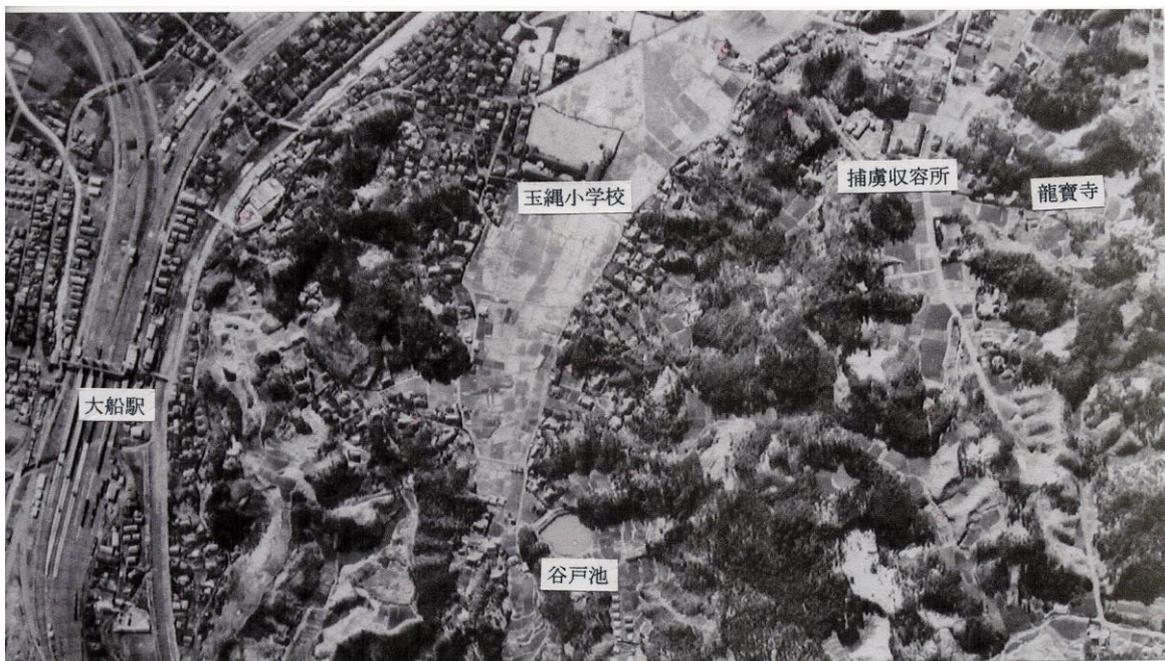
7月16日に大船捕虜収容所について、体験談を三人の方に語ってもらったが、話の中に出てくる場所が何処であるかの特定を必要とするため、この日は二人の方に現地案内をしてもらった。

案内人 田中八郎さん、青木みつ子さん

訪問して確認した場所は次の通り。

椿原邸	監視塔の礎石一基と桜の木
トンネル	人工で掘られたイラスト右上の小さいトンネルの場所
十字架	場所の確認
金毘羅宮	場所の確認
防空壕	田中邸と白崎邸を結ぶトンネル並びにこのトンネルにT字型に捕虜によって掘られた防空壕
白崎邸の奥の谷戸から掘られた穴	確認出来ず
鋤柄邸の奥の谷戸から掘られた穴	入り口確認 穴の奥は工場にするための大きさがあったとのこと
諏訪神社	パラシュートで落下したドラム罐の衝撃跡 二三本の杉の木の幹に亀裂のあと

捕虜収容所の近辺の航空写真（出典 鎌倉市中央図書館）



大船捕虜収容所周辺の地図



- ①竜宝寺 ②諏訪神社 ③元捕虜収容所 ④田所泰男宅 ⑤田中康之宅 ⑥田中八郎宅
⑦白崎宅 ⑧白崎コーポ ⑨旧藤村宅 ⑩鋤柄宅 ⑪トンネル

写真 (A)

竜宝寺トンネル

大船フラワーセンターから関谷インターに向かうと竜宝寺トンネルがある。このトンネルを抜けてすぐ左手一带に捕虜収容所があった。この写真は捕虜収容所があった場所の前面の道路から見た竜宝寺トンネルである。



写真 (B)

捕虜収容所監視塔の礎石

収容所の正面を入り、右手の奥にあったとされる監視塔の礎石が今も椿原さんの邸内に残されている。



写真 (C)

捕虜収容所にあった桜の木

収容所の出来る前は、ここに玉縄小学校があり、敷地内に桜並木があった。桜並木はそのまま収容所の中に取り入れられた。現存する2本のうち、1本が椿原さんの邸内に残っている。



写真 (D)

収容所跡地の現況

収容所の跡地を西側から撮影した写真である。一部畑はあるが、ほとんど民家が立ち並んでいる。



写真 (E)

ドラム缶投下により裂けた杉の木

終戦後、収容所への物資補給のため米軍機がドラム缶を投下した。その一部が諏訪神社の境内に落ち、杉の木が裂けた。この痕は今も確認できる。



写真 (F)

地下工場の穴の入口

植木の鋤柄家の上方、畑の脇、入口には清水が溜まっていたが、近所の人々の話では穴の内部は広大で芝浦製作所が疎開してくる予定であったとのこと。穴の場所は玉縄城本丸の真下にあたる。



Ⅲ 体験談

小学校6年生が見た終戦前後の鎌倉

平成11年2月18日

語り手 芹沢良治さん

「芹沢さんの経歴」

これは、終戦当時小学校（当時は国民学校）6年生であった芹沢良治さんが、平成11年2月18日、鎌倉市中央図書館で語られた、終戦前後の鎌倉の様子である。

芹沢さんは、昭和8年（1933年）に鎌倉で生まれ、生まれも育ちも生粋の鎌倉人で、勤めも鎌倉市役所の消防関係の制服組であった。鎌倉のことならスミからスミまで知っている。住まいは、六地藏ろくじざうの近くで父は鉄工所を営んでいた。丁度、昭和20年は鎌倉第一国民学校（現在の鎌倉第一小学校）の6年生で、終戦頃の鎌倉を子供ごころに記憶していることを以下24項目に分けてお話する。

1. 横浜の空襲

昭和20年5月29日、真昼間に横浜が空襲を受けた。この日、伊豆半島の方から飛来した重爆撃機B29が、ハの字に編隊を組んで鎌倉の上空を通過していった。

当時、兄弟のように仲良くしていた近隣に住む2才年長のコー（孝）ちゃんの家でB29の数を数えたが、300機までは記憶している。そのうち八幡宮の大臣山の向こうから入道雲のような物凄い火災の煙がモクモクと幅広く天空に上がるのを見た。今まで見たこともない光景に、思わずコーちゃんの家の出窓を壊してしまったので、今でも鮮明に覚えている。

2. B29とゼロ戦との戦い

B29は、その後何回も鎌倉の上空に飛来したが、これに相對してわが軍のゼロ戦が立ち向かうものの、高度が違って、ゼロ戦から発射する弾は、まるで当たっていない。B29は、ゼロ戦を全く相手にしないで悠々と通り過ぎていく。空襲の目的地は横浜だけではなく東京のこともあった。あとで東京や横浜へ行くのに大船の観音さんを目印にしているのだということを知った。

3. 夜間、横須賀への攻撃—曳光弾

横須賀への攻撃は夜だった。名越なごえのむこうから探照灯が照らされて曳光弾えいこうだんを打ち上げている。曳光弾はまるで花火のように綺麗であった。何処から照らしているのか一般の人には分からない。当時山へ入って行くことは軍から止められており、子供でも入れなかった。当時カメラは一般的ではなかったが、カメラをもってうろつこうものなら、憲兵につかまってしまう。子供ごころに憲兵は怖いものだと言え込まれていた。鎌倉では各町内に防空壕を掘っているが、私の家の近くでは佐助一丁目であって、よく妹の手をひいて逃げ込んだ。

4. ロッキードP38

アメリカの艦上戦闘機ロッキードP38は、双胴の飛行機で、とても格好がよかった。これが第一国民学校をめがけて急降下してくる。時には乗組員の顔まで見えるが、弾を撃ってくることはなかった。

5. 初めての空襲

昭和17年4月18日、まだ、日本は戦勝ムードにあった時、アメリカのドーリットル隊（ドーリットル中佐の率いる日本空襲の飛行部隊）のB25が16機、突然東京に飛来してきた。この日、朝の11時ころ鎌倉の上空に真昼間なのに光るものが見えた。通り過ぎてから空襲警報が鳴ったので、或いはこれがその飛行機かと思っているが、この時のサイレンは今まで聞いたことのない急襲用のものであった。

6. B29の炎上

わがもの顔のB29も尾翼から火を吹いて、相模湾に落ちていくのを見たことがある。それも一機ではなく二・三機のこともあった。

7. 第一国民学校へ陸軍の駐屯

昭和20年5月から6月のころ、第一国民学校に軍隊が駐屯した。一大隊200人くらいだったと思う。当時小学校は生徒数2,600人くらいの大所帯であった。

七里ヶ浜、極楽寺、長谷から大町にかけての広い範囲から生徒が通っていた。一組55人で8組あった。その上、高等小学校から青年学校まであった。当時の校長は池上さんという人で、この校長は教育一家、息子さんも後に校長になられた。軍国主義一辺倒の人で炎天下、1時間や2時間の訓示もあり、倒れる生徒も出るくらいであった。

閱兵や分列行進などをやらされた。国策に協力する優秀校ということで、全国から先生の参観も多く、多いときには2,000人になったこともあった。授業参観日には廊下までギッシリの人でうずまった。軍隊の駐屯で生徒は学校の外での分散授業となって、家庭やお寺での授業となったが、これについては後述(16項)する。学校の建物は木造ながら、口の字形に並んで建っていた。昭和40年に火災が発生して南側二棟と隣接の住宅街を焼いたが、この火事は鎮火に2日もかかった。

8. 第一国民学校講堂の倉庫

広い講堂の一角が倉庫になっていて、あるとき、ここに非常用の乾パンが備蓄されていることを発見、子供達で忍び込んで、取って食べたことがある。とても大きな乾パンであった。

9. 学校教育

当時1年生から3年生までは男女共学であった。4年生から男女別々となり男は1組から4組、女は5組から7組（一組70人）となった。どういう訳か修身の教科書だけは、学期の初めに八幡宮へもらいに行くことになっていた。この時、隣の女の子と手をつないだことを覚えている。後年このことを、その女の子に話したところ、彼女の方は覚えていなかった。

10. 兵隊の炊事

第一国民学校の琵琶小路側の斜面を利用して、ドラム缶を据え付けて竈代わりとし、飯を炊事当番が炊いていた。大きな鍋の回りにこびりついた焦げ飯を兵隊がくれるので、これをもらうのが楽しみであった。子供らが、炊きたての飯がつがれるのを見つめているものだから、兵隊がくれたのであろう。(写真D)

11. 兵隊の魚捕り

当時の兵隊は食糧事情が悪くて、蛋白源に飢えていた。時々、坂ノ下の海岸に鯛を釣りに来ていた。ビール瓶にダイナマイトを仕掛けたものを、一斉に海へ放り込み、魚がびっくりして浮き上がったところを手掴みするのである。これを腕白どもが遠くから見ていて、兵隊が引き上げたあと、泳いでいって、弱っている鯛などをせしめたものである。当時の子供らの泳ぎはたいしたもの、由比ガ浜から沖へまっすぐ江の島が見えるあたりまで平気で泳いでいったものである。

12. 相模湾への米艦船の状況

昭和20年8月27日にアメリカの艦隊が相模湾を覆うようにビッシリ停泊した。マッカーサー元帥の厚木上陸に備えての威嚇であったが、いつものように子供達は、平和を取り戻した海岸で水遊びに興じていた。当時は海水パンツのようなものがないので、男の子は白の六尺ふんどしを締めていたが、真っ黒に汚して家へ帰り、何だそれはとって叱られた。重油で黒くなってしまっていたのである。隣のペンキ屋の親父が、拭き取ってくれた。

13. 米兵の携帯食

その頃、海岸にカートン・ボックスのようなものが沢山打ち上げられていた。何だろうとはじめは用心したが、破れて中身の見えるものがあり、見るとガムだったり、チョコレートだったり、要するに食べるものであった。飲み水が缶の中に入っていた。米兵の携帯食である。上陸作戦がなくなってしまう、不要となって船から捨てられたものであったと思われる。この携帯食も、朝飯用の簡単なものから夕食用まで、種類がいくつかあったことを覚えている。片や魚獲り、片やグルメの携帯食、

彼我の落差よ。(写真E)

14. 海軍(厚木)の抗戦の構え

8月16日か17日、終戦の直ぐ後で、日本の海軍の飛行機が飛んできて、拡声器でビラを撒きながら、まだ戦争は終わっていない、あくまで戦うと宣伝していた。どこから飛んできたのか。当時この近くでは、藤沢高校(藤沢本町)のところに、小さな海軍の飛行場があった。

15. 電波妨害

また、空からキラキラと光るものが落ちてきていた。何かと思ったら電波妨害用の錫テープであった。米軍はわが国に電波探知機(レーダー)があると思っていたのだろう。交番か学校に届けることになっていたので、私の家のそばに交番があるので拾ったものを届けた記憶がある。

16. 分散授業

7項の分散授業のため、われわれ6年生は下級生の机と椅子をペアで運ぶのをやらされた。成就院じょうじゆいんまでの遠い距離で、今だったら親から文句が出るし、子供にこんな使役は考えられないことであるが、当時は当たり前のようにやらされ、何とも思わなかった。海岸通りに出て松林に行くのだが、途中で空襲警報が鳴ったために、机を放り出して近くの海浜ホテルに逃げ込んだ。今のテニスコートのところが海浜ホテルであった。ここの松林は立派で、後年、佐賀県の唐津市近郊の「虹の松原」を見たとき、昔の鎌倉の風景を思い出した。

17. 海軍刀

第一中学校の前に海軍刀を作っている八尾さんという同級生の家があった。ここは当時は山で、近づくことは許されなかった。しかしあそこへ行けば、折れた刀がいっぱいあるというので取りに行った。当時は鉄の不自由な時期であったが、鎌倉では七里ヶ浜で砂鉄が取れる。これを毎日ベルトコンベアで運んで鉄を採っていたようである。たいした分量ではないので、船など造れないが、刀くらいなら作れたろう。鉄を供出するようお上から要請されており、親父が海蔵寺かいぞうじにある、我が家の墓の囲いに使っていた鉄をリヤカーで取りに行った。この時、私と姉とがリヤカーに乗っていったが、帰り道で姉さんが下駄をおっことして泣いたために、探しに戻ったのを覚えている。

18. 監視小屋

由比ガ浜2丁目の山階宮邸やましのみやを出たところに砂丘があって、その上に7~8メートル

ルの高さの監視小屋があった。(現在の鎌倉消防署の前の若宮大路をはさんで向かい側) ここには軍隊ではないが、青年団が交替で相模湾を監視していた。当時は、^{なめりかわ}滑川の西岸まで材木座といわれており、丁度今発掘調査をしているあたりである。

この監視小屋を海の方へ下がったところに、釣堀の池があった。Nさんという家で、後に閉鎖され、魚は散在池に移された。

19. 婦人会の勤労奉仕

^{ぜにあらいべんてん}銭洗弁天へ上がって源氏山公園へ達する道は、当時婦人会が勤労奉仕で作った道路である。当時弁天様へくぐっていくトンネルはなかった。この工事の時に沢山の五輪塔が出てきた。今は道ばたに並べて飾ってある。自分はまだ幼く、せいぜい壕の穴掘りを手伝ったくらいであった。お袋は婦人会でこの勤労奉仕に参加していた。(写真B)

20. 空襲後の破片拾い

当たる当たらないは別として、やたらに高射砲を撃つのでその破片が空から落ちてきた。破片の切り口は鋭く、ものに突き刺さると手では抜けない。小刀に丁度いいので、子供達が争って拾い、家に持ち帰って大事にしまっておいた。私も記念にとっておいたが、何処にしまったか見つからない。

21. 火薬遊び

火薬遊びもよくしたが、火薬を叩いている内に、破裂して手を怪我をした子供がいた。その人は今も健在だが、指先が曲がって不自由であると聞いている。

22. 木炭バス

鎌倉駅東口の京浜急行のバスターミナル(今の東急ビル前)に木炭バスが沢山見られた。今のマイクロバスくらいの大きさで、燃料は薪を燃やして走るので木炭バスと呼ばれていた。二人ぐらいで^{なた}鉋で薪割をしており、これを乾燥させて使用するのである。馬力が弱く、深沢の^{すさき}洲崎の坂道(今のモノレールの下の道)などではこのバスは自力では上がれず、乗客が降りて皆で押し上げ、そのあと大船に向った。

23. 山本五十六の住居

山本五十六元帥の住まいは、材木座にあった。Oさん(外科)の路地を入ったところであって今も原形通り残っている。5~6年前、長男の人が家を見に来たということである。鎌倉には海軍村というのが二つある。一つは大町で、中道橋を中心にしたあたり、もう一つは台山、北鎌倉女子学園のあるところにある。サイパンで玉砕された海軍大将の^{なぐも}南雲さんの住まいは台にあった。

24. 戦後の闇市

ヤミ市は戦後直ぐ、若宮大路のJRガード下から、井上蒲鉾店あたりにかけて発生した。JRのガードは今のようによく真っ直ぐではなく、電車が潜れる程度の狭くてななめのガードであった。江ノ電が駅東口にななめに乗り入れていたためである。江ノ電の終点は今の島森書店のあたりで、15分毎に発車していた。昭和24年3月1日から江ノ電は、今のようによく西口に移った。下馬四つ角からこのあたりにかけて、水はけが悪くて水がよく出た。車など水没することがあった。ヤミ市のとっかかりの店は拓植さんといって、イースト菌を売っていた。

当時は家でふかしパンを作るのにイースト菌は必需品であった。今の東急ビルのところは、林屋材木店の別棟で、それを囲むように飲み屋が建ち並んだ。口の字型の狭い道で、しょんべん横丁と呼んでいた。27～28年ごろ、郵便局の前に街頭テレビがはじめて設置された。珍しかったし、力道山が人気だったのでテレビの前はいつも何百人という人ばかりで混雑し、バスが渋滞していた。当時の郵便局は、道より高台になっていた。

芹沢さんと現地探訪

平成11年6月18日

案内人 芹沢良治さん

芹沢さんに平成11年3月18日と6月18日の2回にわたって、案内をしていただいた。

1. 芹沢商店

由比ガ浜1丁目3の六地藏の近くで鉄工所を営む芹沢商店が、芹沢さんの生家があったところで、現在は駐車場になっている。

2. 理容ウチダ

由比ガ浜1丁目12のバス道に沿い笹目の手前南向きにある理髪店が、^{はまぐち おさち}浜口雄幸首相馴染みの店で、現在も店には浜口首相の使っていた椅子が置かれている。浜口雄幸氏（1870～1931）は、昭和2年、民政党の初代総裁となり、昭和4年首相となる。その威厳のある風貌と篤実な人柄とから「ライオン宰相」と云われた。

3. ^{やましな}山階宮別荘跡

由比ガ浜2丁目21に山階宮武彦氏の別荘があった。

4. 松林

昭和20年代までは、由比ガ浜は、松林であった。

5. 監視小屋

材木座の山階宮邸をでたところにあった監視小屋で、現在の鎌倉消防署の前の若宮大路を挿んで向かい側にあった。

6. ^{なめりかわ}滑川河口

滑川の河口付近で兵隊達がダイナマイトを仕掛けて魚獲りをした。

7. 山本五十六邸

鎌倉市材木座1丁目に山本邸の旧居がある。現在は、別の方が住んでいる。山本五十六（1884～1943）は、大正・昭和期の海軍元帥で、ハワイ真珠湾作戦を立案する。1943年南方の海軍基地を視察中、ソロモン諸島上空で戦死した。

8. 旧石橋湛山邸

旧石橋湛山邸のあったところで、現在はCさんが住んでいる。場所は、御成町の鎌倉中央図書館の近くにある。

石橋湛山（1884～1973）は、東洋経済新報社の社長を経て、戦後自由党に入り、1956年に自由民主党の総裁となり、内閣を組閣したが、病のために3ヶ月の短命内閣となった。

9. 海軍村

鎌倉市大町の中道橋の1本JR横須賀線の線路よりの道にある。

10. 防空壕

鎌倉市佐助1丁目4のMさん邸の裏の斜面に8畳と10畳ぐらいの由比ガ浜地区の防空壕があった。

現在、50～60メートルの高い擁壁がある。なお、このあたりに葛原岡神社くずはらおかの遥拝所があった。（写真A）

11. 婦人会の勤労奉仕で出来た道路

婦人会の勤労奉仕で作った銭洗弁天から源氏山公園へ通じる道（写真B）

12. 海軍村

北鎌倉こうしょうじの光照寺の坂上から斜めに鎌倉市台を貫く道の両端が海軍村であった。

南雲邸なぐももここにあった。（写真C）南雲忠一（1887～1944）は、海軍大将でサイパン島において戦死した。

写真（A）

町内の防空壕

佐助1丁目にあった防空壕の跡で、現在60～80メートルの擁壁で塞がれている。



写真（B）

婦人会の勤労奉仕で出来た道路

佐助2丁目の銭洗弁天の近くの道路。現在は、舗装されている場所



写真（C）

海軍村のあった台からみた風景

この付近に海軍の将校の住宅があった。



写真 (D)

兵隊の炊事

おむすびをもらう少年



写真 (E)

米軍の携帯食

携帯食を拾う少年達

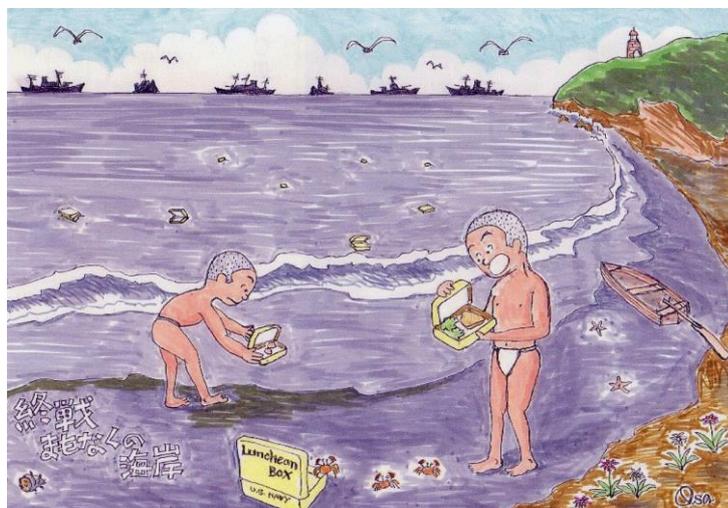


写真 (F)

中学1年生の見た鎌倉の終戦前後

平成11年4月26日

語り手筆者 酒井富美雄さん

「酒井の略歴」

昭和8年生まれ。鎌倉学園（元鎌倉中学校）卒、早稲田大学30年卒。退職後「湘現会」に入会、現在CPC会員。

私は、昭和16年の開戦時は、鎌倉第一国民学校（現鎌倉市立第一小学校）の3年生で、終戦時は私立鎌倉中学校（現鎌倉学園）の1年生であった。

1. 小学校教育の思い出

ちょうど太平洋戦争の最中であつたので、軍国主義一色の教育を受けた。特に第一国民学校は、全国でも模範とされた精神教育と軍国主義教育の有名校であつた。その模様は、平成11年4月5日付「鎌倉朝日」掲載の郷土史研究家清田昌弘氏の記述を参照されたい。特定日か毎日かは忘れたが、壇上に立つ校長先生を前にして、クラスごとに級長の「カシラ右」の号令のもとに、分列行進を行ったのを記憶している。精神教育の一環として、4年生以上の生徒は、講堂の床に正座させられ、鐘の合図で黙祷・開眼し、校長による教育勅語の奉読ならびに講話があり、その間幾度となく黙祷が行われた。

それとは別に、教室の机・椅子を後ろに整理して空間をつくり、床に正座して、先生の指導のもとに「豊芦原の瑞穂の国は……」の長文を斉唱した。また、体育の時間には海軍兵学校ばりの<棒倒し>をよくやったものである。手旗信号の訓練もしばしばあり、今だに「いろはにほへと……」の手旗信号の一部を記憶している。授業のほかに慰問に出ることもあつた。松根油を採取する松の根掘りに従事していた作業員（兵隊ではなく徴用された人たち）を慰問し、私はそこで作業員を前にして唱歌を歌ったのを覚えている。鶴岡八幡宮の裏山だったと記憶している。人手不足の折から、当時、新聞配達は上級生に割り当てられた仕事であつた。朝がた隣組の世話役の家に新聞が纏めて配達され、それを各家庭別に分類整理し、登校前に隣組の各自割り当てられた地域の各家庭に配達した。雨の日は、かさばる新聞の束を小脇に抱え、辛い思いをしたのを記憶している。

2. 空襲体験

昭和17年4年生の時に、米国ドーリットル隊によるわが国初の空襲を受けた。
※（米国ドーリットル隊による初空襲・・・航空母艦から発進したドーリットル中佐率いるB-25ノースアメリカン10数機による奇襲爆撃。昭和17年（1942年）4月18日正午過ぎ、東京は単機ごとに低空から銃爆撃を受けた。後、敵機は西進、名古屋・神戸等も攻撃した後、中国大陸方向に飛び去った。この空襲により防空戦

闘機の性能の劣勢、高射火器の弱体が明らかとなり、軍部特に陸軍首脳に大きな衝撃を与え、防空体制の見直し強化を図る要因となった) 校庭で遊んでいた生徒らが一斉に教室に走り込み、私もつられて急いで教室へ逃げ込んだ。その時サイレンが鳴ったかどうか、飛行機の影を見たかどうか全然記憶がないが、これが私の最初の空襲体験である。父は、当日東京の勤務先のビルの屋上で見慣れぬ綺麗な飛行機が飛んで行くのを目撃し、それが敵機とは知らなかったと、帰宅後に話してくれた。まさに奇襲攻撃であった。

空襲が激しくなった5、6年生の頃、登校に際しては毎日防空頭巾の携行を命じられ、また校庭の四方のすみや、校舎の前面に簡易防空壕が掘られた。屋根はなく、単に爆風よけのものと想像される。

空襲に備えて家庭では、電灯に黒い覆いを被せて明かりを暗くし、緊急持ち出し用の品物を夜纏めて枕元に置いて寝るよう習慣づけられ、この習慣は現在まで身につくものとなった。当時、防空壕は隣組ごとに掘られ、私たちの隣組の壕は来迎寺の裏山に設けられ、昼夜を問わず空襲の際には必需品を携えてそこに避難した。

夜間空襲の折には、怖いながらも防空壕から出て、曳光弾の赤や緑の光跡や探照燈に照らし出されたB29の編隊などを、さながら花火でも見るがごとく、綺麗さに驚嘆し、かつ恐怖感をまじえた複雑な心境で眺めたのを覚えている。

幸いにして、鎌倉は空襲による直接の被害はなかったが、本土決戦に備えるためか、道路の拡幅工事のため材木座の水道路を直角に横切り海岸方面に通じる通称「材木座本通」などでは、家屋の撤去が行われ(昭和19年頃)家を失う人たちが出てきたのは皮肉なことであった。

3. 中学時代

鎌倉中学校の入学試験に「敵機が頭上にあって爆弾を落としたのを目撃した時に、どう対処したらよいか」という、戦時色豊かな出題があったのを記憶している。頭上で落とされた場合は、爆弾は流れるので大丈夫であると、小学校時代に教えられていた。

終戦に至る4ヶ月のうち、前半は通常の授業があったが、後半は私たちのクラスは陣地構築の手助けに行くことになった。当時農村に勤労奉仕に行くクラスと陣地構築に行くクラスとがあった。病弱な生徒を除いては、すでに上級生は学校にはおらず、空いた教室には海軍艦政本部(艦船、機関、航空機を除く兵器に関する技術行政に関する総元締め。これらの新造計画、修理、審査、研究、実験等を主要業務とする)が疎開してきていた。

艦政本部が使用していたと思われる教室の窓ガラスは、嚴重に白紙で目隠しが施されていたが、中からは何時もガチャガチャというやかましい音が聞こえていた。今にして思えば、タイガー計算機(ハンドル操作の機械式計算機で便利な電卓が普

及する以前に会社などで使用されていた)を手回ししていたようである。場所は、現在の巨福呂坂洞門から北鎌倉駅に通じる道路に並行して建てられた二階建て木造校舎の、奥の体育館に通じる一階の廊下の右側の空いた数教室である。当時、健康な生徒は勤労働員で学校を離れ、使用されていない教室がいくつも存在した。

艦政本部が疎開してきた昭和19年に、海軍軍需部(各軍港と徳山、馬公を除く要港並びに大阪に置かれる。軍需品を準備・保管し、必要に応じて艦船部隊へ供給するのが主務。併せて艦営需品、被服、糧食の研究も行った)及び東京鉄道局の各一部が疎開して来ている。海軍艦政本部か海軍軍需部かのいずれかに所属した設計課が、海軍戦闘機「櫻花」の設計に従事していたようで、使用していた数教室の窓ガラスを嚴重に目張りしていた理由もうなずける。いずれの組織も終戦と同時に退去。軍関係施設が使用していた関係上、終戦後アメリカ軍による警備と調査を受けたという。

戦時下であった当時、授業に軍事教練があり、配属将校から木銃の使い方を習ったり、軍人勅諭の暗誦を求められた。

4. 陣地構築の体験

陣地構築には玉縄地区と常盤地区の2ヶ所に行った。

● 玉縄地区

毎朝、現場に行く途中、捕虜収容所のそばを通り、上半身裸姿の捕虜を目撃することがあった。ある現場で兵隊たちが孟宗竹を短く切って、食器代わりに使っているのを見た。軍事通の元軍人の話によると、辻(政信)元参謀(戦後国会議員、のち行方不明)の発案になったものであるという。当時のザレ歌に「嫌じゃありませんか徴用は、鉄の茶碗に鉄の箸、仏さまではあるまいし、一膳めしとは情けない」というのがあったが、その現場で目撃した光景は、ザレ歌よりもひどいものであった。その当時、横須賀軍港をアメリカ軍艦載機が急降下爆撃するのを大船観音付近から見た。

● 常盤地区

大仏切通(トンネル)を抜け深沢の方に出て、鎌倉山に通じる桜並木を少し上がって、左に折れる細道をしばらく行くと、右手に大きな庭付きの農家があり、そこに陸軍の兵隊が分宿、陣地構築に従事していた。農家の広い廊下に置かれた重機関銃・軽機関銃をこの目で真近に見ることが出来た。いかにも兵器らしい重機関銃に畏敬の念を抱いたものである。

私が通った作業現場は二つあり、一つは大仏側からトンネルを抜け、右に少し行ったところで、近くに池があり、梅が何本か生えていた。その左手付近では、兵隊が道路工事を行っていた。もう1ヶ所はトンネルを抜けた道路の右手の山裾で、ダイナマイトを使用して穴掘り作業をしていた。えんぴ(円匙)つるはし、ダイナマ

イト、むしろ、土石運搬用もっこ、排煙用の大型扇風機などが作業用具であった。私たちは、ダイナマイトを仕込んだ穴に詰めるダンゴを作らされたり、土石運搬などをさせられた。通常、ダイナマイトで爆破した際生じる煙の排除のために大型扇風機が利用されるが、時に生徒がむしろを持って、奥から入口まで走って煙を押し出す役をやらされた。まさに人間排煙機である。甘味に飢えていた時でもあり、兵隊から「甘いから嘗めてみな」と言われて、ダイナマイトを嘗めた経験がある。ピリッピリッとした刺激を舌に感じたのを記憶している。

5. 中学時代の空襲体験

陣地構築の現場への行き帰り、しばしば空襲にあうことがあったが、最も記憶に鮮明に残っているのは、敵艦載機による横須賀軍港空襲で、大船観音付近から山越しに遥か遠く、艦載機が数珠玉状に餌をねらってダイブする鷹さながらに、急降下爆撃する光景であった。

頻繁にあったことではないが、材木座の五所神社近くにあった我が家の屋根に高射砲弾の破片が落ち、瓦が割れて穴があく被害を被ったことがあった。空襲の際は、最悪の事態を想定して、我が家では貴重品を庭の井戸に投げ入れるよう指示されていた。家族が全員避難した後も、兄と残って屋根に上がり周囲の状況を見張ったことがあったが、その際に特に印象に残ったのは、横浜方面夜間大空襲の折のそれで、北の空が真っ赤に焼け、山々の稜線が黒々と浮き出された光景であった。空襲の際、特に恐怖を覚えた経験は、彼我の戦闘機による空中戦で、バリバリッというかなり低空でのエンジン音と共に、ドカンという爆発音に生命の危険を感じて、母と共に、押入れに逃げ込んだことがあった。直後に調べて分かったことは、爆発音は我が家から二軒ほど離れた家屋の近くに機関砲弾が落ちた音で、門や近くの電柱に弾痕が確認できた。これは、日中の出来事であった。空襲の折、高射砲が撃たれるのは当然のことであるが、高々度を飛行するB29にはあまり効果はなかったようである。

終戦が真近に迫ったころと思うが、これまでの高射砲弾の炸裂とはまったく違った炸裂が空に現れたのを記憶している。爆発と同時に丁度タコの足のよう^{しだ}に枝垂れ柳状に硝煙が垂れ下がってきて、非常に印象的光景を呈した。生徒間では、B29を撃墜するための新型砲弾（戦時中に高射砲隊に所属した浄智寺の和尚様の話では、正式名称は「夕弾」）の出現かと話題になったが、真偽のほどは分からなかった。授業中に空襲があると避難はしたが、鎌倉には爆弾は落ちないという経験則から来る安心感からか、B29が編隊を組んで飛行するのをゆったりとした気持ちで眺め、B29が電波妨害用の錫テープを次々に撒き散らし、テープがキラキラ輝きながら落ちて来る異様な光景を見たのを覚えている。

6. 鎌倉中学校における終戦当時の思い出

疎開をしていた施設が残っていた多量の用紙が、生徒たちに分配され、紙の不足の折からノート代わりに使用したりして、大いに助かった。校庭内に兵器庫（銃器庫）があり、使い古しの小銃や木銃や、背囊、弾薬入れなどが保管されていて、背囊などが生徒たちに分け与えられたが、本革製の立派な出来のものであった。終戦とともに、学校内では出戻りの予科練帰りの上級生が幅をきかせていた。

7. 終戦時の相模湾と材木座海岸の様子

終戦後しばらく経て、アメリカ艦隊が相模湾沖に集結、夜は艦隊から漏れる明かりで綺麗であった。終戦の詔勅が発せられた後も、日本軍の飛行機が低空飛行をして徹底抗戦のビラを撒き、しばしばデモンストレーション飛行をするのを海水浴中に見た。

材木座海岸の沖合いでは、アメリカ軍の双発飛行艇が着水をしたり、飛び立ったりしていた。平和がやっと戻ったとはいえ、一種の緊迫感を抱いた。

小坪に通じる山裾を取り巻く細道にあった海岸砲（口径20センチぐらい）付近から米兵が海岸に向けて、ピストルを乱射するのを見かけたことがある。終戦日から幾日経過したか定かでないが、海岸砲二門はそのころには占領軍によって砲身が爆破され、亀裂が生じたまま無残な姿をさらしていた。

8. 終戦時の鎌倉市内の様子

陣地構築がなされていた近くの寺の境内などに、機関砲などの兵器が雨ざらしに放置されていた。小銃弾が簡単に手に入り、薬莢から火薬を抜き取って遊んだりした。今にして思えば身の毛もよだつ、まさしく「禁じられた遊び」であった。

鎌倉市内の要所には進駐軍の歩哨が立ち、私の家から近くの名越^{なごえ}の横須賀線踏切近くの三つ角には、若いアメリカ軍の兵隊が歩哨に立っていた。下手な1年生の英語で手振り身振りをまじえて、会話したことを記憶している。

アメリカ軍による市内の道路修理の現場を目撃したことがあったが、補修拡幅に大型機械を使用して、物凄いスピードと規模で作業を進めていた。日本軍の陣地構築の手伝いの時に見た粗末な作業用具と照らして、機械力の偉大さに驚嘆するばかりで、精神力の空しさをまのあたりにした思いであった。

鎌倉市内には随所にトンネルが存在したが、そのうちには日本軍などによる軍需物資の備蓄用に使用されたものもあり、出入口は厳重に封鎖され、通行禁止となった。

私が記憶しているその手のトンネルには、逗子に通じる新名越^{なごえ}隧道に並行して存在する名越隧道、及び現在巨福呂坂洞門に平行して造られ横須賀水道巨福呂坂送水管隧道などがある。

また、市内には瀟洒^{しょうしや}な洋館がかなり存在したようであるが、それらの中には駐留軍将校家族用の住宅として接收されたものもあり、本覚寺の山門に近い洋館で、芝生の生えた庭で駐留軍家族の子供たちが、楽しそうに遊んでいる光景をしばしば目撃したものである。

由比ヶ浜海岸に近く由緒ある海浜ホテルは、駐留軍施設として接收され、火事で消失したが、夜間に遠くから火事見物に出掛ける程の大火であった。その火事の凄まじさは、今も記憶している。

現在ヒロ病院が建っているそばを流れるどぶ川の橋の袂に、白くペンキで化粧された洋館があり、ダンスホールとしても利用されていて、外人に混じって日本人が踊っているのを覗き見した。

戦前から戦後にかけて、材木座の鉄管橋（滑川にかかり海岸橋に平行してかかる送水管用の橋）近くから、今の鎌倉第一小学校あたりにかけての若宮大路は、両端に松の老木並木が続き、鬱蒼として昼なお薄暗く人家もほとんど建っていない状態で、夜などは寂しく婦女暴行や殺人事件などが発生した。そのために、海岸橋近くの四つ辻に駐在所（昭和16年に設置され、同26年6月に廃止）が建てられ、犯罪防止に貢献した。

鉄管橋近くの空き地に、完成の暁には映画館になると噂された未完成の建造物が出現し、骨組みが出来上がった状態で工事は中断、祟りが原因などという噂を耳にした。その辺り及び若宮大路周辺は古戦場跡で、掘れば必ず人骨が出ると噂され、家を建てる人は少なかった。若宮大路の現在の有様からはとても想像出来ない光景であった。

9. 戦争遺跡

飯島から小坪へと通じる、当時、山の崖に沿うように造られた細道に、数メートルの間隔をおいて口径20センチほどの迷彩が施された海岸砲二門が、一門ずつ大きな穴の中に据え付けられていたが、現在は当時の面影もない。当時の細道の崖下は、波打ち寄せる海であったが、現在はモダンな建造物が建ち並ぶ近代的集合住宅街の逗子マリーナになっている。

戦時中、材木座の光明寺には兵隊が合宿しており、裏山の崖には銃眼や、山裾には横穴などの陣地構築の跡が見られる。遥か彼方まで海岸を眼下に一望できる絶好の場所である。

大町の長勝寺（現在は材木座地区に所属）近辺にも兵隊が泊まっていたようで、鉄の車輪の付いたリヤカーで、金属製の大缶や物資を運んでいる兵隊たちをよく見掛けた。

長勝寺の裏山にある「名越やすらぎセンター」へ通じる現在の山道は、以前は桜の並木道で、子供たちの良き蟬捕り場として知られ、人家などない静かな所であつ

た。その山裾に陣地構築の跡を思わせる横穴が幾つかある。

10. 終戦前後の食糧難

戦局も悪化し、敗戦の色濃くなるにつれ、食糧の配給は量的にも質的にも悪化の一途をたどり、幸いにも父の実家が農家であったことから、夏休みには兄弟で泊まりに行った。私が6年生の頃と記憶している。米の配給は僅かで、馬鈴薯や甘藷の配給は、食糧として最上等の部類として歓迎された。ひどい時には、甘藷のつるを食べたこともあった。父の実家から裸麦をもらってきて、手回し製粉機で粉に挽き、スイトンを作って食べたが、当時は醤油などの調味料も不自由で、従って味付けもひどく、加えて粗挽きのため、<かす>が混じった今日ではとても食べられそうもない代物で、それでも当時は口に入るだけでも幸せであった。月に何回か父の実家へ買い出しに行ったものである。

塩の配給も十分でなかったため、海水を濃縮して調味料として使ったりもした。

終戦直後は魚の配給などではなく、蛋白源として「ギンボ」(ニジギンボ科の魚)を食べ、飯島いじまの和賀江島わがえじまに釣りに出掛けた。短い細竹の先端にハリスをつけた簡単な釣り道具で、干潮の際に玉石の間に竹竿を突っ込む。体長10~15センチぐらいの鰻のような魚で、食欲であり餌には磯玉を使った。

終戦後アメリカから援助物資が贈られたが、記憶に残るものに大豆粕がある。炒って食べたが、その他には大量の粗糖(粒状)の配給を受け、飴を作って食べ楽しんだりもした。

戦時・戦後を通じて食糧不足を補うため、空き地のある家庭では家庭菜園が行われ、我が家では祖父が植えた立派な藤の棚がカボチャ棚に変身、かなり広がった庭は、食糧自給のため無残にも畝に変わり、現在も庭の奥に鎮座する大石のみが、昔の庭の痕跡を留め、時代の移り変わりを見つめてきたわけである。

11. 教科書について

終戦直後は混乱の時期でもあり、しばらくは正常な授業は行われなかった。新しい教育方針のもとに作られた教科書が、生徒に行き渡るまでは従来の教科書が利用され、教師の指導のもとに、教科書のアチコチに墨を塗って文章を削除した。軍国主義教育から民主主義教育へ、皇国史観の全面的否定という大変革が起こったからであった。新教科書が何時ごろ配布されたかは記憶に乏しいが、初めて手にしたのは教科書といえる代物でなく、タブロイド判の紙質の悪いもので、各自がペーパーナイフで切断して仮製本し、それでもこれで本当に授業が行われるのだ、という期待感と喜びを抱いたのを記憶している。

教科書ということで、一番印象を深くした本に、GHQの指導のもとに編集されたという『民主主義』という教科書があったが、かなり部厚い立派なもので、初め

て教科書らしい本を手にしたというのが実感だった。

[付記] 平成15年6月21日に行われた、小坪の二門の砲台についての高橋二郎さんとの面談及び砲台跡の再調査、並びにその後の文献調査によって、二門の砲台は、いずれも15センチカノン砲であることが判明した。

なお、更に詳しくは、「小坪の二門の砲台と戦後の小坪について」（高橋二郎さん談）の項、並びに『逗子市史通史編』の826ページの囲み内の記述をも参照されたい。

写真 (A)

戦時中、家屋の強制撤去があった現在の「材木座本通」

この通路名は通称で、水道路を横切り、材木座海岸に通じる。この通りの左側の家屋が強制撤去され、当時小学校への登校・下校時に撤去作業を目撃した。
2項目を参照のこと。



写真 (B)

年若いアメリカ兵が立哨した、JR横須賀線名越踏切近くの三つ角

鎌倉から逗子に通じる要所であり中学1年生のたどたどしい英語で米兵と会話し、チューインガムなどを貰った。
8項目を参照のこと。



写真 (C)

戦時中、軍需物資の備蓄用に用いられた名越隧道(左側のトンネル)

鎌倉と逗子の境界にあり、戦時中は、右側のトンネルが通行用に使用されていた。
8項目を参照のこと。



写真 (D)

**軍需物資の備蓄用に使われた
横須賀水道巨福呂坂送水管隧道**

小袋坂と呼ばれ現在のような洞門ではなかった当時、坂にほぼ平行して存在したトンネル（写真の右側のトンネル）

終戦後も暫くの間、出入口は嚴重に閉鎖されていた。

8項目を参照のこと。



写真 (E)

ギンボ釣りによく通った飯島の和賀江島の現況

写真左側、崖の下辺りに小さな一軒の釣道具屋があり、そこで、ギンボ釣用のハリスや竹竿などを買った。

10項目を参照のこと。



写真 (F)

中学1年生の戦中・戦後鎌倉の回想記

平成11年6月25日

語り手 吉澤静夫さん

「吉澤さんの略歴」

昭和7年生まれ、鎌倉学園（元鎌倉中学校）入学卒、明治大学同30年卒。都庁勤務退職後、御成町末広自治会長。

1. 鎌倉への移転

それまで一家は今の東京都文京区千駄木町あたりに住んでいたが、父の兄つまり伯父の誘いで、小学校と目と鼻の先である現在の御成町に移り住んだ。運送屋のトラックの荷台に乗って、砂利道を揺られながら深沢から大仏坂だいぶつさかを通して来たのを覚えているが、途中は田んぼの続く静かな寂しいところであった。昭和13年のことである。当時の鎌倉は鎌倉郡鎌倉町といい、避暑地、保養地として名高く、別荘なども多く、南を海に面し、三方を丘陵に囲まれたまことに静かな町であった。

2. 御成小学校での戦時下の思い出

昭和15年秋の紀元2600年祝賀行事があったのは、私が御成小学校低学年在学中のことであった。日中戦争は戦線がどんどん拡大化され、日本はもはやどうにもならない泥沼にはまりこんでいったのである。その後、小学校も国民学校に改まり、教育の軍国化が推し進められ、毎日のように、校庭では分列行進（軍隊儀式をまねて、クラスごとに隊列を組み、級長の「カシラ右」の号令のもとに校長の前を行進する）が繰り返し行われるようになった。戦時体制の強化で国民生活はきびしく統制されたのである。

昭和16年12月8日の朝、校庭には軍艦マーチが勇ましく流され、朝礼時に守屋校長から、日本は米英軍と戦闘状態に入ったことが話され、子供ながら何か血の騒ぐのを覚えたものである。当時学校には鎌倉実科高等女学校が併設されていたことも特記しなければならない。現在の県立鎌倉高校の前身である。

今の鎌倉市役所のあたりは、当時は学校の敷地内で、由緒ある御用邸の跡地であったので、深い松の緑に包まれ、諏訪の森と称し、大きな池のかたわらには諏訪神社があり、けやきの大木がポイントになっていた校庭は広く、また西側に山を抱き、まことにすばらしい教育環境にあった学校であった。小学校3年生になると少し離れた分教場で一年を過ごしたことが思い出される。場所は今のNPOセンターのあるあたりで、集団教育を体験させることが目的であった。4年生以上の高学年は、行軍という呼び方で、学校から平塚の馬入川ばにゅうがわまで往復歩行をさせられた。たしか季

節は秋だったと思うが、学校を朝早く出発して帰校したのが夕闇に包まれたころだったと思う。途中の辻堂の海岸には海軍の演習場があって、そこは通れないようになっているのでわざわざ迂回して歩いたので、その分距離が長くなり、往復でたしか約40キロくらいと先生から聞いた。級友6人が一本のロープを持って一人の落伍者もなく、連帯責任をもって完歩した時は大変嬉しかった。それからまだ空襲がなかった夏の一時期、授業の一貫として楽しい水泳訓練が材木座海岸で行われた。昇級試験があって、それに合格すると、水泳帽に線が表示されるのでよく目に付き、一種の優越感を覚えたものである。

そのほか国策に従って、校内の松の木を倒し、根っこを供出した。これは松根油を取って、航空機の燃料にするためのものであった。また松の枝を燃やして炭を作ったり、防空壕掘りをしたり、鎌倉駅東口で英霊（死者の魂の尊称、特に戦死者の霊）を出迎えたり、ちよま（苧麻）を横須賀線扇ヶ谷のトンネル付近で採り、衣料の原料として供出したり、楽しかったこと、苦しかったことなどが思い出となって浮かんでくる。

国民学校の講堂は、時として徴兵検査場としても使われ、合格の暁には戦場へと送られて行ったのである。検査が行われていたある日のこと、休み時間中は特に「静粛に」の規則をつい忘れて、友達と二階の教室から駆け降りてきたところを、教頭先生に見付かり、お互い耳をもたれて校長室に連行され、しばらく正座させられた後、担任が来てこっぴどく叱られ、往復ビンタをくらった。また明治節（明治天皇誕生日、戦前の四大節の一つで11月3日）の式典で、校長先生が教育勅語を読み出し講堂内が一瞬静粛な時に、私のクラスのうち私を含む6～7人が、外を通る包丁・バリカン研ぎの爺さんの節をつけた奇妙な声に思わず吹き出してしまい、その場で先生たちに腕を掴まれ、式典終了後、家に帰してもらえず、しばらく講堂の壇上に座らせられ、夕方になってやっと許されて帰宅したことなど、記憶を辿って行くうちに、タイム・スリップして数々の思い出が蘇ってくる。

3. 小学生時代の空襲の思い出

戦争が激しくなるにつれ、しばしば本土空襲が行われるようになり、鎌倉は何時やられるかと不安になってきた。警戒警報が発令になると情報次第で授業は中止され、下校命令が出て子供心に複雑な気持ちで帰宅を急いだものであった。B29大型爆撃機を探照灯が捕らえ、高射砲により火の玉となり、ゆっくりゆっくり落ちていくのを目撃したことがあった。その時は本当に胸のすく思いがした。

鎌倉は横須賀の軍港に近いこともあって、海軍の将校が多数住んでいた。我が家にも九州出身の新婚早々の軍医夫婦が下宿していた。昭和17年頃と思うが、横須賀の海軍病院勤務をしておられた。勤務が終わり帰宅時には、時々「坊やたち、お土産だよ」と言っっては、菓子などをもらったことを思い出す。その後、艦隊と共に

出航し消息が途絶えていた。奥さんはお里に帰られたようである。暫くして、母からどうも戦死されたらしいとの話を聞いた。本当にお気の毒なことであった。

4. 鎌倉中学校での戦時下体験

一縷^{いちる}の希望を抱いて、中学（旧制）に入学したのは昭和20年、建長寺の桜が満開のころであった。入学試験はなかなか難関で、学科試験と口頭試問（面接）があった中でも陸軍配属将校による面接は軍隊調そのものであった。「お前は何の目的でこの中学を受験したのか」とか「軍人勅諭を述べよ」など質問され、大きな声で応答したことを覚えている。授業が毎日出来たのは入学後最初のうちだけだった。金モールをつけた海軍将校がある時軍事講話に来られたことがあった。在校の生徒全員、体育館に集められた。主に戦況の説明であった。黒板に大きな地図を掲示して説明される様はまさに真剣そのものであった。しかし戦況は我に利あらず、敗戦は必至で時間の問題であるかのようであった。もはやどうにもしようがない末期的症状であった。間もなく我々にも勤労働員の命令が下り、敵の上陸に備えて陣地構築の作業に従事したり、ある者は農家の手伝いに行かされた。私は大船駅の西、植木地区にあった陣地構築作業をさせられた。モッコを担いで、残土を捨てに行く仕事であった。作業の行き帰りに竜宝寺の側にあった捕虜収容所の前を通った。彼等は頭を丸坊主にされて監視のもとに作業をしていた。「日本は負けるよ。アメリカが勝つ。もうすぐ援軍が助けに来るよ。」と片言の日本語で言っていた。朝作業現場に着くや、警戒警報から空襲警報のサイレンが鳴りわたり、生徒は解散しすぐ待避せよというので、大船駅の近くまで戻ってきたところ、電車は全線不通とのこと。友達何人かと大船観音の胎内に身を隠した。観音さまはまだ未完成で、中から一部外が見える状態であり、敵艦載機を見守った。搭乗員の姿が見えるくらいの低空で、バラバラに目的地に向かっていった。京浜地区の方向に黒煙の上がるのが遠望された。大船観音はアメリカ軍事評論家の故ボールドウィン氏の手記によると、東京・京浜地区空襲の時の進路目標だったようである。

5. 終戦日の思い出

8月15日正午、玉音放送を家で近所の人も交えて聞いたが、その時はラジオもやたらに雑音が入り聞きづらく何が何だか判らなかった。あとで降伏したことを知った。ホットした気持ちと不安とが私の心に入り混じっていた。8月も終わろうとしていた頃、近所の友人と由比ヶ浜へ遊びに行った時の光景は生涯忘れることが出来ない。左前方はるか沖合いに、無数の大小艦艇が停泊していた。あの威容を目にした時、私は、いいしれない恐怖感と絶望感にさらされた。戦争が終わって本当によかったと、つくづく思ったものである。

6. 戦後の思い出

8月17日か18日に厚木航空隊の飛行機が飛んできて、日本は負けていない、徹底抗戦をするのだという宣伝ビラを撒いていた。

戦後まもなく、昭和21年頃だったか、逗子に住む友人が洞窟の中に軍需物資が大量に保管してあるというので、一種の冒険心から見に行った。場所は小坪から逗子へ向かうバス通りの、披露山入り口のバス停の手前の左側で、今はその上が亀ヶ岡住宅地になっている。中にあったのは、旧海軍の超短波受信機ですごいものであった。中学生二人では持ち上がらないほどの重さのもので、ゴロゴロあった。七つ道具で音のしないように、そっと開けて中からレシーバーやトランスなどを盗み出し、東京は新橋のヤミ市で売った。食糧不足もさることながら、極端に物資が不足しており、こんなものでも売れたのである。

鎌倉のヤミ市は、若宮大路のガード下あたりから井上蒲鉾店に至る間に屋台同然の店が並んでいた。結構人通りも多く賑わいを見せていたものである。その頃は、江ノ電が島森書店の前から発車しており、ポールのついた古い車両で連結はなく、一台で運転されていた。江ノ電が鎌倉駅西口に乗り入れたのは、昭和24年3月のことであった。終戦直後は鎌倉にも進駐軍の姿が多く見られたが、その数も朝鮮動乱が勃発すると共に、次第に少なくなった。

神奈川県鶴見埠頭に建てられた進駐軍のカマボコ兵舎にペンキ塗りのアルバイトに行ったこともある。また久木に米軍の黒人専用のクラブがあったが、そこへ3ヶ月ほど夜間のアルバイトに行った経験がある。場所は鎌倉から逗子へ向かう道の逗子の手前、二葉会館をはいったところであって、丁度朝鮮戦争の前であった。一方、白人専用のクラブは横須賀にあった。

鎌倉は戦前・戦後ですっかり変わった。この図書館（中央図書館）の建っている場所一帯は、当時宮内庁の木造の住宅が何棟かあった。昔、この場所に御用邸があった関係からか戦後しばらくの間存在していたのである。

月日の経つのは早いもので、間もなく戦後54回目の終戦の日を迎えようとしている。戦争のない今日の日本の現状を思う時、つくづく平和の大切さを痛感しているこの頃である。国民を不幸のどん底に落とし入れた悲惨な戦争体験を、風化させることなく、次の世代へ正しく語り伝えて行くことが必要なことである。

土地っ子の戦時体験（1）

迎撃用陣地構築と徴兵検査

平成13年6月21日

語り手 大木泰次郎さん

平成13年6月21日に鎌倉市中央図書館3階の会議室で、現在鎌倉市^{じゅうにそ}十二所地域の町内会長をしておられる大木泰次郎さんから、戦時中の鎌倉における戦争体験について語っていただいた。

1. 生い立ち

私は昭和2年（1927年）の1月24日生まれ、昭和16年に鎌倉第一小学校を卒業してその高等科へ進んだが、戦時中のことでろくに勉強もしなかった。

生家は農家で、身体も頑健で力もあり、出征兵士のいる商店などへお手伝いに行った。扇ヶ谷の大黒屋さんや二楽荘の裏の山本米店、妙本寺前の魚七の3軒には毎日のように行っていたが、それでも尋常高等小学校の卒業証書はもらった。後に鎌倉郵便局で働きながら、青年学校にも属して戦時訓練を受けた。

私の父、大木藤太郎は近所でも有名な物知り博士で、何でも紙に書いていた。親父の性格がうつったのか私も手帳に事細かく書く習慣がついており、現在昭和16年からのメモが残っている。将来これを抜粋して自分史を書くことを考えているが今はその暇がない。分からないことがあると家の近くにある光触寺の和尚さん（先代）に聞くことにしており、聞けば親切に教えてくれるが、聞かねばそのままであった。

父が残した書き物は永く開けないままにしてあったが、その中の一部に餅つきの変領が書いてあった。「餅米がふけたかどうか」の見分けかたの記述などは貴重である。今も町内で餅つきを年末に行事として続けている。

2. 迎撃用陣地

戦時中、今の鎌倉霊園になっている前山公園の所と、逗子の披露山および伊豆の大島に高射砲陣地があり、また衣張山と逗子の柏原に機関砲陣地があった。

稲村ヶ崎の切り通しに面して、2ヶ所の穴を掘る作業に従事した。穴の内部の補強には十二所の杉の木を切って運び使用した。苦勞して完成させ機関砲を据え付けたのが8月13日終戦の2日前のことで、折角の威力を見ることなく終わってしまい非常に残念であった。

そのほかに鎌倉山の旭ヶ丘近く、北畠八穂さんの近くでも3日間掘りに行った。敵の戦車を迎え撃つのだと兵隊さんが言っていた。

3. 徴兵検査と終戦の日

昭和20年7月に御成小学校で徴兵検査を受けて一人だけ甲種合格となった。米俵を持てるかと聞かれ、これを持ち上げた。すると今度は「させ（頭の上にかざすこと）」と言われて苦しまぎれに差し上げた。私と同じ年代の兵隊が鞭をぴんぴんいわせて実行を迫るので緊張した。

兵科は郵便局に勤めていたこともあって、通信兵と決まった。「イロハのイ」、「カワセのカ」、「タバコのタ」…………と2日で覚えてしまった。入営は8月15日であったが丁度終戦の日であり、運がよかったのか私の戦時体験はここで終わった。

終戦の日に鎌倉郵便局の高見（煙突の上）に登って白い布（手ぬぐい）を結びつけたが、そこから海上一面に敵の艦隊が集結しているのを見た。これは私だけの経験だと思っている。22～23日ころもう一度見た時には、海が無くなったと思うくらい黒い船で埋まっていた。

4. その後の状況

昭和16年に郵便局にはいって、昭和31年に辞めるまで無遅刻、無欠勤で病気もなし。その後は地域社会の維持・発展のための公益活動に専念している。昭和46年からは、十二所町内会にかかわり、平成7年からは広く鎌倉市や警察関連の仕事をお手伝いするようになった。これまでにいただいたご褒美（感謝状・表彰状）は28におよんでいる。

土地っ子の戦時体験（２）

勤労働員と兵隊さんの思い出および空襲

平成13年6月21日

語り手 金井 茂さん

平成13年6月21日に鎌倉市中央図書館3階の会議室で、生まれも育ちも十二所^{じゅうにそ}で完全な土地っ子であり、元鎌倉市浄明寺地域の町内会長をしておられた金井 茂さんから、戦時中の鎌倉における戦争体験について語っていただいた。

1. 戦時中の勤労働員と終戦時

私は昭和7年（1932年）生まれ、出生も育ちも十二所であり、生家は農家であった。終戦の時は鎌倉中学の一年に在学していた。

毎日毎日穴掘りの勤労働員で、鎌倉山や関谷、極楽寺の谷戸などで働いていた。大船にあった捕虜収容所のところは、勤労奉仕に行く途中に傍を通過していた。

仕事は兵隊さんがつるはしで穴を掘って、その土を生徒がバケツに入れて外へ運び出す作業だったが、私は背が低くて体力がないものだから炊事当番に回された。山芋掘りが得意だった。

終戦の日いつものように鎌倉山へ行く途中だったが、長谷の大仏さん前の道路に集められ、お前たちは帰ってよいと言われて帰宅した。正午に放送された終戦告知放送の前のことで、午前9時頃であった。

2. 戦時中の思い出の一コマ

戦時中の思い出として、兵隊が私の家に来て、「たまには変わったものが食べたい」と言うので、蕎麦を打って持って帰らせたことがある。乾パンや干し鱈を代わりに持ってきた。

この兵隊は逗子弾薬庫のあった柏原に据え付けてあった機関銃陣地に所属する海軍の兵隊さんであった。大きな部隊ではなくおそらく数人グループではなかったかと思われる。その中の隊長さんが今度硫黄島へ赴任することになったと挨拶に来られたことがあった。おそらく戦死されたのではないか。

3. 鎌倉にも焼夷弾が落ちた

中学1年の時（終戦の年）であったが、空襲警報が発令されていた5月のある晩（5月23日）父と一緒に空を見上げていた時に、ゴロン・ゴロンとB29が飛んできておかしいなと思っているうちに、ゴオーッという音とともに大量の焼夷弾が東になって落ちてきた。飛行機の飛んできた方向が東京方面からであるので、おそらく「帰りの駄賃」（積載量を減らす目的で、東京方面で落とし損なったものを処理するため）ではなかったかと思われる。

10個ぐらいの火の玉が十二所の前山（現在の鎌倉霊園近辺）から浄明寺にかけてポンポンと並んで落ち、それが途中で束が弾けて丁度花火大会の枝垂れ柳のように落ちてきた。低空で落とされたためか個々の焼夷弾は発火するに至らず、不発弾として土中へ大量に突き刺さってしまった。

焼夷弾は油脂焼夷弾で長さが約1メートルくらいあり八角形の円筒状のものであった。落ちた所が幸い畑や田圃と山ばかりであったため、家や人畜に被害は無かった。しかし直接の被害は無かったものの田植え前の田圃へ無数に刺さっているものだから、田圃一面が油まみれとなりその処理に追われた。突き刺さった焼夷弾は横須賀から来た海軍さんの指示によると破裂の心配はなく大丈夫だとのことで安心した。

しかし手で引き抜けるほど容易いものではなかった。抜いたものは初めは馬力に積んで警察へ届けたが数が多くて処理しきれず、田圃の片隅に積んで放置していた。落ちた所は、十二所から朝比奈へ向かう県道の右側山寄りの場所で、光触寺の裏から明石谷、積善までの山や田圃の中であった。集落からそれたのが幸いであった。

4. 鎌倉における空襲警報と民間人の対応

当時防空壕は各家毎に掘ってあったが、空襲警報で逃げ込むという習慣はあまりなかった。これは、「鎌倉は空襲しない」というアメリカ側の情報によるものではなく、「敵機は鎌倉の上空はただ通過して行くものだ」との思い入れから危機感が無かったことに由来するようである。むしろ警報が鳴るとB29を眺めるために、防空壕の外で大した恐怖感もなく空を見上げるというのが一般的風習であった。

横浜の空襲も赤い空の方向をただ見ているだけであった。ただ艦載機が十二所の山の上で急降下して横須賀方面へ突っ込んで行くのは怖かった。それに対して逗子の柏原あたりの高射砲（機関砲）が下から撃つものの敵機には届かず、パラパラと火の粉が落ちてくるだけだった。

戦争少年の思い出

平成13年4月19日

語り手 ^{ななお}八木直生さん

1. 私は現在鎌倉シルバーボランティア・ガイド協会に在籍してガイドをしている。
私は昭和3年生まれ、建設会社のサラリーマンであった父親の満州・北支への赴任に伴い、虚弱であった子供を育てる健康地に鎌倉を選び、昭和12年に家族は鎌倉に移転して来た。この時私は小学校4年生、第一小学校に転校、担任は芦川先生、5・6年は浅羽先生であった。校長先生は優秀のほまれ高い池上敏郎先生で先生には鍛えられた。
2. 今、年を重ねて自分自身の精神的形成過程を振り返ってみると、少年時代に教えこまれたこと、経験したことが根底にあることを痛感する。特に池上校長の教えは記憶に鮮明に残っている。池上校長は自著「私の一日」と題して児童編と職員編とに分けて書いておられ、それが鎌倉市史近代通史編の中にも引用されている。いわゆる児童の行動規範である。児童は校門を入ると、まず奉安殿（注1）に最敬礼して教室に入る。教室では朝礼があって、天壤無窮の神勅を斉唱させられる。何べんも唱えているうちに、覚え込んで現在も暗唱が出来る。
「豊葦原（とよあしはら）の千五百（ちいほ）秋の瑞穂（みずほの）国は吾子孫の王（うみのこのきみ）たるべき国なり。爾皇孫よろしくいましめみま、就（い）でまして治せ（しらせ）。行矣（さきくませ）。宝祚（あまのひつぎ）の隆（さか）えまさむこと、当に（まさに）天壤（あめつち）とともに窮り（きわまり）なかるべし。貴し、紀元二千六百年（注2）」（日本書紀 卷第二、神代下 第九段）これのあとに明治天皇御製が読まれることがあった。
3. 奉安殿はその後GHQ（マッカーサー司令部）の指令によって、昭和21年夏休み中に撤去され、現在は鎌倉宮に寄付されて、第二小学校の分とともに、^{みなかた}南方社、村上社という摂社になっている。南方は^{もりなが}護良親王の女官の名であり、親王幽閉中も仕えたという。（女官は護良親王の子種を宿していた 子供は後に妙法寺の第五代の主となった）村上は吉野での敗戦の時に親王の身代わりとして死んだ^{よしてる}武将村上義光の名前である。
4. 昭和16年、私は湘南中学（旧制）に入学、第1年の秋に発病、しばらく休学した。この年の12月に太平洋戦争が始まる。中学時代は終戦に近づくにつれ、学校には行けなくなって、勤労働員に駆り出されることになる。農村の人手不足を補うため、当初は日帰りで藤沢近郊の農村に出掛けた。麦刈り、田植え、稲刈りなどをした。つらかったのは、1月、2月といった寒い時期に相模原の農地で、農地改良

工事と称して暗渠、排水の工事をやらされたことである。その頃、そこのたんぼは牛が胴体までつかるといふようなひどいものであった。工場動員よりも緊急性があるということで、農村にまわされ20日くらいの泊まりこみとなった。このあと1年1ヶ月終戦までの間、藤沢の「東京螺子製作所」（ミネベア東京螺子製作所として現在も操業中、JR藤沢駅南東、新林公園の向かい側にある）に勤労働員となる。この間全く勉強から離れてしまった。中学5年のうち5分の1の期間勉強しなかったことは非常な打撃で、基礎学力をつける機会を失ってしまった。フライス盤と大型ターレット盤操作やシェイパー、普通旋盤の操作も覚えた。

工場の少年工に唆かされて、煙草と酒を覚える。同じ職場にいた現役で入営し士官まで勤めた工員が再度召集されたとき、戦地でのあからさまな話をして行った。「勝ちいくさの時は何でもないが、退却はおっかねえ！落ちたら（落伍）殺される」とか、文章に出来ない話も聞かされた。軍隊の残虐行為も知ることとなる。皇軍にはそんなことはない信じこんでいたので、たいへんなショックを受ける。湘南中学では、このクラスが一番早くだらしがなくなったとして、エリートを自負する学校として処分の措置を取らずに早く卒業させることにしたかったようである。一方相模原の海軍工廠へ行った連中は、「毒ガス製造とは聞かされないまま、イペリット・ガス（糜濫性ガス）の入った砲弾を裸で運搬し、皮膚に損傷を受けたので、監督官に抗議し、その仕事を免除してもらった。この時工廠の幹部に湘南の卒業生がいたので、助かった」と同期会の席上で当時の引率の教師が述懐した。東京螺子へ行った連中は従ってまだ平和な仕事だったわけである。

5. 工場内の様子

流れ作業システムの工場設計は次のようになっていた。

圧延工場ーインゴットより鋼材の圧延鋼材から鋼線引きだし。ここでは、他校の動員学徒が50から100メートルの工場の中を走ってくる真っ赤に焼けた鋼線の先端を鋏で切って、他のローラーに送り込む作業に従事していた。

- 螺子工場ー
- 1 ヘッダー自動機による鋼線から丸頭のボルト原形作成
 - 2 蹴飛ばしプレスでの六角頭の打ち出しーバリの削除
 - 3 ターレット旋盤でのダイスによる螺子切削ーボルトの完成
 - 4 蹴飛ばしプレスでの帯鋼からの六角ナットの打ち抜き
 - 5 ターレット旋盤でのバリ取りーねじ下穴明けータップによる螺子切削

1～5工程ごとに数列の工作機械が横に並び、工場の中央を縦に通路が通っている大量生産方式

中央通路を貫くトロッキの幹線線路、工程毎のトロッコ支線に向け設置されたターンテーブル

われわれは業界でも有数の工場の一つであるといわれて期待していたが、昭和19年7月動員時点で見えたものは、線路は土がつまり、ターンテーブルは赤さびており、工場内の資材・半製品の運搬用小型車両の線路はディーゼル車の燃料欠如により使用されておらず、代わりに牛車（2輪の大八車）が牽引、時折「モー、モー」と鳴き、臭い糞をたらしながらの運搬であった。

○切削ねじと転造ねじ

当時普通のボルト・ナットは上記1～5の工程でダイス・タップで切削して製造されていたが、欧州で発明された転造ボルトも製作されていた。これはボルトのねじ山の展開図を彫りこんだ金属製の2個の駒の間に切削用とは異なる太さの材料をはさんで、圧縮して製造するものである。切削ねじはダイスで切削するので切り子となる部分が出て無駄が多い。原材料の鋼線は分子の流れを切る所以強度が落ちる。転造ねじは切り子が出ないので無駄が出ない。ねじ山とねじ溝を圧縮して造るので分子の配列構造が変わり強度が増す。

○ハイスの欠乏

昭和19年ともなると、高速で使用出来る加工用鋼材のハイスを始め、あらゆる工具が足りなくなってきた。切削ねじを削る工具が欠乏し、切れなくなったダイスやタップを小型の回転砥石で削ることとなった。これでは切削したボルト・ナットが合うはずがなく、大きなパイスケ（竹製の小運搬用の大きな箆）に別々にボルト・ナットを山盛りにして女子挺身隊が1本1本合わせていた。奇跡的に合うこともあった。インチ・サイズではなくミリ・サイズでやっていた。陸軍と海軍とでもサイズが違っていた。空襲で打ち落とされたB29からねじを回収してアメリカのねじを研究していたが、同じものは出来なかった。（注3）

6. 海軍の子弟

昭和17年6月、ミッドウエー海戦で日本海軍が大敗北したあとしばらくして、クラスの何人かが先生に呼ばれて、父親が名誉の戦死をした旨告げられた。名誉なことなので泣いちゃいけないといわれ、何があったのだと尋ねるクラスのものに、何でもないと言っていたのが印象的であった。この地区は横須賀に近く、クラスには海軍の高級将校の子弟が多かったので、このような光景がよく見られた。われわれは艦船の名前は知っていたので、著名な軍艦がやられたことが直ぐに判り、暗い気持ちになっていた。

7. サイパンからの米軍の宣伝放送

鎌倉は地形の関係でラジオ電波の届きにくいところであるが、こんな中サイパンが陥落したあと、夕方7時になるとアメリカの電波が聞こえるようになった。10

10キロサイクルで「The Star Spangled Banner」のメロディが演奏され、続いて「This is the Voice of America Broadcasting on Saipan」というしゃべり出しであるが、このあとに続く日本語のニュースになると雑音で聞こえなくなる。日本側が妨害電波を出しているわけで、この妨害電波の「ガーガー」という音が近所に聞えるのを恐れてスイッチを切るのが常であった。現在でも、オリンピックで米国が金メダルを取ると国歌が演奏されると、当時のサイパン放送が思い出される。

8. 英語

英語といえば、私の友人の情報として、聖心女子大の昭和17年入学試験で、開戦の詔勅の英訳が求められたことがある。「天佑を保有し、万世一系の皇祖を踏める大日本帝国天皇は……」で始まる長文のものである。受験生側ではこれがヤマであったようで、受験雑誌にも模範解答がのり、皆事前に暗唱して行って合格したとのこと。寮でのシスターとの会話は当時でも英語であったようで、リトル・タオルをスモール・タオルと直された。戦後、学校再開後、英語の教師が学力低下を嘆いて生徒から「街で見掛けるアスアーミー（US ARMY）とは何か」と質問されたと報告したとのこと。

9. 戦争点描

戦局が危機的になるに従い、鎌倉を要塞化するということになり、山にはいたるところに壕が掘られ始めた。この時作業に従事していたのが、まだ年端も行かない予科練の生徒（旧制中学3～4年に相当する）たちで、やせこけた青白い体に粗末なペラペラのスフの作業服を着せられて働いていた。空を飛ぶ訓練ではなく、地下陣地の構築にかり出されていた。よほど給与が悪いらしく、民家に食事を強要にきた。私のうちにも来たが、母が「こちらも配給だけで他人には食べさせられない」と断ってもなかなか帰らずに困っていた。後で聞くと、海軍ではよそから物品特に食べ物を手にいれてくることを「^{ぎんはえ}銀蠅」と称していた。

陸海軍とも私的制裁が盛んであったが、海軍の新兵は海軍精神注入棒、バッターで尻を殴られるのは常識であった。演習地でやせた中年の水兵服が一行に並び、体格のよい下士官に、罰直のバッターを受けるのを見たが、一発で前にふっとんで倒れてしまった。中学の地理の先生が、陸軍の召集を受けて、しばらく後に解除となって最初の授業に出て、われわれが戦争の話しを求めると、開口一番「皆さんは軍隊の将校になるだろうが、私的制裁を何とかやめさせて下さい」と涙ながらに話していたことを今も鮮明に覚えている。

相模原台地で陣地構築に弁当持参で参加したことがあるが、関東ロームの地盤に素掘りの縦穴を掘り、底から横穴―真っ直ぐに立って歩ける高さ、二人が並んで歩ける幅の横穴―を掘り抜く。出口に「火炎ポケット」と称する奥行き2メートル程

度のへこみを作る。硫黄島の戦訓だそうである。掘った土は地元の女子奉仕団が縦穴から滑車で運び出す。われわれ作業員もモッコで縦穴に送りこまれた。監督は工兵の士官が一人で女性奉仕団とふざけあいながら仕事をしていた。この陣地が完成したかどうか、全く知らない。

私が印象として強く残っているのは、終戦後坂ノ下から^{りょうぜんさん}霊仙山へななめに上る斜面に口を開けた砲台の壕に掲げられた竹竿の先に白旗が侘しくぶら下がっていたことである。逗子の「猿のお山」には高射機関銃が据えられて知人がこれを操作していた。

10. 軍艦集結

8月27日、鎌倉の海岸の沖合にアメリカをはじめとする連合国の軍艦が集結した。(鎌倉市史・近代通史編) われわれはびっくりしてこれを眺めていた。飛行艇のような真っ白い小さな船(内火艇)がチョコチョコと艦と艦の間を駆けめぐって連絡をとりあっていた。その中に小型の上陸用舟艇に何人か乗って喚声を上げながら海岸に近寄って遊び回っていた。どういうわけかそのうちにカートン・ボックスのようなものを海に投棄し始めた。これが波打ち際に打ち寄せてくると、子供たちがこれを拾う。食糧品らしく、チョコレートであったり煙草であった。表面に英語が書いてあるが読めなかった。辞書でイート・ベリー・スローリーとわかって、ゆっくり食べよ、バカバカあわてて食べるとおなかをこわすよということかと苦笑した。

そのうちに鎌倉にも米兵が上陸してきた。英語の出来る奴がかたことの英語で得意そうに話している。パンパンは何処だといわれ、手振り身振りでこれがわかると、藤沢へ行けと教えていた。日本人はどうしてあのように昨日の敵にすぐ親密になれるのかと思う。すぐ頭を下げたフレンドリーになってしまう。

戦後、鎌倉の各所の地下壕の中などに兵器と思われるものが沢山残っていた。軍需物資のうち電気通信関係の物がニッコウホテル(かつてのレストラン大海老一現在マンションに立て替えられた)の前の砂浜に集結させられた。スピーカー、真空管、マイク、レシーバーなどがあつた。これらを東京の秋葉原へ持って行くと金になることがわかって、これを盗むことを企てた。衛兵が二人警備についていたが、昼間に顔見知りになり、夜になって、熱い紅茶などをもっていってご機嫌を取る。焚き火の世話をし、燃料の木箱をとってくる名目で、懐中電灯を借りて集積物の山に入り盗んだものを警戒線の外の暗闇に出す。木箱だけを一旦衛兵のところへ運び、しばらくして帰宅するふりをして砂浜を大回りして匍匐前進で目的物をつかばらい、山分けして秋葉原へ持っていったりした。

(注1) 奉安殿は天皇・皇后両陛下のご真影を奉納してある小さな建物で、終戦ま

で全国の小学校の校庭の片隅に建てられていた。祝祭日、記念日などの式典に際し、校長が礼服に威儀を正して、奉安殿に歩みより、扉を開けカーテンを開いてご真影を拝めるようにする。生徒はこの校長の動作が終わるまで、頭を下げた敬意を表した。戦前の皇国史観の現れということで、敗戦後米軍の占領政策によって取り壊しとなった。鎌倉の近辺では、城廻しろめぐりの清泉女学院の高台の西裾の稲荷社に殆ど原形のまま転用されているのが見える。鎌倉宮へ寄付されたものは奉安殿の中身だけで、外の建物は片付けられた。

(注2) 紀元2600年は昭和15年に当たる。太平洋戦争勃発の前の年である。

(注3) 米国のねじと日本のねじとの相違を八木さんに当時の説明を思いだしてもらった。

当時の米国のねじは鋼線からボルトの頭を成型する時に、一度に六角の頭が成型されていたことである。これは

- 1 円を六角に打ち抜く
- 2 バリの削り取り この2工程を省略することが出来る
- 3 1本ごとの分量は少ないが、全体では大きな差となる切削屑の削減になる。

当時の東京螺子製作所では、敗戦までこの技術は出来なかった。またドライバーを締め付け工具に使うねじでも、溝を一度に成型し、日本のように半ば手作業で溝を刻むことはないといわれていた。

戦争の傷跡をたずねて……材木座から小坪へ

平成14年4月18日

語り手・案内人 小森武三郎さん

「小森さんの略歴」

昭和6年生まれ、同16年に鎌倉に移住。鎌倉第一国民学校（現鎌倉市立第一小学校）4学年に編入学。当初材木座に住み、現在十二所に居住。昭和25年湘南高校卒業。同29年東京教育大学（現筑波大学）卒業。以後退職まで38年間県立高等学校に教員として勤務。

小森氏を含めて総勢10名、下馬四ツ角に集合。同氏の案内で材木座、小坪方面を歩く。

1. 鎌倉第一国民学校及び湘南中学（現湘南高校）での思い出

4学年に編入学したが、同国民学校に対する最初の気持ちは暗い印象であった。3年生までが男女共学で、4年生からは男性ばかりの教室であった。

校門を入れて右手側に奉安殿（天皇・皇后のお写真を安置した小建造物）があり、校舎には「武勇」などといった戦時中らしい名前がつけられていた。

昭和19年に中学に入学したが、勉強した覚えはあまりない。学校へ行くとすれば、軍隊の学校に行く生徒の壮行会に行くぐらいであった。

2. 海軍村の跡をたずねて

鎌倉は軍港横須賀に近いせいもあって、海軍軍人家族が集団的に居住する、いわゆる海軍村があちこちに存在したようであるが、ハリス幼稚園とやまかストアの裏、江ノ電の線路に囲まれた三角形の地点の辺りに海軍の若手軍人の住宅地帯があった。終戦でそれらの人たちは帰郷してしまった。ちなみに京急交通（株）観光案内所脇の、かつては海軍軍人世帯が多く住んでいたといわれる路地を奥まで辿ってみたが、今はかつての面影はなく、静かな市民生活が営まれる家並が見られるだけであった。

3. 一の鳥居から九品寺前信号まで

海岸に通じる若宮大路は両側に松の大木が林立し昼なお薄暗い、今では想像できない道であったとの説明を聞きながら、舗装された明るい十字路を左に折れ海岸橋を渡って、元海底電線中継所（現ゆかり荘）に立ち寄り、ひっそりと隠れるように建つ中継所記念碑を見学後、九品寺前信号へ直行する。

4. 材木座本通の戦時下の傷痕を追って

水道路を直角に横切り、材木座海岸の方向に通じる道を、沿道の方は「材木座本

通」と称しているが、この道を境にして東側の地域は疎開地域と指定され、家宅が強制的に取り壊されることになった。目的は空き地をつくることにあった。軍隊の使用のためか、万一の場合の避難のためか、我々には分からない。

5. 終戦直後の異常体験

昭和20年8月17日ごろ、戦時下の規制が消えて生活に平和が戻ったので、早速海岸に出て海水浴に行った。その時、派手なパラソルを目掛けて米軍機による機銃掃射があった。

6. 天照山鍛錬所の跡地を訪ねて

光明寺境内を通り裏山に出る。終戦前、軍刀を製作していた天照山鍛錬所は、今は建物もなく、その存在の跡を示す入口の石積みの門柱に、黒々と書かれた「天照山鍛錬所」の表札が、その存在を物語っていた。門柱を通り、さらに奥へと歩を進めると東京都北区鎌倉学園の校門前が出るが、道路を隔てたツツジを植えた土手には、かつて鍛錬所の屋根を飾った大きな兜を形どった鬼瓦が幾つか、折しも満開のツツジの中に鍛錬所の存在の確かな証として、異様な光景を作り出していた。

7. 海岸砲2門の設置跡を求めて小坪へ

天照山鍛錬所をあとにして、簡易トンネルを抜け、山の崖や山裾に掘られた陣地跡を再確認しつつ、逗子マリーナに出る。そこは戦後埋め立てられて宅地造成されたもので、近代的な建物が建ち並んでいるが、かつては海面から4～5メートルの高さに山裾を取り巻く生活通路があり、その崖下は海が広がっていた。小坪へと通じるその通路とほぼ同じ平面上に、数メートルの間隔をおいて大きな穴が二つ口をあけ、2門の海岸砲が据え付けられていた。この穴は奥が深く、縦横に掘られて向こう側に突き抜けていた。小坪港に近い海前寺住職の奥さんの話によれば、大砲のまわりで遊んでいた子供達がいたずらをしている最中に、信管が暴発して犠牲者が出る騒ぎがあったとのこと。2門の海岸砲の設置場所は、二つの穴が草の生い茂った土ですっかり覆われ、その穴のあった跡さえ確定出来ず、推定するにとどまるのみであった。材木座から小坪に至る戦跡調査は、これで終了した。

[付記] 平成15年6月21日に行われた小坪の2門の砲台についての高橋二郎さんとの面談および砲台跡の再調査、並びにその後の文献調査によって、2門の砲台は、いずれも15センチカノン砲であることが判明した。

次項「小坪の二門の砲台と戦後の小坪について」（高橋二郎さん談）を参照されると共に、『逗子市史通史編』826ページをも参照されたい。

写真（A）

今は無き天照山鍛錬所の屋根を飾った鬼瓦

光明寺の裏山、東京都北区鎌倉学園校門前のツツジの植え込みの中、おりしも満開のツツジを背景に、置かれた鬼瓦。6項目を参照のこと。



写真（B）

光明寺の裏山から小坪方面に下る坂道の山裾に、今も残る陣地構築跡。

この陣地跡の近く、崖の中腹に銃眼があるが、新緑の木々に覆われて、撮影できなかった。

7項目を参照のこと。



写真（C）

海前寺の奥様から、小坪砲台や暴発事故などを聞く会員一同

海前寺は、小坪港に近い時宗の由緒ある寺で、その名の通り逗子マリーナ建設前までは、寺の前は海だった。

7項目を参照のこと。



小坪の二門の砲台と戦後の小坪について

平成15年7月16日

語り手 高橋 二郎さん

高橋さんの略歴

昭和3年に生まれ、当年75歳。江戸時代後期文政年間から続く「西鶴」という屋号を持つ旧家に生まれる。昭和18年、15歳で三重県の海軍予科練に入隊。長野県野辺山で、B29邀撃（ようげき）用特別攻撃機「秋水」に乗るためのグライダー訓練中に終戦を迎え、海軍航空下士官として除隊。帰郷後は、逗子マリーナ建設反対運動に参加、付近住民らと協力して、建築業者に代償として子供用プールや公園を建設させるなど、小坪住民の利益のために尽力する。逗子市の消防団員として活動、平成14年に「勳六等」の叙勲の榮に浴する。小坪5丁目、海前寺近くに居住。

平成15年6月21日、中央図書館近代史資料室長平田さん、CPC会長曾根、並びに酒井の3人で、海前寺住職（物故）の奥様の紹介で、高橋二郎さん宅を訪ね客間において、二門の砲台設置位置の確定を含めて、終戦後の小坪における興味深い体験談を拝聴する機会を得た。

1. 小坪の砲台陣地の構築と砲の試射について

表題の件については、入隊中の高橋さんはご存知ないが、当会が別途坂倉孝一氏さんらの旧海軍軍人から得た情報によれば、海軍の計画した由比ヶ浜防衛6ヶ所の一つとして海軍によって裏山から掘り進まれ、砲口が2ヶ所海岸の崖に出るように構築された。崖に鉢巻き状の「親不知」と呼ばれる生活道路があり、穴はその道路の1メートルくらい上に出ていた。砲口を仰角にもってゆくため、穴の裏口が高い地形であることから、一旦井戸掘りの要領で坑道を掘り下げたあとで、掘り上げていったという。余談になるが、砲口は2ヶ所に並んであり、高橋さんとの面談とその後の文献調査によって、二門の砲はいずれも15センチカノン砲であることが判明した。

高橋さんが語る実父の話によると、終戦前に砲の試射が行われ、試射に前もって、近所の人に爆風が及ぶので、座敷の欄間に飾ってあるご真影を片付けるよう指示があり、発射の際には家はグワアーンと激しく振動したとのことである。

2. 砲台及び砲台跡について

生活道路に沿って切り立った崖の麓に15センチカノン砲二門がそれぞれ入り口の周囲及び内部をコンクリートで固められた大きな穴の中に据え付けられ、一門は江の島方向に砲身を向け、二門で相模湾一帯を防衛範囲とし、上陸する敵軍に対する防衛を意図したようである。二門の砲台の陣地のほぼ中間に、崖の上に一帯が眺

望出来る監視孔のある指令室が設けられていた。もちろん、二つの砲台の穴と指令室とは内部で相互に結ばれていた。

逗子マリーナ建設前の地形で二門の砲台の位置関係を説明すると、一門は「でんやくじま」と住民たちが呼称していた海岸への突出部の、崖に向かって右手側に、もう一門は「馬捨て場」と呼称された突出部（昔そこから崖下の海へ廃馬を投げ捨てた慣習に由来する）の左側の山裾に、砲身を江の島方面に向けて据え付けられていた。高橋さん提供の地図（P160）を参照されたい。

現在の地形で説明すれば、逗子マリーナ6号棟カナリエス館の前、道路を隔て石垣の上の鉄柵（現在は使用されていない石段がある。暴発事故の犠牲者をまつた地蔵尊をお参りする遺族用に作られたものという）の内側に突出するように存する、今は草や灌木で覆われた崖状の山裾に、一門の陣地があり、山に向かって左手方向の山の中腹に指令室が、更に間隔を置いて小坪海岸トンネル寄りに、もう一門の陣地があった。丁度調査にあたったこの日が6月でもあり、夏草に覆われ、同時に地形の変化とが加わって、確定には困難が伴った（砲台陣地の位置確定には、高橋さんのお力添えによるところ大であった）。

3. 指令室の内部にあったものは？

終戦後に、高橋さんは砲台陣地内の横穴を探検したい衝動に駆られて、坑道を辿って指令室まで行ったことがあったが、内部には数丁の小銃と何発かの小銃弾とが見出され、その折に実弾を小銃に込めて、発砲したい衝動に駆られたという。如何なる方法で指令室からの指令を二門の砲台に伝達したのかについての質問に対して、指令室探査の時点では、指令伝達の方法を解明する物的証拠は、何も存在しなかったとの回答であった。

4. 砲の処分と陣地内の砲弾の処分について

終戦後米軍によって、二門の砲身は、いずれもガス溶断によって三つに分割され、先端部分は爆破された。その際破片の一部が高橋家の屋根に飛んできて、草葎きであったのでバウンドして海中に落ちたが、「すみませんね」で済まされ、弁償はなく、散らばった木片を薪用にもらって埋め合わせたという。

陣地内には多数の砲弾が貯蔵されていたが、終戦後米軍の監視下のもとに、信管を抜いて構外に運び出され、飯島からトラックで搬送され、船で運んで相模湾に投げ捨てられた。

5. 掘削工事と鎌倉時代の古道の発見

正覚寺への石段の登り口から数メートル先に入り口があった、飯島から小坪に通じる生活道路（大正時代に小坪住民の協力によって造られた）に切り立って続く山々

を、昭和63年に某建設業者が掘削作業を行ったが、その際に砲台の穴は土囊で塞がれ、それまでは穴は入り口が塞がれないままで長らく放置され、漁民に漁具などの物置き場代わりに利用されていた。その工事の際、五輪の塔や頭骨などの人骨が発掘され、同時に道路の路面から5メートル上に鎌倉時代の建設と推定される、海前寺の裏山へと通じる通路跡が発見された。なお、掘削工事が行われる動機となったのは、逗子マリーナ6号棟カナリエス館前の山の崩落にあったという。

6. 帰郷時の体験

復員の際に、自宅と小坪との無事を気にしながら、小坪に通じる生活道路の入り口に辿りつくと、白旗が立てられ、二名の日本兵に出会い挙手の礼を受け、生活道路の通行を制止される。止むを得ず正覚寺の奥にある住吉城址に建つ住吉神社わきの古くからある手掘りのトンネルを通り、山上（呼称「上の山」）に出る。小坪と草葺き屋根の自宅とが無事なのを自分の目で確認して、胸を撫で下ろす。

余談であるが、当時はまだ逗子マリーナなど存在せず、高橋家の前はすぐ海であった。生活道路の崖下の海も、逗子マリーナ建設のための埋め立て工事が昭和42年7月ごろに始まり、昭和45年12月ごろに完成して、無くなってしまった。

昭和20年8月28日ごろに小坪の自宅に戻ったが、たまたまその日ごろから示威のため連合軍の艦隊が、相模湾を埋め尽くしていたのを目撃している。

7. 終戦後の小坪海岸沖の様子

おびただしい数の艦隊が、相模湾沖に集結としているのを目撃、夜間には艦隊に煌煌と明かりがとまり、沖合いに美しい光景が出現した。小坪海岸沖には、米軍の哨戒艇が常時警戒にあたるとともに、一方、空には水上飛行機が飛び回り、沖合いで離着水する光景も見うけられた。

8. 砲台陣地内での暴発事故について

子供たちのいたずらに端を発して、多分、信管が外されないままのものがあつたのであろう、信管が暴発して、死者14名にも上る犠牲者を出すという大惨事が、昭和20年10月20日午後に発生。死亡された14名は、いずれも小学2年生から6年生ぐらいの年端もゆかない子供たちであつた。最後の一人などは、目が潰れて見えなくなり、夕方穴から這い出て来て崖から海に落ちて溺れるという、痛ましい話も伝えられている。

犠牲者14名の霊を祀る石造りの地藏尊は、もとは暴発事故現場近くにあつたが、現在は離れた場所に安置され、遺族によって維持・管理されているようである。

9. 小坪海岸漂着物の巻き起こした一騒動

相模湾沖に集結した艦隊から捨てられたと思われる物資が、小坪海岸に流れ着くことがしばしばあったが、ある時、DDTと書かれた茶筒状の得体の知れない物が浜辺に打ち上げられているのを発見し、航空兵であった高橋さんは、職業上の英語の知識は多少持ち合わせていたが、DDTなるものの知識は一般人にはまだ無かった当時、爆発物かと即断して警察に届けたところ、調査の結果、殺虫剤を入れた物と判明し、やっと安心したという。

10. 米軍の哨戒艇に臨検され、米兵から「ラッキーストライク」をもらう

終戦後、小坪一帯も落ち着きを取り戻し、漁師も舟で漁に出ることが多くなった。漁業を生業としていた高橋さんも、他の漁師たちと共にタコを捕りに沖に舟を出し、漁業中に運悪く警戒中の米軍の哨戒艇に捕まり、臨検を受ける羽目になってしまった。

ほかの漁師たちは、てっきり高橋さんが米兵に逮捕されたものと判断して、急いで舟を小坪海岸へ引き返して行った。一方高橋さんは、捕らえたばかりのタコを米兵に差し出すと、タコ・イカなどの軟体動物を食べる習慣のない彼らから、にべもなく「ノー」との返事。次には何をされるかと不安気な高橋さんの手に渡された物は、意外にも巻きタバコの「ラッキーストライク」であった。

11. 墓誌に刻む一特攻隊員の心境

高橋さんは終戦直前、長野県野辺山で当時開発されたばかりの、B29 爆撃機「秋水」に乗るためにグライダーの訓練中であり、試乗の上官が事故死されたのを目の前にされ、死の危険が付きまとう訓練と、何時実戦配属の命令が下るとも知れぬ、常に死と向き会った軍隊生活を過ごしてきたが、終戦にともない帰郷後、「大空に散るを覚悟と思ひしに花と咲かずに終わる口惜しさ」の短歌を小坪寺(しょうへいじ)の住職に相談して、先祖の墓園の墓誌に「桜花特別攻撃隊員高橋二飛曹 17歳」の文句とともに刻み入れたという。その折住職から、17歳から第二の人生を歩む区切りにされてはと、アドバイスをされたという。

【付記】

次頁に添付した地図は、逗子マリーナ造成のための海の埋め立て以前、飯島から小坪に通じる生活通路の山裾に構築された2門の砲台陣地及び指令室の位置を示す貴重な資料である。(高橋二郎さん作成・提供) 詳しくは、2項目を参照のこと。

地図添付

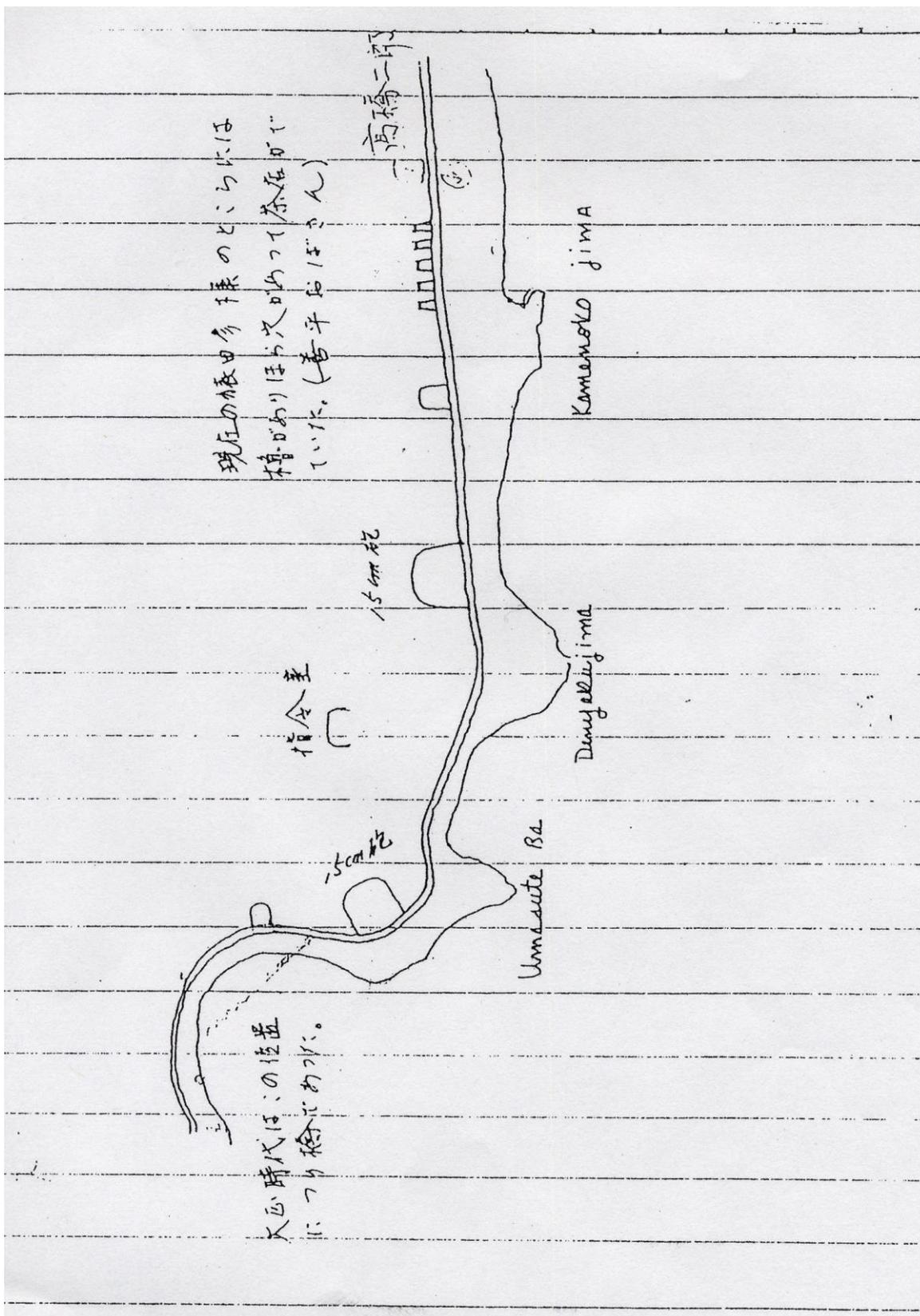


写真 (A)

親不知と呼ばれた生活道路の 飯島側入口の現在の様子

正覚寺への石段の登り口から
7～8メートル先に、飯島か
ら小坪に通じる生活道路があ
ったが、逗子マリーナ造成に
伴う海岸の埋め立て工事に
より、現在は跡形も無くなっ
てしまった。

1・5項目を参照のこと。



写真 (B)

小坪の海前寺近く、かつての生 活道路の跡を今にとどめる庚申 塔群とCPC会員一同

この生活道路に、戦時中2門
の砲台が山裾に構築されてい
た。

砲台の詳細は1・2・3項目
を参照のこと。



写真 (C)

2門の砲台に指令をしていた指 令室跡 (写真の山腹のほぼ中央 部)

CPC部員が幾度か調査した
が砲台の跡すら判らず、高橋
さんの協力で、砲台跡と指令
室跡とが、確定できた。

2・3項目を参照のこと



写真 (D)

2門の砲台のうち飯島よりの砲台跡を指し示す、高橋さんと曾根さん

逗子マリーナ建設により、付近一帯の地形は、様変わりし、砲台位置確定には高橋さんの協力によるところ大であった。



写真 (E)

住吉城跡に建つ住吉神社前の高橋二郎さん

元海軍特攻隊員で、終戦後は小坪のために力を尽くす。

2門の小坪砲台跡の確定に当たり、CPCのために惜しみなく協力してくれた。

同氏略歴の項を参照のこと



写真 (F)

飯島付近から逗子マリーナ6号棟カナリエス館手前あたりの現況

かつては潮が引くと、玉石がごろごろと転がっていた海であったが、その様変わりは、著しいものがある。

当然のことで、生活道路も無くなってしまった。

6項目を参照のこと。



写真（G）

住吉神社脇の古くからある手掘りのトンネル

住吉神社は、小坪の正覚寺境内の右手奥にあり、高橋さんが復員時に利用したトンネル。6項目を参照のこと。



写真（H）

砲台陣地内での暴発事故犠牲者を慰霊する石造りの地藏菩薩

小坪海岸トンネルの小坪側出口の屋上隅に安置されている。8項目を参照のこと。



写真（I）

100歳・90歳の御婦人、戦前・戦後の鎌倉海軍村を語る

平成14年5月16日

語り手 坂 文子さん

佐々木 淑子さん

5月15日、鎌倉市中央図書館において、現在100歳と90歳になられる御婦人にお会いし、主に戦前・戦後の鎌倉の海軍村についてお話を聞く機会を得た。

坂さんは明治35年生まれで当年100歳、佐々木さんは明治45年の生まれで90歳、両者ともに^{かくしやく}夙業とされ、今なお遺族会や母子寡婦連絡協議会などにかかわって活躍されている。

ご兩人ともにご主人が海軍将校で、今時の大戦でいずれも戦死された。特に坂さんは、岳父の購入された鎌倉^{にしみかど}西御門の家に大正末期から住まれて、当時の海軍将校やその家族ともお付き合いがあった。坂さんのご主人坂匡身氏は、海兵（海軍兵学校）42期生で、殆ど海上で過ごされたという軍歴の持ち主で、各種軍艦の艦長を勤められた後、昭和19年のフィリピン・レイテ沖海戦で戦艦^{ふそう}「扶桑」の艦長として、艦と運命を共にされた。1ヶ月後に簡単な戦死の通知が入り詳細は機密とされて知らされなかったが、戦後アメリカ側の報告書に詳細な記録が記されており、ご主人の戦死の様もそれによって承知したとのこと。

当時の鎌倉は、特に横須賀に勤務する海軍軍人のベッドタウンで、特に大町の中道などは海軍村といわれ、海軍将校の居住する家が多数存在した。ある海軍中尉は逗子に居を構えたが、その理由は、鎌倉だと朝から敬礼のしどろしどろであったからだという話である。それほどに海軍軍人が多かったわけである。その鎌倉でさえ、空襲などの被害を免れるため、さらに地方の田舎に疎開する軍人家族がいたという。

海軍軍人の家族の間では、当然のことながら主人の階級に応じた付き合いがあったようである。北鎌倉にお住まいの南雲^{なぐも}さん（サイパン島で玉砕）の子息と坂さんの長男とが親しく、よく坂さん宅に遊びに来ていたが、夕食時間になっても帰らないので帰宅を促すと、「我が家は子供が多いので一人くらい欠けてもどうちゅうことはありません」と言っていたといわれる。

終戦真近になると負け戦を反映して、親子とも海上で戦死という痛ましい悲劇に遭遇した家族もあらわれた。

佐々木さんのご主人は海兵48期生で、終戦時にフィリピンの陸上勤務で戦死された。東京で空襲にあい家宅を焼失されて、鎌倉に移住された。

(注) 扶桑 日本海軍が最初に造った超弩級戦艦で、1914年(大正3年)竣工。艦形・兵装ともに当時は世界最大最強の戦艦で、36センチ砲12門搭載、排水量34,700トン(第二次改装後)、ただ速力が25ノットで空母などの高速艦隊と一緒に行動できず、十分な威力を発揮することは出来なかった。そのため海軍兵学校の練習艦

として使われていたが、昭和19年10月25日、レイテ沖海戦に参加。スリガオ海峡突破を図った際、待ち伏せするアメリカ戦艦の砲撃により最期を遂げた。

写真（A）

高齢を感じさせない老婦人達

戦時中の鎌倉の海軍村を語る
100歳の坂さん(右)と90
歳の佐々木さん。
鎌倉中央図書館近代史資料室
で撮影。



写真（B）

CPCの調査資料を説明する曾根さんと老婦人達

感慨深げに曾根さんの説明に
耳を傾ける兩人。
鎌倉中央図書館近代史資料室
で撮影。



写真（C）

鎌倉の海軍村の1つとされた中道付近

戦時中、海軍軍人家族が多く
居住していた大町の逆川に平
行して、JR線路側に一本よ
った路地。戦局悪化に伴い、
親子とも戦死という悲劇も
聞かれた。



鎌倉で陣地構築に従事した兵隊さん

平成13年12月5日

語り手 仲 清さん

大正10年(1921)生

仲さんは、ご自身の戦争中の出来事を、記録に留めようとエッセイを執筆されていたが、自分の軍隊時代の編成のことで疑問が生じ、鎌倉市中央図書館に問い合わせをされたことから、我々にご縁ができることになった。

この記録は、平成13年12月5日に、東京都東村山市にお住まいの仲清さんを訪問した鎌倉市中央図書館近代史資料室の平田恵美氏、CPCの曾根一郎他2名が、当時の鎌倉の様子を伺ってきたものである。

「仲さんの経歴」

仲さんは、大正10年生まれの80歳で東村山市で出生し、家業を手伝う。昭和16年(1941)20歳となって兵隊検査を受けた。その後、なかなか召集の通知がこなかったが、終戦の年の昭和20年(1945)4月にやっと召集通知がきて、東京麻布の連隊に入隊した。

1週間後に連れて行かれたところが、鎌倉腰越^{こしごえ}であった。これから話をするのは、鎌倉に配属して終戦になるまでの体験談である。

なお、仲さんは、現在も東村山市で元気に悠々自適の生活を送っておられる。

1. 入隊

昭和20年4月に東京麻布の連隊に入隊して、1週間後に鎌倉の腰越に配属された。直接の上官は小隊長で、竜口寺^{りゅうこうじ}の裏にある法源寺に滞在しており、腰越国民学校に中隊本部が、また腰越出張所に指揮班があった。出張所のとなりに15坪ばかりの公会堂があり、私は、そこで寝泊りしていた。内山慶次郎少尉の当番小隊長付に配属されたので、私は3ヶ所を行き来することとなった。

2. 軍の編成

当時の軍隊の編成は、最高司令部を赤柴中将が統括され、その下に140師団があつて師団長は物部^{ものべ}少将、これを護東22053部隊といった。歩兵連隊が401から404まであり、私は、歩兵401連隊、連隊本部は深沢国民学校にあり、連隊長は平沢大佐であった。5月2日に軍旗拝受を受けたと聞いている。因みに402連隊は甲府にあり、また403、404連隊は藤沢にあった。外部や家族との連絡名称は「護東53部隊、中川部隊、中村隊」と呼称した。歩兵401連隊など部隊名は外部に伏せられていた。本隊が国民学校に駐屯しても、中隊の任務は未だ決まっていなかった。いずれ何処かで陣地構築作業が始まるに違いなかったが、命令

のあるまでは、校庭で基本教練を受けることになった。中隊は過去の軍隊経験者と未経験の補充兵だけで、現役兵はいなかった。年令も25歳から37歳くらいで職業も多岐に亘って、精兵というには程遠い構成であった。したがって、軍隊にはつきものの、鉄拳制裁などは見かけず、私自身も殴られたことは数回に過ぎなかった。つまり銃剣を振りかざして突撃する血気盛んな若い兵士は、歩兵砲中隊には不要だった。未経験の兵士は上等兵から「気をつけ・休め・敬礼・単独行進」などの基本動作の速成教育を受けた。中隊の総員は120名くらい、小隊は4ヶ分隊から成り、分隊長の兵長以下、上等兵（一等兵）1名、二等兵6～7名の10名前後で、個人持ちの兵器はなく、中隊事務室（指揮班）に帯剣が10丁ばかりしかなかった。これは公用外出の際に着帯するだけで、小銃はなく、肝心の速射砲は、8月になってやっと一門が到着しただけだった。

3. 陣地構築

しばらくたって陣地構築の命令が下達された。陣地構築といっても洞窟陣地作りの作業で、分隊ごとに腰越の奥、山の地形の入り組んだ場所に、海岸方向の道路に貫通口ができるように、後ろ側（裏側）から掘り進む掘削作業であった。私は、小隊長のお供で33号陣地と呼ばれる壕の現場にしばしば足を運んだ。穴はそれぞれ番号が付けられており、海岸から内陸へ向けて大きな番号になっていた。三桁の番号もあった。その後、私は内山小隊第一分隊の分遣先である賀島部隊、綾田隊に派遣された。私を迎えにきた分隊長と一緒に腰越の中隊事務所を出て、江ノ電で鎌倉、大船と乗り継ぎ、綾田隊の陣地に出頭した。綾田中尉は茅葺きの粗末な小屋の椅子に座っていたが、作業がはかばかしく進んでいないのを悩んでいたようであった。宿舎は貞宗寺（玉縄城址^{ていそうじ}の南麓）であった。貞宗寺はちょっとした丘陵を背にした小高いところにあり、今までいた部隊が立ち退いて間もなく、当分隊の引継ぎ者がいるだけであった。分隊長は門間兵長、以下室町上等兵、山下一等兵がいて、あとは7人の二等兵がいた。二等兵は全員未教育で最高年令は37歳であった。この中に川島二等兵がいたが、彼は偶然東村山の同じ町の者であった。この10人を二組に分け、12時間交替で洞窟陣地掘りの作業に当たることと成った。陣地の場所は貞宗寺から往来（現小袋谷―藤沢線）に出て、藤沢方面に緩い坂を上がり、道が平坦になったあたりで、道の両側は崖になっていた。穴は左側の崖に入りしばらく藪を分けて入った少し高い場所に、洞窟陣地の入口があった。掘削はかなり進んでいて、掘り出した土が洞窟の入口の前に山積みになっていた。洞窟の中は電線が引かれ、裸電球がぶら下がっていた。穴は2メートル程の高さに馬蹄形に掘り進められ、貫通口は、崖に出るようになっていた。穴掘りの道具はツルハシだけで、先端が磨り減るとフイゴを据えた兵隊の鍛冶屋に持っていきトンテンカンと打ち直してもらうのである。何とものどかな風景で、こんな調子でアメリカに勝てるのかなと思っ

た。電球の手持ちは軍隊にはなく、外から一個持ってくると外出許可のご褒美があった。洞窟掘りは7月下旬頃道路側に貫通した。陣地の番号は三桁だったように思う。綾田隊は若い現役兵中心の小銃中隊のようで、全員が九九式短小銃を装備していた。しかし、小銃の精度はかなり落ちていたように見えた。貞宗寺にはこれらの若い兵士が宿泊していたが、どこかへ任務に出かけている時もあるとあって、わりと気軽な生活であった。6月中旬に分隊長より私が幹部候補生に合格した旨伝えられた。7月上旬頃任命式が玉縄国民学校で行われ、40～50名の整列している前で、上等兵に任命された。7月下旬は作業がなく、8月1日藤沢・遊行寺に移動するまで、約一週間貞宗寺で骨休み休暇となった。遊行寺では毎朝点呼が行われ、体操のあと屈強の兵士による切込みの模範演技が実施されていた。

私の分隊は数日後、新しい陣地構築のため遊行寺から南に道路を渡り、現在の^{だいぎり}大砲と呼ばれるあたりの斜面に縄張りをして、ツルハシでの打ち込みを始めたところ、掘削中止の命令を受けて、腰越の本隊に復帰した。この頃わが国の本土防衛を強化するためか、武器、弾薬不足の折から戦備状況を準戦争状態（乙戦備）から戦争状態の甲戦備に引き上げ戦闘準備に狂奔するようになった。このため足手まといとなりそうな兵隊は帰郷させられた。わたしの分隊では妻川二等兵が昔の盲腸手術の予後が悪かったとかで兵役免除となり、嬉しさをこらえて除隊していった。中村隊では他に2、3名が召集解除となった。この頃になってやっと歩兵砲中隊の主戦兵器である37ミリ速射砲が一門だけ支給となり、公会堂の庭先に据えられた。元来は車輪付なのだろうが、木枠の中にぶら下がっていて奇妙な形であった。この大砲は敵の戦車を撃つために開発されたが、既に時代遅れの代物で、大型のアメリカM4戦車には歯が立たず、正面から撃っても弾が跳ね返ってしまうお粗末なもので、専ら上陸用舟艇か人員の狙撃が目標であった。しかし、それも一発撃てば数十倍のお返しを呼び込むおそれがあり、沈黙を強いられる実情であった。従って攻撃方法の主体は、爆薬を抱えて戦車に体当たりする肉弾攻撃に頼るほかになく、公会堂前や校庭の広場にベニヤ板を戦車の大きさに切り抜いて立て、これに向って爆薬に見立てた砂袋などを抱えてぶつかる訓練が繰り返し行われていた。8月になると、海岸に近い洞窟陣地の掘削と整備は終了したようで、訓練と雑用ばかりとなった。

4. 広島原爆投下

理由は忘れたが、このころ私は腰越の石田電気店に出入するようになっていて、8月6日、店に配達されたタブロイド版のたった1ページの新聞から、広島に新型爆弾が投下され、多数の死傷者が出たことを知る。人体に被害を少なくするには、白い着衣が効果的であることなどが書かれていた。押されっぱなしの戦況では、又かという程度の感想しか持たなかった。

5. 終戦

8月15日は晴天であった。中隊事務所のラジオは朝から繰り返し、正午に天皇陛下の重大放送があることを告げていた。しかし兵士はいたってのんびりしていた。ソビエトが8月9日に参戦したので、天皇陛下が、もっとしっかりやるように放送するのだろうと想像する程度であった。それというのも鎌倉の町中は爆弾も機銃掃射もなく、兵隊は恐怖感も緊張感もなくのんびりしていたからである。午前中のラジオを気にしつつも、兵隊は気楽な気持ちで、前日同様小動こゆるぎあたりの斜面のきつい山に、杉丸太の伐採に出かけた。山に入るとアメリカ軍の飛行機が、日本の対空レーダー攪乱のためにばら撒いた大量の錫箔が、あっちこっちの木の枝に引っかかっていた。材木は切り出して麓まで引き下ろし、道端に積み上げた。虫が知らせたのか、私は少しはなれた農家の庭先に入っていったところ、「日本は負けたよ」との声を聞いた。雑音ながら今、天皇陛下が放送したというのである。大声でまだ山にいる仲間にも知らせた。それでも道路に切り出した丸太を整理して中隊本部に戻った。さすが、年配者の多い集団で、特に狼狽している様子もなく、複雑ながら、静かな受け取り方をしていた。私も「これで召集解除になる」との思いが浮かび急に嬉しくなった。

6. 終戦後の整理

日ならずして竜口寺に移動して、裏山の洞窟から砲弾を運び出し、アメリカ軍に引き渡す準備をした。奥のほうから手渡しで運び出して外に並べ整頓したところ、意外と大量であった。弾の多くは迫撃砲弾で、それも昭和15～16年製が目についた。江の島への栈橋を渡ったところの右側、岩本楼の手前に野砲が転がっていた。どうしてこんなところにと奇妙に感じた。竜口寺からの弾運びを2、3日した後、元の中隊本部に戻り、解散したが、解散式はなかったように思う。ただマッカーサー連合軍総司令官到着警備の兵隊を派遣することになり、年の若い幹部候補生ということで、私が一番に指名されてしまった。派遣される一個小隊の隊長には小澤少尉が任命され、藤沢の日本精工の工場に移動した後、厚木に移った。私は栄養失調からか足がむくみ、この小隊から離れることになり、残留組に合流して自動車であま石田の小学校に着いた。ここが最後の解散場所となり、持ちきれない程の軍放出の物資を担いでふるさと東村山に帰着した。時に9月9日の昼頃であった。

仲清氏の陣地構築の跡を探訪

平成14年6月3日

案内人 仲 清さん

戦時中腰越、玉縄地区で陣地構築に従事した元上等兵仲清さんを鎌倉に迎えて、当時の記憶のまま、陣地構築の跡を尋ねた。

1. 江の島

「終戦後、江の島の栈橋を渡ったところに右側、岩本楼の手前に野砲が転がっていた」という場所を確認した。仲さんは栈橋を渡ったところにある青銅の鳥居を感慨深げに見ていた。というのも終戦後の8月17日か18日にこの鳥居の右前に野砲が一門転がっていたからである。

2. 竜口寺裏山にあった武器の穴倉の入口

「竜口寺の裏山の洞窟から砲弾を運び出し、アメリカ軍に引き渡す準備をした。奥の方から手渡しで運び出して外に並べた整頓したところ、以外に大量にあった」という場所を確認すべく竜口寺を訪ねる。

この時は、当時と比較してあまりに状況が変化しているために、裏山の洞窟の入口を探すことができずに終わった。

平成14年11月23日、竜口寺を訪問して今吉海秀氏（湯河原の最上寺の住職）に案内してもらう。竜口寺にある穴は三箇所あり、武器・弾薬が貯蔵されている大きな穴は本堂の左後ろにあり、穴の開口部は見られないが、土砂が積まれて盛土の状態になっている。終戦当時は、この土が本堂の回廊までかかっていたので、回廊の欄干が土の下になっていたため、腐食しているのが明らかに見える。いま一つの穴は、裏山に建っている五重塔の裏にある。五重塔は、左と裏側はすぐ山肌むきだしの崖になっており、右側は10メートルくらいの落差の上がり斜面、正面は入れないように鉄柵がしてある。その鉄柵の隙間を通して中に入ると地面より5メートルくらいの高さに開口部を剥き出しにして穴がある。岩の割れ目を利用して掘ったようで、少し傾きのある穴である。あと一つは、本堂右側にある庫裏の建物の裏側にあったが、建築に当たって穴の開口部を塞いだとのことで、見る事が出来なかった。この三つの穴は、いずれもかなり深く掘り進まれているとのことで、目白山下の山の向こう側に突き抜けているとのことである。

3. 当番兵の仲氏が、上官や同僚の洗濯をした法源寺

竜口寺の裏手に位置する法源寺へ行く。ここは仲さんの直属の上官である内山少尉が単独で居宅していた寺で、当番兵の仲氏は、上官や同僚から頼まれて洗濯物を処理するのに寺のおかみさんから、お茶を沸かす大釜を借りて内山少尉に不興を買

ったところである。当時の住職は、海軍に従軍中で、長後の通信隊に勤務して^{ちようご}いて不在であった。

仲さんが洗濯をしたという場所は特定できた。この日現住職は不在であったが、長年ここに勤務している女性から、当時のおかみさんは、比較的早く亡くなられ、住職も最近亡くなられたということであった。現在の住職は高木さんといい、前住職のご子息である。

4. 腰越国民学校に中隊本部が、また腰越出張所に指揮班があり、仲氏は、出張所隣にあった15坪ばかりの公会堂に寝泊りしたという場所

高台になっている法源寺の裏から当時の腰越国民学校や腰越公会堂などを俯瞰^{ふかん}する。今のように家が建てこんでいなかったために、この三地点は直線の近道で往来でき、仲さんは毎日日課のように行き来していたそうである。腰越小学校と公会堂（今は幼稚園）を訪問する。

5. 腰越の奥、山の地形の入り組んだ場所に海岸方向の道路に貫通口が出るように後側（裏側）から掘り進む掘削作業をした場所

当時兵隊が穴を掘っていた場所を探したが、あまりに環境が変化していて場所を特定することが出来なかった。たまたま通り道にあった大きな構えのお宅に飛び込んだ。細井さんといい、この付近の地主さんで、次兄である細井務さんを紹介された。細井さんの家は、小動～西鎌倉を結ぶバス道路沿いにあり、「中迪」と号して高級陶芸を営んでおられた。細井さんは仲さんを一見するなり、この方は見たことのある兵隊さんだということで一度に興味が高まった。細井さんは昭和8年生まれ、当時12歳ながら興味旺盛な少年で、兵隊の動静は今に至るも記憶万全であるとのことであった。仲さんの上官である中川隊長のことにも話が及び、兵隊の掘っていた穴のことも知っているとのことであった。穴の一部は創価学会（法源寺に隣接）の敷地の中にあり、そこは学会の本部の許可が必要とのことであった。

後日、細井さんが許可を取っていただき現地を調査した。

6. 小動あたりの勾配のきつい山に杉丸太の伐採に出かけた場所

ここは8月15日正午、終戦の詔勅がラジオ放送される日の午前中のことで、仲氏は同僚の兵隊達と洞窟の内部を補強する材木を切り出そうとこの岬に上がっていた。急な斜面で木の根っなどを掴まないと上がれないほどであったという。現場へ着くと上がったという山は134号線国道の海側の山（小動神社のあるところ）ではなく、134号線の内側であることが分かった。ということは満福寺^{まんぶくじ}のある山である。しかし残念ながら現在は駐車場や墓地などに山が削り取られて山容が当時と変化しており、仲さんの記憶とは一致することはなかった。

7. 仲氏が出頭した綾田隊の宿舎があった貞宗寺(玉縄城址の南麓)

仲さんは貞宗寺の本堂の左奥のスペースをあてがわれ、1ヶ月ほど起居した。周囲の環境や竹林などに昔の面影があり、感慨深げであった。ただ本堂の床の高さが違うということで住職夫人に確かめたところ、果たして戦後床を約1メートルほど持ち上げたということであった。貞宗寺を出て広い往来に面した久成寺くじょうじに車を停めて、緩い上がり坂を藤沢の方向に進む。標識が鎌倉市から藤沢市に変わる。植木から藤沢市渡内地区わたうちに入る。道の左側日通藤沢支店の地点が穴を掘り進んでいた場所である。そこは道のレベルから石段20段くらいの高台で、往来を通過する敵を捕らえる格好の場所である。仲さん自身当時からこんな穴でアメリカに勝てるのかなとの気持ちがあったと手記に書いておられる。仲氏は更に炊飯していた場所などを探しに、子息とともに歩かれたが、見つからなかったようである。50数年の時間はすべてを風化に追いやってしまっているようである。

8. 8月1日遊行寺に移動し、新しい陣地構築をおこなう。

8月1日に遊行寺に移動する。すでに大部隊が先着した後なので、割り当てられたペースは、本堂のど真ん中で、毎朝の勤行の行われるところである。当時蚊帳をつたというが、本堂の太い梁にどうして吊ったのか、兵隊は何でも器用にこなすから、上手に吊ったのであろう。本堂の前の広場で毎朝、点呼・体操があり、その後屈強の兵士による抜き身の軍刀での切り込みの模範演技があったそうである。負け戦の中でのせめてもの士気を鼓舞する最後の企てとなってしまった。部隊は数日後、新しい陣地構築のため遊行寺から南に道路を渡り、大鋸だいぎりあたりの斜面にツルハシを打ち込み始めたところで作業中止の命令を受領したとのことである。仲さん達は腰越の中隊本部に復帰した。

写真（A）

鎌倉で障地構築をした仲さん

平成14年6月3日に鎌倉に
来た時に撮影（81歳）



写真（B）

竜口寺裏山の武器のあった穴倉

写真中央の奥にあった穴倉で
現在は塞がれている。



写真（C）

中隊本部のあった腰越小学校

現在の鎌倉市立腰越小学校
左の人はCPCの曾根
右の人は仲さん



写真 (D)

綾田隊の宿舎となった貞宗寺

終戦前後の当時の様子を寺の人にいろいろ聞いている。

写真右の3人は、左から平田、仲、寺の人

写真左の人たちは、C P Cのメンバー



写真 (E)

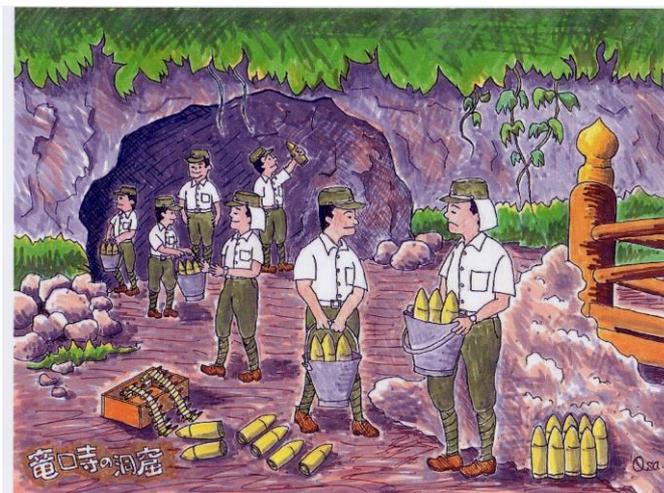
新しい障地構築のために遊行寺に集結

遊行寺の前で仲さんを囲みC P Cのメンバーと撮影



写真 (F)

竜口寺裏山にあった武器庫のイラスト



私の戦争体験（1）

平成15年9月14日

泊川 勝治さん

平成15年の8月、鎌倉中央図書館に秋田県の女性（佐藤さん）から、電話の問い合わせがあり、父親（74歳）が戦時中兵隊で穴掘りをしていた場所へ行ってみよう。その場所が分かるかという内容であった。以下の文章はご本人の手記である。

記

私は昭和18年の12月、八森国民学校（秋田県）高等科2年の時、先生に勧められて、同級生7人と海軍特別年少兵の工作科の試験を受けました。不運にも私一人だけ合格しましたので途端に行きたくなりなくなりました。どうにもならず19年の春卒業し、5月25日に武山海兵団に出発しました。工作科220人余（一教班16人で14教班あった）のうち秋田県からはたった3人だけでした。入ったその日から「君たちは将来中堅幹部として新兵を教育するような兵隊にするからその心構えでおれ」とハッパをかけられました。

一般志願兵は3ヶ月くらいで配属になるのに、私たちは1年間厳しい教育を受けました。学力も小学校卒業で行ったので、昔の読み書きソロバン程度でしたが、一年で中学卒業までの学力を付けてやると物理、化学、国文法などを習いました。軍事教練はカッター、伝馬船から陸戦、手旗信号、モールス信号、夏は水泳と、これらは皆競争でした。カッターでビリになったら、他の教班員らのご飯を食べているのに、テーブルにご飯を盛ったまま食べさせないで、長椅子に座った姿勢で漕ぐ練習をさせられ、おまけの果てに教班長はテーブルをひっくりかえしてしまうのです。さあそのアトは大変、腹は減るし、身体や床に散らばったご飯や汁も掃除しなければならず、服は洗わねばならずで・・・たった1年3ヶ月の短い生活で得た教訓は「力で負けたら意地で勝つ」ということでした。それが心身の奥までしみ通り、それをこのころまで実行してきたような気がします。また海軍は陸軍と違って、たった一人のミスのため何百人もの人と船が沈むので全体責任を重視します。誰か一人悪いこと——例えば腹が減って残飯捨て場で残飯を食べて見つかった人のいる分隊は、二百何十人全部の兵が拳骨でアゴを殴られ、何のために殴られたか、後になってその原因がわかることがままありました。夏の訓練の疲れから学科の時間になって、眠気も出てきますが、もし眠ったら大変。大きなオシタップ（掃除用のタライ）に水を一杯入れて、兵隊二人に持たせて頭からかけられ、身体も教科書もずぶぬれ、その他になぐられ床を掃除しなければならず、当人は惨めさを乗り越えて死にたくなる思いです。だから勉強中は針を用意して眠くなったら膝に針を刺してずぶ濡れから逃れたこともありました。每晚8時から9時ころまで夜学をやらされ、ひとときの休み時間、大楠山から空に向かって出す幾筋かの探照灯の交錯する光を見ながら、故郷の母と一人の姉のことを思い、涙した晩も幾度かありました。（父は私が8才の時に病死）ですから鎌倉へ1ヶ月くらい

穴掘りにいった時は、ローマの休日ならぬ地獄の休日のような気持ちでした。一教班（教班長は戸沢馨氏）が1軒の宿で小さい火鉢ながら火の気にあたる事が出来ただけでも、心の安らぎを得ることが出来ました。海兵団では火は勿論、暖というのは週一回くらいの風呂程度で、冬でも洗濯は薄氷の張った水槽の前で素足で凍える手に息を吹きかけながらでした。5月に入ってから分隊長の訓示で、工作科から機関科に転科になり、特殊潜航艇の勉強のため、すぐに大楠機関学校に行くことになりました。まるで尻を叩かんばかりに追いやられ、二人乗りの海竜という艇の機関のすべてを3ヶ月かけて勉強しました。丁度、運命の8月15日の朝に名前ばかりの卒業式をやり、行き先は秘密なので、引率者のあとについて行くように、ただし正午の天皇陛下の玉音を聞いてから行動せよとの命令で待機していました。それからが大変、われわれは一日でも一時でも早く帰りたいのに、将校や上層部は「日本は負けても、海軍は負けない。敵が相模湾に入って上陸したら、ここから攻めろ、いやあちらの方がよいだろう」と毎日大楠山の手前の畠あたりの地形を探しに指揮者のあとをついて26日くらいまで歩きました。そしてその日少し早く帰ってきたら、将校がきて「27日か28日にアメリカのマッカーサー元帥なるものが、厚木飛行場に来るから、そのあとになると何時帰れるか分からないので今のうちに帰れ」と言われました。衣囊袋一つと乾パン一袋をもらい、スシ詰めトラックにようやく乗せてもらいました。衣笠駅で降り、国鉄で上野駅までたどり着き、臨時の無蓋貨物列車に乗って帰りました。

泊川さんは平成15年9月14日に、ご夫妻と娘さん二人にお孫さんの五人で鎌倉へ来られた。鎌倉は58年ぶりということであった。「鎌倉ホテル」の名前を記憶されていたので、同ホテル跡地に立たれたが、記憶が蘇った様子はいかがえなかった。鎌倉での穴掘りは武山海兵隊での教育の一環として1月の中旬から1ヶ月あまり行われたようだ。宿舎は個人の家か小さな旅館であった。山側の穴の入り口一帯は竹林で、その竹を割ってテーブルや箸を作り、立って食べた。土捨て場の下あたりに住宅があって、捨てた土が転がって家に入ったらしくて叱られたことを思い出す。

坂ノ下の「力餅屋」のご主人から、泊川さん達が掘ったのは霊山の山の裏側から海に向かって掘られた穴ではないかという情報をもらった。坂ノ下の海浜公園あたりから斜めに上がる道を上がり、プールの上あたりに来た時、同氏の気持ちが動いた様子であった。眼下の海を見ながら「こんなイメージだったな」とつぶやいておられた。山の裏側におりて谷戸の奥深く入り平地になっているあたりで穴の入り口を当たってみたがそれらしいものは見つからなかった。竹藪らしいものはなく、山の崖はコンクリートの壁で補強されていた。

後日、お礼状の中で「半世紀以上も前の記憶で、探す山の地形は土地開発で変わった鎌倉では無理ですが、山を上がって行く途中の高台から見た相模湾のイメージと山

の裏側へ連れて行っていただいただけでも、大満足でした。『鎌倉ホテル』の跡や、当番の時、弁当を運ぶのに通ったことなど思い出が強く残っております」などと述べられた。

写真（A）

鎌倉ホテル跡に立つ泊川勝治さん（中央白いYシャツ姿）

ここに部隊の炊事場があったので、ここから穴掘りの現場まで食事を運んだ。



写真（B）

極楽寺坂の途中にあるアーチ型の穴の入口を見る。

当時を思い出す泊川さん



写真（C）

海を見る泊川ご夫妻

このあたりの山肌に泊川さんたちが掘った横穴の出口（銃眼）があった。極楽寺1丁目11番鎌倉海浜公園プールの上あたり



写真 (D)

記念撮影

兵隊たちが穴を掘った場所と
思われる極楽寺地区の山の中。
ここから海へ向かって掘り進
んだ。極楽寺1丁目9番



写真 (E)

穴を掘った現地に立つ泊川さん



写真 (F)

私の戦争体験（2）

平成15年9月

広瀬 修さん

平成15年8月末、JR鎌倉駅地下道ギャラリーで「鎌倉・太平洋戦争の痕跡」と題して、当時の資料・写真・地図などを展示したところ、これに関して横浜市旭区にお住まいの広瀬修さんから、自分なりの戦争体験を文章にしてお寄せ下さった。以下はその全文である。

1. 略歴

昭和4年私は三宅島に生まれ、国民学校高等科を卒業し、昭和19年予科練を受験しましたが落第、機関兵として昭和20年2月武山海兵団に入り、5月大楠海軍機関学校に入学、8月終戦、同月鎌倉材木座の大きなお寺に移り海軍保安隊として池子の弾薬庫を警備、9月初めに沼津海軍工作学校に移動後9月末復員しました。まだ16才でした。

2. 武山海兵団のころ

昭和20年2月1日朝、東京駅に集まり、専用の横須賀線に乗り衣笠駅で下車、徒歩で武山に向かいました。トンネルをいくつかくぐったところで、母が持たしてくれた握り飯を食べました。母が乗った帰りの船が、硫黄島から飛来した最初のグラマン戦闘機に攻撃されて沈みました。私が母を死なせたと今でも思っています。

海兵団の入り口の土橋を渡りました。残した食べ物はすべて取り上げられ、肌着だけ残して衣料はすべて郷里へ送り返されました。水兵の着る軍装は、衿回りや胴回りがスカスカで2月の冷たい風が吹き抜けました。上下の繋がった古着の作業服は布地がすり減っていました。

食事は初日に山盛りの麦飯が出ましたが、一週間もすると、アルマイトの丼に7～8分目くらいとなり、肉・魚は記憶にありません。汁は醤油味で三浦大根の輪切りがはいっていたのを覚えています。1ヶ月もすると、盛り上がっていた筋肉はみるみる細り、骨が浮き出してきました。帝国海軍の食事が痩せる原因だとは夢にも思いませんでした。食器を洗ったあとの残飯が捨て場に溜まっていました。これを手ですくって食べる人たちが出始めたのもその頃でした。私が飢餓の世界を彷徨し始めたのはこの頃からでした。殴られました。ことあるごとに殴るのです。吊り床の格納の遅い人、床掃除の遅い人、姿勢の悪い人、などなど理由はありませんでした。拳によるアッパーカットと木の棒で尻を力任せに繰り返し叩くのです。紫色にはれ上がり入院した人もいました。ある時一人が「海軍は殴らないことになったと

聞いている」と抗議しました。すると「お前らは志願兵だろうが」と怒鳴るのを聞いて「強制志願です」と言い返していました。日本中の少年があの手この手で戦争に駆り出されていたのです。

シラミが湧き出し、日本脳炎も出ました。真冬の風が室内を吹き抜け、外の氷は終日溶けません。暖房のスチームは一度もきませんでした。吊り床の中は藁布団と毛布二枚です。まもなく高熱が出て入院、肺炎でした。血を吐きました。頭の上でグラマンの急降下する金属音、爆発音と振動、機関銃の発射音・・・只寝たままで聞いていました。

班は約10名でした。銃は三八式と九九式が計6丁あり、射撃訓練で5発撃ちました。ロケット砲台と呼ばれていたトンネル壕掘りにも行きました。和田の民家に泊まり、近くの丘の中腹に坑道を掘りました。幅は1.55メートル、高さは約2メートル、地質は関東ローム層で、ツルハシとシャベルそれにモッコです。この丘の上には白旗神社があり、急な階段を登ると三崎方面がよく見えました。

30才近くの人もおり、自分が乗っていた軍艦が沈没し、もう他に乗る船はないと話していました。

行軍の時、大根畑に入り休憩しました。班長の目が大根を食えと言っていました。先を争うように生の大根を齧りました。しかし辛くて多くは食べられませんでした。長浜の海岸に行軍をした時、目の前で漁船が沈み、波打ち際に多量の鰯が打ち上げられました。鰯は指で開いて生で食べました。漁師が戦争に出てしまい、魚が増えたのでしょうか。

作業服はつぎを当てても縫い目からほころび、靴の底は剥がれ針金で巻き付けました。4月ころには父親ほどの年齢の人たちが入団してきました。ベニヤ板に濃い緑色のペンキを塗った体当たり用の特攻艇が何艘も木陰に運ばれて来始めました。

5月の始めに宮城県の男鹿半島の荻浜に移りました。女川から船で金華山を回って行きました。特攻隊の舟艇を格納する穴掘りです。岩盤は堅く崩れ易く難しそうでした。

数日後私は、他の一名とともに呼び戻されて大楠海軍機関学校に入学しました。帰りの列車から見た五反田周辺は全て焼け、動くものはなく道路は滑走路のようでした。

3. 大楠海軍機関学校のころ

朝から晩まで終日学習です。掃除、体操、食事以外は学習でした。背丈を越えるジーゼル・エンジン、潜水艦用の蓄電池、特殊潜航艇などがありました。短時間でしたが英語も習いました。

次第に空襲が多くなり、防空壕で過ごす時間が長くなりました。壕は逗子側の崖にいくつも掘られ大きな壕は高さ3～4メートル、幅10メートル、長さ30～4

0メートルくらいはあったようです。この地層には貝殻が混じり堅く、掘削には鉄道のレールの先端に刃先をつけ、櫓に吊り下げ、振り子のように振動させて突き当り崩していきました。壕の上の丘には機関砲が4～5座ありました。艦載機が南から編隊で近づき、糸を引くように急降下して横須賀方面の山の向こうに消えました。間もなく爆発音がし、大楠山すれすれにグラマンがつぎつぎに現れ相模湾へ飛び去りました。

機関砲はほぼ水平に発射し、信号弾の煙がグラマンに吸い込まれて行きました。高射砲弾の破片が落ちてきました。

駆逐艦が浦賀（三崎）にドック入りし、乗組員数十人が約1ヶ月間訓練を受けていました。理由は乗員が未熟のため危なくて駆逐艦を動かさないのだそうです。

学校が自前の定置網を設置したところ、連日鯉の大漁となり、1週間ほど刺身でしたが、ジンマシンが出て煮付けに変わりました。海に魚があふれていたのでしょうか。

4. 松の木の白旗

珍しく新聞が掲示され、広島に新型爆弾が投下されたとの記事を読みました。その数日後敗戦となりました。防空壕から出てきた時に知らされました。青空が広がり真夏の太陽が照りつける暑い日でした。ただ時間だけが流れて行きました。夕闇の中に民家の電灯の光がチカチカと輝き出しました。昨日まで漆黒の闇であったその中に。この時始めて「戦争をしなくてよいのだ。死ななくてよいのだ」という思いが溢れ出し、自分の周りにあった目に見えない器がこなごなに砕け例えようもない広い世界を感じました。

翌朝「校長が逃げた」と聞きました。夜中に幹部がトラックに米や毛布などを積んで逃げたのだそうです。トラックが3台なくなっていて、翌日は更に2台が見えなくなりました。これを境に秩序が失われました。あれだけ強固だった組織はどこにも見当たりません。リーダーを持たない人間の集団が崩壊するさまを見ました。

多くの人が倉庫に押し入り白昼缶詰を担ぎ出し、食事の時に山盛りにして食べました。書類を焼きました。私は教科書を投げ込みました。小さな神社の後ろの壕の作業から出てくると、3人の将校が軍艦旗を焼いているのに出会いました。

全員が錬兵場に集まり、復員のスケジュールを聞いている時でした。低く垂れこめた雨雲の中からグラマンが私たちをめがけて急降下してきました。操縦する人の顔が見えるまで接近して飛び去り、これが繰り返されました。この時ほど恐ろしかったことはありません。まだ米軍が上陸していない時でした。引き金を引かれればそれまでです。生きられる望みの中で死に直面したのです。なんとしても生きたいと願いました。

皇宮警察の募集がありました。宮城の警備員が逃げたのだそうです。私たちは海

軍保安隊と名前が変わり、鎌倉材木座の大きな寺に移されました。トラックの荷台に乗り、海岸の道を鎌倉に向かいました。相模湾は海面が見えないほどの軍艦で埋まり、空は飛行機です。渚近くには上陸用舟艇、次に駆逐艦、沖合に戦艦、空母そして輸送船などなど数える気にもなりません。圧倒されました。これが命をかけて戦おうとした相手であることも念頭にありませんでした。夜は光の海を見るようでした。

海岸の崖の上には当時松の木がたくさん生えていましたが、その一本一本に白旗が立てられていました。長い竹竿の先にシーツ大の白い布がつけられていたのです。

仕事は池子の弾薬庫の警備でした。ここでも警備員が逃げてしまったそうです。アメリカ兵が着たとの声に、中に逃げ込みました。弾薬が木の棚に隙間なく並んでいました。米兵は番兵が持っていた木銃や木刀を調べて引き上げて行ったそうです。

その後沼津の海軍工作学校に移動し、9月末ころ復員しました。沼津では外地からの復員船に乗るよう、なかば強制的な勧誘がありました。やはり船が内地に着くとその日のうちに、乗組員が逃げてしまうのだそうです。無抵抗な子供を利用しようとしたのだと思います。あれから58年、戦いもなく、殺すこともなく暮らしてきました。しかし今の世の中は戦前の形の中へとのみりこんで行くように見えます。

廣瀬修氏・花井実氏を迎えて戦時体験を聞く

平成15年10月16日

語り手 廣瀬修氏・花井実氏

鎌倉駅地下道ギャラリー展示「鎌倉・太平洋戦争の痕跡」に対して多くの反響があったが、この日は、「自分の体験を是非伝えたい」と文章を寄せてくださった廣瀬修氏と、昭和20年当時鎌倉坂の下で陣地構築に従事した花井実氏を迎えて直にお話を聞き、さらに現地を歩くこととした。

1. 廣瀬修さん

朝日新聞で「鎌倉の戦争展」の記事を拝見して衝撃を受けました。お話しする機会はこれを置いて外にないと思いました。私は常々自分の戦争経験を次の世代に言い残さなければと考えておりましたがこれまでその機会がありませんでした。とりあえず、体験の中の上澄みを掬って事実だけを手記にしてお渡ししました。(手記参照)

戦後の生活は、あの時の飢餓、飢えのつらさと恐怖からしたら何でもありませんでした。退職後、今という社会はどういうことだろうと知りたくて放送大学へ通い、「三宅島の噴火と火山島の形成史」をまとめ、今はそれをわかりやすくみなさんに説明する仕事をしています。油絵を趣味にして暮らしております。放送大学に入っただけで病気が見つかり、死を強く意識しました。ふと景色を見るとまわりがきらきら輝いていて、私も今日一日を輝いて過ごそうと思うようになりました。

1945年の体験を次の世代に伝えよう、次の世代がこういう体験をすることは耐えられない、それほどあの体験はすさまじいものだったんです。

当時、男は兵隊に行き戦うものだと思っていました。例えば映画館で「決戦の大空へ」を見ると感動します。出てくると願書をば一と配っている。東京の月島の辺りで兵隊検査がありましたが、若者がびっしり集まっていました。15歳で資格が出るんです。

東京駅まで送ってくれた母は三宅島へ帰る船が攻撃を受け、死んでしまいました。その後に子供が11人残されました。父は産業組合の組合長でしたが、路頭に迷うがごとくでした。

横須賀の海軍機関学校ではよく勉強しましたが、幼稚な勉強だったと思います。最初はオームの法則を習いました。すでに特殊潜航艇の生産が少なく、ベニヤで囲ってある様な船で、エンジンは焼き玉でした。よく事故が起きて、圧搾空気の噴出で死んでしまった若者もいました。

終戦後武山から材木座へ移動するときに見た相模湾に浮かぶ敵の軍艦はものすご

く、黒い軍艦が水平線の奥までかすんでいました。夜、光明寺から見た海は、まるで今、羽田から東京へおりるときに見える光の海のようなでした。

海岸の山には2本に1本の松に大きな白い布がかかっていました。個人が揚げたのではなく、「日本」が揚げたんだなーとつくづく思いました。

2. 花井実さん

私は横須賀生まれです。工業学校を出て海軍航空技術廠の飛行実験部において、飛行機の整備かたがた実験をやっていました。試作機として「ゼロ戦」「一式陸攻」「深山」「連山」を扱っていました。2月16日にグラマン攻撃を受け、3月13日に三沢へ移転して三沢で「連山」の実験をやっていましたが、上等整備兵曹という役で今までの上司が下になり階級が逆転してやりにくくなり 現役で外に出て兵隊になりました。

- 7月22日か23日から終戦まで鎌倉にいました。坂の下の桂木（田）別荘に松延部隊1小隊20人足らずで宿泊していました。場所は力餅屋の手前から海へ出る路地にあり総2階造りで戦後は日産か何かの寮になっていました。成就院の下、墓地の下に穴の入り口をつくり、海へ抜いて銃眼を2個つくり、25ミリ機関砲を2丁据えました。ツルハシで掘った土の運び出しは2人がかりでモッコでやりました。手前の銃座は由比ヶ浜の海岸線を向き、もう一つは半ば沖合いに向かっていました。中隊本部で私以外に地図を描ける人がいなかったので私が陣地の配置図を描いたり、極楽寺坂からどこへ銃眼を出すか、その地点を決めるために、坂の下の大きい米屋で借りた30センチの物差しと水筒の磁石で測って方向を決めたりしました。指揮も何もメチャクチャで階級を飛び越していました。
- 機関砲を取りに行ったのは衣張山かどこかです。銃は来ましたが正式の名前も、弾の種類も使い方もわかる人がいなかったなので、来る前に360人単位で半日講習を受けた中の一人だった私が教えているときにちょうど終戦になりました。砲は2種類あって、小銃（三八）と九九式（小型）でしたが、どちらにどの弾をこめたらいいのかもわからない状態でした。銃の操作をしたことはありますが弾をこめたことはありません。
- 鎌倉ホテルの炊事場（ハウスイ所）から食缶を竹の棒で前後に担いで現場に行きました。道ばたの三角地にゴミ捨て場があったのを覚えています。
- 前田別荘でも穴を掘りました。今の文学館の奥左側の小高いところにあずまやがありその辺りから長谷5丁目に向けて通路を造り、貫通したと思います。由比ヶ浜に上陸された場合の連絡通路でしょう。あずまやを利用して食事をしたことがありますが、本館よりも一段高い所で視界がいいところでした。長谷5丁目裏側は小さい家がたくさんあったようです。
- 宝戒寺、安養院にも穴があったと記憶しています。

- 池子の弾薬庫の弾薬を、8月2日か3日に地下壕へ大移動しましたが、その地下壕が今回の朝日新聞の写真と同じでした。壕には羽の付いたロケット弾が木箱にびっしりと入っていて、我々は「ロケット砲台の穴掘りをする」と言っていました。当時池子の弾薬庫だと言うことは知らされていませんでした。報国寺の裏山にも弾薬が置いてありましたが、そこはそんなに大きくありませんでした
- 8月15日は、長谷の松竹劇場の脇に入り、やや歩いて坂を上ると幼稚園があり、そこで玉音放送を聞きました。そこにはその日初めて行きました。200人くらい集まっていました。中隊本部はその幼稚園へ行く途中のどこか、二階家でした。
- 陸軍部隊は2～3日中に帰り始めたが、我々の海軍松延部隊は、厚木の航空部隊と呼応して切り込みをやるということになり、桂木別荘には8月29日までいました。日本刀を13円50銭か16円50銭で買い、ドスを持って厚木に向かったんですが、小田急で検問に遭い武装解除されました。29日にはもう米軍が入っていたんです。兵舎の掃除をして解散しました。

3. 現地を歩く

10月16日の午後、花井さんと坂の下・長谷を歩き当時の記憶を探った。

桂木別荘はすぐ見つかると思ったが、意外と難航した。何年か前にご本人が現地に来られた時には元の建物が残っていたらしいが、今は無くなっていた。結論として、三留酒店の手前の路地を海方向に約10メートル入り、左側に新しい住宅が3軒建っているあたりであろうということになった。花井さんは少しがっかりされていて、しかも元の名前が桂木ではなく桂田だということでもまた不安な気持ちになられたようだ。

気を取り直して極楽寺坂を上り、墓地の下あたりの穴を見る。坂の途中に2つあるが手前の方を掘ったらしい。花井さんは背が高いのでいつも帽子が穴の天井に当たって擦り切れていたと懐かしそうに話された。海側の穴は坂の下の現マンションビュウパレスの裏側になるだろうという話をして、次の地点、鎌倉文学館へ向かった。文学館本館の左前の芝生で山の茂みを覗いたが、穴らしいものは見えなかった。

最後に玉音放送を聞いたという「幼稚園」に向かった。鎌倉彫「寸松堂」の右脇を佐助方向に入り、養護施設旧「鎌倉保育園」までたどり着いた。建物も新築され、雰囲気がかわっていたが、場所の広さや少し敷地が高くなっている様子に当時を忍ばせるものがあるとのことで、ここが玉音放送を聞いた場所であろうということになった。記念写真を撮って解散した。

写真（A）

広瀬修さんと花井実さんの戦時
体験を聞くCPCのメンバー

平成15年10月16日

左から花井・広瀬の両氏



写真（B）

花井さんが所属した部隊が宿泊
していた桂田別荘の跡に立つ

左から二人目が花井さん



写真（C）

極楽寺坂の途中にある陣地の穴
海に向かって貫通している。

自分が掘った穴の前に立つ花
井さん



写真 (D)

鎌倉文学館の前庭

山の裏の長谷五丁目に向けて
穴が貫通していたが、現在は
入口は確認できない。



写真 (E)

玉音放送を聞いたと思われる鎌倉
児童ホーム（旧鎌倉保育園）
の入口門柱のそばで



終戦前後の思い出（手記）

平成11年2月18日

芹沢 良治

『鎌倉(かまくら)攬勝考(らんしょうこう)』（植田猛縉編の地誌で文政12年に完成した。『新編鎌倉志』と並び称されるもので、鎌倉地誌としては重要な地位をしめている）によると、琵琶小路という地名は「二の鳥居より大鳥居までの間を名付。古え此所に弁天の小祠在て道まかれるゆえ此弁天祠を右大将家八幡宮の池辺へ移し給ひ、路を直くし給ふ。弁天の像は琵琶を持給ふゆへ、地名として古へ此所を琵琶小路と唱ふ。今は弁天祠もなけれども、其唱え地名に残れり」と伝える。

いまの琵琶小路は、伝えられている所と多少異なるが、若宮大路にそびえる一の鳥居北側を西へ入った小路をそのように称している。

私は、この琵琶小路で鍛冶屋を営む家の長男として、昭和8年8月、自宅で産婆さんに取りあげられ生まれた。長姉、次姉との後の男であったので、父の喜びはひとしおであったようだ。父は、根っからの職人氣質で、子供の躰は厳しく、食事の箸の使い方から布団の敷き方まで、気に入るまでやり直しをさせられた。

冬の鍛冶屋の仕事場は暖かく、常に近くの人々が集まり、紅蓮と化した鉄を槌音高く打ち込む中で、お互いの情報交換の場でもあった。このような環境のもと小学校入学まで不自由なく育った。

昭和15年4月、私は鎌倉市立第一小学校へ緊張した眼差しで入学した。講堂での入学式も終え、教室にもどり席に座った。隣りはK・Iさんという女の子であった。担任の女の先生は、眼鏡をかけ着物姿に羽織袴が似合う、色白の美しい人だった。

入学した私達は、それぞれ担任の先生に引率されて、鶴岡八幡宮まで修身の本をもらいに行き、舞殿から少し下った階段で記念写真を撮った。学校に慣れたころ、友達を誘って先生の家まで遊びに行った。1年が瞬く間に過ぎようとしたが、先生はご主人と満州へ行くと言って退職された。寂しい想いがしたのは私だけではなかった。昭和16年、小学校は国民学校と名称が変わり、私は2年生になった。この年の12月8日、早朝の臨時ニュースは、「大本営発表。帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入り」と報じた。

すでに、鍛冶屋をやめ勤め人になっていた父は、やや興奮したように会社へと出かけて行った。2年生の時の担任は、20歳ぐらいのお兄さんのようなF先生であった。坊主頭で黒い詰襟がよく似合い男らしさが漲っていた。昭和17年春、先生は海軍へ入隊することになった。別れの記念に組全員で写真を撮ることになり、学校から海岸まで松林のじゃり道を歩きながら大きな声で軍歌を唱い、やがて海辺に近い滑川（なめりかわ）尻の木組みの橋のたもとについた。先生を中心にシャッターは切られた。いま、この懐かしい写真を見ると、裏側に、鎌昭和17年3月28日、横須賀海軍鎮

守府検閲済の丸型ゴム印が付してある。背景の松林はいま姿を消したが、すでに自由に写真も撮れない区域になっていたのである。戦後、この先生のことを誰も知らないが、貴重な写真なので大切にしている。まもなく3年生になった。昭和17年4月18日の昼ごろ、道路を隔てたお医者さんの家の車庫と、隣家二階の軒との僅かな隙間の青空に、一点きらりと光る物体が見え、子供心に星としては変だと思いながらよく見つめていると、徐々に大きく変化してこちらに向ってくる。「あっ、飛行機だ」と判るのに余り時間はかからなかった。見なれない飛行機だと思ったが、すぐ八幡宮方向へと飛び去り、まもなく、けたたましいサイレンが響きわたった。空襲警報が発令されたのである。日本が初めて空襲を受けた日のできごとであった。

この飛行機は、米空母ホーネットから発進したB25、16機のうち13機が東京を襲ったのである。はぐれた1機が鎌倉の上空を飛び東京を襲ったと思われるが詳細は判らない。

翌、4月19日の朝日新聞に「初空襲に一億沸る闘魂」「我が猛撃に敵機逃亡」と誇張とも思える記事が載っている。幸い鎌倉は被害を受けることなく、やがて夏を迎えた。子供にとって戦時中とはいえ、夏休みは待ち遠しく、蝉や蜻蛉、鉾の大きい弁慶蟹、ザリガニを捕るなど、楽しい遊びが待っていた。ことに蜻蛉獲りは齢六十を過ぎた今でも忘れられないスリルのある遊びであった。蜻蛉は種類によって習性が異なるので、この習性を生かして捕るのである。人気の高いオオヤマ蜻蛉は形も大きく長い胴体に黄色の縦縞模様を輝かせ、悠然とした姿を山間の静かな谷間に現し、スウーと飛んでくる。網を持つ手に力が入り腰をかがめて立ち塞がり、機をみて捕るのである。銀ヤンマは、夕方になると何処となく海岸の方から八幡宮の裏山をめがけるように飛んでいく。7・8メートルの高さを飛んでいるので捕り方は難しい。智慧をしばらく小砂利を空高く投げると昆虫と間違え急降下してくる。このチャンスを逃さず捕るか、釣竿の先端に“ハエ”を結わえた糸をとりつけ、ぐるぐる回して釣るのである。

昭和18年4月、4年生になった。4年生に進級すると男組、女組とに編成替えがあった。強い別れはむなしく思った。担任の〇先生は、30代半ばの厳しい先生であったが、授業は楽しく、勉強嫌いの私も不思議と成績が上向きになった。小学校の近くに住んでいた私は、日曜日によく先生の畑仕事を手伝った。

こうした一見のどかのような日も経つにつれ戦争は次第に激しさを増し、昭和18年2月のガダルカナル島の撤退で敗北の度を深めて行ったのである。体操の授業にも、手榴弾投げや空中転回などが行われるようになり、私も海軍予科練習生に憧れるようになった。小学校5年生になった昭和19年の暮れから20年にかけて、アメリカの日本本土への爆撃は熾烈になり、空襲を告げるサイレンは毎日のように鳴った。夜間、警戒警報が出ると、何処の家も電灯に黒い布を覆い明かりが外に漏れないようにした。空襲警報に切り替わると完全に消灯し、真っ暗な不安な夜を過ごさねばならなかった。このような日が、いく日も続いた。東京をはじめ、神奈川県でも横浜、横須賀、平塚

など軍事施設のある地域は、軒並み空襲を受けた。横浜が空襲されたのは数回あるが、昭和20年5月29日の空襲は真昼間であった。高度1万メートルを八型編隊のB29が伊豆半島から進入し、鎌倉を北上、横浜に無数の焼夷弾を落とし、市街地を火の海と化したのである。私は、隣のKちゃんの家で遊んでいたが、急ぎ二人で二階物干し場上がり、飛行機を数えていた。2百機ぐらい数えたとき、突然、おじさんから「家の中へ入れ」と怒鳴られた。諦めきれない二人は、階段踊り場の小窓へよじ上り顔を出した。この時、左足を土壁に思いっきり踏み込んだので、瞬間、壁に大穴をあけてしまった。“はっ”と思ったが、大臣山の裏からモクモクと黒煙が入道雲のように昇るのを驚いて見ていた。横須賀空襲は、夜間であった。探照灯に捕った敵機を、地上から撃ち出す重機の音とともに、えい光弾が点線を描いて祇園山の背後を飛び交い、星空高くには、真っ赤に燃えた飛行機が海上めざして落ちて行く。この横浜、横須賀の空襲の状況は忘れられない。

深夜、空襲警報がでると、急ぎ頭巾を覆り、名前と血液型を記した布袋に学用品を放り込み、真っ暗な道を4歳下の妹の手をひいて必死に町内の防空壕まで逃げた。これが日常茶飯となり、諦め顔の父は、私達二人が生き残っても困るだろうと最後は避難を拒んだ。死を覚悟したのだろうか。真っ暗な不安な家で敵機の去るのを待った。長いながい夜、遠くに重機の音が聞こえる。空襲が激しくなり、学校も分散授業を行うことになった。6年生の私達は、下級生の机、椅子を極楽寺の成就院まで運ぶことになった。机、椅子を持つ生徒の長い列が、一の鳥居、松林、海岸通り、稲瀬川(いなせがわ)、坂ノ下と進んだ。痛む腕を我慢し誰も弱音を吐くものはいなかった。途中、海浜ホテル付近で空襲にあい、ホテルの松林に逃げ込んだ。分散授業で空いた教室は、海軍の兵舎となった。私は、朝夕に兵隊の炊事をしているところを見に行った。ドラム缶のかまどに大きな釜をのせ、ご飯を炊くのである。炊き上がると飯をスコップで容器に移し、縁についた厚いオコゲに醤油をかけお握りを作っている。腹の減った私達は羨ましく見つめていた。すると、「坊主、食うか」と兵隊が言った。「うん」と返事をすると、底についた焦げ飯をくれたのである。「うまい。うまい。」とみなが夢中で食べた。いつしか兵隊達と仲良しになった。やがて昭和20年8月15日を迎え、終戦となった。

この日、母はなんとなく緊張したかのように「今日、正午にラジオで重大放送があるから遊びに行かないで一緒に聴くように」と私に言った。整理タンスの上にポツンと置かれたラジオは、狭い我が家のどこからでも聴こえる状況にあった。正午まえ、母、私、妹、妹の友達K子ちゃんの4人がラジオの前に並んだ。やがて放送が始まったが雑音が多く、よく聴き取れずにいたが、途中、母が涙を流している姿を見ると急に悲しくなった。放送が終ると母は「戦争は終わった。日本は負けた」とポツリと言い座り込んでしまった。学校には兵隊は暫く残っていた。ある日20名ぐらいが列を作って学校を出た。私達がついて行くと、海岸へ出て坂ノ下の岸壁へ行った。するとビ

ール瓶にダイナマイトを詰め込み、じゃがいもで作った蓋の中央に穴をあけ導火線を差し込んだ。これが終わると1メートルぐらいの間隔に並び、上官の号令で一斉に点火し、海中に投げ込んだ。数秒して大音響とともに高い水柱をあげた。ダイナマイトを爆発させ魚を捕ったのである。海面に大きな黒鯛が沢山浮いてくる。兵隊は一斉に飛び込み魚を集めていた。見る見るタライ一杯になり、鯛が夕食をにぎわせたのであろう。8月27日、徐々に集結した40数隻の米艦隊が相模湾に停泊した。私達は恐る恐る松林の中から艦隊を見つめていた。誰となく大丈夫だから泳ごうと一斉に駆け出した。シャツを脱ぎ、白い禪姿で海に入った。ふと気がつくと、からだ中黒い斑点がついている。艦隊から流れ出た重油だったのである。慌てて家に帰り、隣のペンキ屋のおじさんに揮発油で抜き取ってもらった。懲りずに翌日も海へ行った。気がつくと海辺に30センチぐらいの茶色の紙箱が、所どころにちらばっている。「爆弾だ」とガヤガヤして遠巻きに見ていると口の開いたのがある。勇気を出して開くと、缶詰やタバコ、ガム、ビスケットなどが入っていた。みなが夢中で拾い集めた。不用になり捨てられた米兵の携帯食糧であった。食糧不足で空腹な日々が続いたが、悪童どもの元気な少年時代であった。思い出多い琵琶小路は大きく変化したが、その呼び名の響きには重みがあり大好きである。

鎌倉の陣地構築に従事した一兵士の回顧録

平成13年12月5日

仲 清

1. 臨時召集令状を受ける

その日は好天だった。染井吉野や葉桜の美しい山桜も終り、あとはぼってりとした八重桜を待つ、日に日に暖かさを感じる4月下旬のある朝であった。確か20日ごろのことだったと思う。私は日の当たる座敷で、何となく陽光を浴びてボンヤリとしていた。そこへ表の通りから一台の自転車が庭に入ってきた。顔をよく知る役場の兵事係りの野口好古氏であった。彼は緊張した様子の中にも笑みをたたえて「やっと来たぜ」と云いながら、桃色のレターペーパーほどの紙片を差し出した。「ついに召集がきたか」との覚悟はあったが、緊張と不安の気持ちに変わりはなかった。小学校の同級生の殆どが出征して、前年の昭和19年にはサイパン島や北支那で、戦死した話も風の便りには耳にしていたし、私と12才も年上の隣の歯科医師の土方氏も、一兵士として3月には外地に出征したことも聞いていたので、何となく取り残されたような感じはあった。しかし、このまま召集が来なければと、都合のよいことも考えていた矢先の出来事だったので「やっぱり無理だったか」とがっかりした。野口氏から受け取ったのは、臨時召集令状で「4月24日午前10時東部第六部隊に出頭すべし」とあった。まだ、4、5日の余裕があると思ったが、早速行動に移ることにした。独り者ゆえ、特に身辺を整理しておかねばならぬこともなかったが、出発までのスケジュールを一応思い浮かべた。まず、職場への挨拶、身のまわりの親しい人々への別れなど、慌しいうちに時は容赦なく流れて、あつという間に当日を迎えることになった。

2. 出征

家を出る際、普段ほとんど口を聞いたことのない父親が「もう、行くのか」と、顔をくしゃくしゃに歪めて、悲しそうな表情をしていたのを今でも鮮明に覚えている。戦争の末期ながら、駅のホームには沢山の人々が、小旗を打ち振って見送ってくれ、怯む心を「お国のために」と高揚せねばならなかった。実姉は、遠くホームの外れにただ一人、目に付くように立ち、その眼には涙を一杯溜めて一生懸命旗を振っていた。付き添いには何時も仲の悪い長兄が、この時ばかりは同行してくれた。西武線高田馬場駅から見渡した周辺は、一面の焼け野原、山手線の内回りに乗り換えて東部第六部隊に到着、二・三百名単位の人と一緒に営門を潜った。

3. 入隊

先ず、広場のようなところに150名ほどが並ばされ、少尉の襟章を付けた中年の軍医が現れ「全員、素っ裸になれ」と命令した。勿論、着衣を総てである。軍医

は、全員を見渡しながら「既往症のある者、具合の悪い者は申し出よ」というが、この期に及んでは余ほどの事がない限り、発言できるような雰囲気ではなかった。軍医は、整列している召集者の前をあっさり通り越し、一言「よろしい」と云った。やがて伍長の被服係りが現れ、全員の前にそれぞれ軍服を置き「着替えよ」と云った。この間、はなはだ事務的な作業進行で、命令口調でもなく体に合わせてめいめいが、軍服を選び着用した。

軍医はとっくに姿を消し、30才前後の下士官だけとなった。彼いわく「召集令状を出せ」である。これにはがっかりした。連隊区司令部、田無警察署、役場の兵事係りと貴重品を扱う如く、権威付けられてきた召集令状を、あたかも一片の金銭領収証の如く、単なる桃色をした紙切れとして下士官が数を数えず、無造作に受け取って仕舞い込み、それで総て終わりであった。私の想像からすれば、担当仕官が立ち会いの上で、下士官にでも一々手渡しするのかと思っていたが、全くの当て外れであった。見方を変えれば、身代わりも可能なのである。尤も兵隊は、一銭五厘（当時の葉書の値段）でいくらでも集められるが、軍馬や伝書鳩は、相当に値段を出さないと集められないと聞いていたのを、はからずも実感する羽目となった。やがて伍長は「昼飯に行くからついて来い」と、列の先頭に立ってスタスタと歩き出した。そしてその時、最初のトラブルに出会った。グズグズと纏まりなく歩いていた行列が、パタッと止まったのである。見ると、伍長の脇に正規の軍帽をかぶりスリッパ（営内靴）を履き、何か書類を抱えた軍曹が立っていて、何か文句を云っているのである。つまりすれ違った際、上級者に部隊が敬礼をしなかったのが理由のようだった。上級者に部隊が出会ったとき引率者は「気をつけ」の号令を部隊にかけ、自らは相手に挙手の礼をするか、あまり階級が違わない場合は、自分だけで敬礼する。また相手が将校のときは、更に「歩調とれ」と号令をする軍隊規則がある。伍長は一寸バツの悪そうな、不貞腐れた顔をしていたが、やがてそのまま通り過ぎてしまった。ある意味では、敗戦間近い軍隊の規律の乱れを、垣間見たとも云えようか。さて、昼飯は、露天に置かれた古びた台の上に無造作に並べてある竹筒に入ったスイトン（小麦粉を水でこねて団子にしたもの）で、これにもがっかりさせられた。軍隊に行けば、いま少しましな食べ物にありつけるのではと考えていたからだった。食べ終わったところで兵舎に引率された。このころ、東部第六部隊は、組織編成の部隊だったようで、若者から年配者まで幅広い年令と階級層の兵隊が、あちらこちらに分散して、作業をしたり隊列を組んで行進したりしているのが散見された。辿り着いた先は、片側に廊下のある長い安アパート式のバラックであった。私達は、ここで一個中隊に編成換えされて、一週間後に駐屯地鎌倉に向かうことになる。

4. 部隊の編成

兵舎の外に整列して編成の最中、一人の30才半ばがらみと見える少尉が怒鳴っている。「遅いぞ早くしろ」体格がよく兵隊を睨みながら大きな声を出すので、兵隊は一斉に緊張した。将校と下士官はそれぞれ別の部屋に入り、兵隊は分隊ごとに一つの部屋が割り当てられた。結局、私は中隊で歳が若かったため、このうるさい少尉の将校当番になることを下士官から申し渡された。少尉の名前は内山慶次郎、彼だけが外地経験者で、中隊長はじめ他の二人の将校は、過去にどの程度の軍隊生活を送ったのか不明であった。隊名は中村隊（速射砲中隊）中隊長は中村環中尉、第一小隊長は内山慶次郎少尉、第二小隊長は石川亮三少尉、第三小隊長は小磯格少尉であった。小隊は4分隊からなり、分隊長の兵長以下、上等兵（一等兵）1名二等兵6～7名の計10名前後の構成で中隊の総員は120名ほどであった。個人持ちの兵器はなく、中隊事務室（指揮班）に帯剣が10丁ばかり、これも公用外出の際に着帯するだけで、小銃はなく、肝心の速射砲は、8月になってやっと一門が到着しただけだった。

5. 軍人の服装

入隊のあと、幾日か天気が悪かった。そこで室内作業として、怪しげな手付きで自分の氏名を、戦闘帽、脚半（ゲートル）、襦袢^{じゅばん}、袴下^{こした}（ズボン下）に糸かがりした。軍服は、裏地を表に縫製したもので、あべこべで多少寸詰まりの感じがしたが、一応新品であった。しかし、二装と呼ばれる普段着は、ところどころ綻びを繕ってある中古で、かなり程度がひどいものであった。この服の襟に一つ星の階級章を縫い付けるのであるが、古兵が、星の先端が横に向いて、流れ星にならぬように気をつけろと云った。軍靴は、豚の革製で履き心地はあまりよくなかった。

6. 軍隊での生活

営庭は、集団の出入が激しいので、小隊長は、我々を青山墓地へ連れ出して教練の真似事をした。その後、一言付け加えた。「逃亡は厳罰に処せられる」と。

兵舎は、文字通りのバラックであったから、室内には何の造作もなく、内山小隊長も部屋の隅に行李を置き、軍服もその上に脱ぎ捨ててあった。別に当番に「どうせよ」と命令された訳でもないが、私は、バラックの外に転がっていた3～40センチばかりの木の棒切れを拾って来て、真中を荷解きの麻紐で縛り、簡易衣紋架を作り、軍服を架けて部屋の釘にぶら下げてみたが、一応、様になったのでやれやれと思った。それから数日たって、中隊は鎌倉へ移動する予定だと分隊長の話が伝えられた。

7. 外泊

出発前日の早朝、あれこれと準備に追われている最中、一人の下士官が、慌しく

部屋に入ってきて「仲二等兵はおるか」とせわしなく云うのである。私は、不安げに立ち上がり「仲二等兵であります」としゃちほこぼって答えた。「小隊長の命令だ。外出を許可する。明朝9時までには帰って来い。空襲などで電車が遅れた場合は、鎌倉の本部に追及せよ」と言われた。私は「仲二等兵ただ今より外泊します」と答えたが、分隊長も怪訝な顔をしていた。他の仲間も素知らぬ振りをしており、もたもたしていたら「早く行け」と分隊長から叱られた。大急ぎで支度をして、分隊備え付けの帯剣を締め、外泊許可証を受け取り、9時過ぎには、1週間前に出た我が家に再び到着した。家のものは、ビックリしていた。「もう帰ってきて何かあったのか」とげげんな顔をしたが、外泊第一号になったと説明したら納得した。それから直ぐ上の姉のところに行き、内地勤務で外地には行かぬことを告げて安心させた。丁度、少しばかりの砂糖が手に入ったとかで、ボタモチ（おはぎ）を作っていたので、幾つかを分けてもらい、小隊長への土産にした。翌朝、幸いにも空襲にもあわず門限には帰着した。

8. 鎌倉へ出発

すでに、内山少尉は出発したとのことで、先発の数人に同行して新橋駅で乗換え待ちをしている時であった。泥棒の引越しのような幾つもの大荷物をホームに積み重ね、誰もいない待合室に5、6人に入ったが、二等兵は私一人、辛気臭いので外へ出て荷物の傍らに立ち、ホームから山手線の内側を遠く眺めたが、見渡す限りの焼け野原、人影もまばらで、駅も森閑とした感じである。しばらく景色を眺めていると、待合室から臼井兵長が側にやってきて「仲、ご苦労だな」と云うのである。そしてポケットから、やおら煙草入れを取り出して1本差し出すのである。「吸えや」彼は中年の召集兵で、私が自発的に荷物監視に立っていたものと思ったらしい。私はもともと煙草を吸わないが、好意を無にするわけにもゆかず「有り難くあります」と、兵隊言葉で答え彼に火をつけてもらい、一服した。つまり前日の外泊といい、今回の煙草といい、軍隊の中身を、はしなくも実感することになった。乗換え乗り継いで鎌倉駅に到着、更に江ノ電にて腰越こしごえ駅で下車し、荷物を背負って数百メートルを歩き、鎌倉腰越出張所のとりの公会堂に着いた。公会堂は15坪ほどの南北に細長い平屋作りで南は雨戸、北側は腰高のガラス戸が入っていた。荷物をガラス戸の下に置き、先遣隊は銘々に畳の上にあぐらをかいたり、横になったりして一休みしていた。私も入口の隅に足を伸ばしてしばらく休んだが、奥の端にいた歳かさの上等兵が、私を睨むのである。つまり、二等兵のくせに古兵と一緒に休んでいるのはけしからぬということだったのである。それと気がついた私は、そうそうに立ち上がり、荷物を片付け、既に本隊も到着して、内山少尉も指揮をとっているかも知れぬ腰越国民学校に大急ぎで出かけ、少尉を探し、帰着の報告をした後、くだんのボタモチを差し出した。少尉は当番兵の不在で渋面をしていたが、急に笑顔にな

り「俺は法源寺を宿舎とするから仲もしばらく泊まれ」との命令であった。かくして、私の鎌倉の軍隊生活は、法源寺と国民学校とそれに中隊事務室（指揮班）が置かれた公会堂の間を行き来することになった。ちなみに外部や家族との連絡名称は、護東二二〇五三部隊、中川部隊、中村隊と呼称したが、このスキームの中には、表題の歩兵四百一聯隊に相当する部隊名はない。後で、ブロック図で示すが集団の中核となる聯隊は省略されている。おそらく防諜上、秘密保持のためと考えられる。部隊名先頭の護東二二〇五三も同じと思う。

護東二二〇五三部隊の構成

第五三軍司令部——第八四師団

（赤柴中将）

第四百十師団——歩兵四百一聯隊——中川部隊——中村隊

（物部中将） 歩兵四百二聯隊 （速射砲）

第三百十六師団 歩兵四百三聯隊

歩兵四百四聯隊

9. 鎌倉での生活

本隊が、国民学校に駐屯しても、中隊のスケジュールは未だ決まっていなかった。いずれ何処かで陣地構築作業が始まるに違いなかったが、命令のあるまでは校庭で基本教練を受けることになった。中隊は、軍隊経験者と未経験の補充兵だけで、現役兵は皆無のようであった。年令も25才から37才ぐらいまで、召集前の職業も多岐に亘っていて、精兵と云うにはほど遠い構成であった。従って、軍隊には常識の鉄拳制裁は、殆ど見かけず、私自身も在隊中に殴られたのは数回であった。つまり、銃剣を振り翳して突撃する血気盛んな若い兵士は、歩兵砲中隊には不要だったのである。未経験（未教育）の新兵は、上等兵が「気をつけ、休め、敬礼、単独行進」などの基本動作を速成教育したあとは作業に入り、法源寺の場合、裏の高台にまばらに生えている松の木を切り倒し、薪を作るのが日課の一つであった。

やがて、陣地構築（洞窟陣地作りの作業）命令が下達され、分隊ごとに腰越の奥、つまり山の地形の入り組んだ適当な場所に、海岸方向の道路に到達するように、後ろ側（裏側）から掘り進む、掘削作業が始められた。私は、小隊長のお供で三三号陣地と呼ばれる壕の現場にしばしば足を運んだが、やや広い山間の行き止まりの平地から少し高くなった場所から掘り始め、壕の貫通口は、多分道路に面していたものと思う。

10. 幹部候補生受験

この頃、幹部候補生を志願する有資格者は、申し出るようにとの中隊会報があり、

私を含め4人が志願した。志願資格は、中学卒業以上で学校教練合格証をもっていることであったが、有資格者の中には、将校になると服役年限が長くなるからと辞退する人もいて、結局、比較的年令の若い私と、そのほか3人は、30才前後の薬剤師であった。この人達の思惑は、前線の兵隊より後方の医務室勤務になれたらと考えて志願したのが本音らしかった。試験までには約1ヶ月の間があり、私は、将校当番の特権を利用して、昼間、法源寺の本堂や墓地の中で、典範令（軍隊教科書）を開き熟読することが出来た。試験は、深沢村の連隊本部で行われたが、私の受験番号は、多分聯隊で最後の161番であった。学科試験のあと、当中隊の4人が口頭試問の最終になり、私の前に受験した高松二等兵に、口頭試問で何を聞かれたかを尋ねたところ、大尉の試験官は「指揮官の心得を述べよ」だったという。やがて、私は呼ばれ、大尉の前に立ち「161番参りました」と大声で名乗ったが、試験官は、顔を上げないのである。もういい加減面倒になったのであろう「指揮官の心得を述べよ」とぼそぼそと云うのである。どうせ聯隊の末席でおざなりの試験だと思ったら、気が楽になり、軍人勅諭最初の文句を一語、一語に区切りを付け、力強く明朗に「忠、節、を尽くすこととあります」と返答した。とたんに大尉は、はっとしたように顔を上げて、私を見据えてたった一言「よし」と云った。それでお終いであった。中隊に戻り、指揮班事務室で普段意地の悪い蠅田兵長に顔を合わせたら「落幹、ご苦労様」と皮肉られた。

11. 当番兵の仕事

私は、あまり機敏でもなく、薪割りも下手なので少尉の心証も段々悪くなっていたようである。そこに事件が突発した。

将校当番の仕事は、日常作業とは無関係という特典はあったが、将校の「おさんどん」のほか、薪割りも加わり、更に古兵の洗濯も時々押し付けられた。「仲よ、日中は暇なのだろうから洗濯を頼む」と数人から襦袢（じゅばん）、袴下（シャツ、ズボン下）を山の如く置いて行くのである。家に居た時には、洗濯などは兄嫁まかせ、靴下も洗ったこともないのに、大量のそれも虱もたかっている洗濯物を眺めてしばし困惑した。そのとき、法源寺のおかみさんが囁いたのである。

「仲さん、私が釜を貸してあげるから、それでグズグズ煮て水濯ぎすれば楽よ」
薪はいくらでもあり

「そんな釜があるのでしたら宜しくお願いします」

「そこにあるじゃないですか。毎日お茶を沸かす釜が。後でちゃんと洗っておけば大丈夫よ」

「これは、小隊長も飲む湯を沸かしているのですが？」

「だって家に大きな釜は、それだけしかありませんよ」

「わかりました。やってみます」

お湯を沸かし、洗濯物を次々と放り込み煮ている最中、折悪しく内山少尉が帰ってきた。

「仲、何をしているのだ。その釜は湯沸し用ではないか」

私「無言」

空気が険悪になってきたとき、おかみさんが助け舟を出してくれた。

「私が仲さんに勧めたんですよ」

少尉「?????」

その後、暫くして私は、将校当番を免ぜられ、内山小隊第一分隊の分遣先である賀島部隊、綾田隊に派遣されることになった。新しい将校当番には、毛塚二等兵が任命された。彼は、東京赤坂の饅頭屋のご主人で、威勢が良くすばしこいところが、内山少尉のお気に召したようであった。

1 2. 綾田隊での生活

なお、中隊の統括本部である連隊は、5月2日軍旗を拝受して、歩兵第四百一聯隊と命名され、聯隊長は、平沢喜一大佐、聯隊本部は、深沢国民学校、所属師団は、百四十師団、師団長は、物部長峰中将、師団通称、護東二二〇五三、略称護東五三部隊、第十二方面軍に属し、軍司令官は、赤柴中将であった。尤もこれらは、戦後に判ったことで、一兵士に過ぎぬ我々には、中隊長以上は無縁の存在で、僅かに軍旗奉戴式の当日、聯隊長の声を遠くから聞いただけであった。転属になった私は、迎えにきた分隊長と一緒に腰越の中隊事務室を出て、江ノ電で鎌倉、大船と乗り継ぎ、下車、まず綾田隊長の陣地に出頭した。

分隊長「今度、当分隊に転属の仲二等兵であります」

綾田中尉は、茅葺きの粗末な小屋の椅子に頭を抱えて座り込んでいた。作業が、はかばかしく進んでいないのを悩んでいたのであろうか。分隊長の声につられて、上目づかいに私を眺めるのである。私は、節度をつけパット敬礼した。

「仲二等兵であります」

「よろしい、お前の敬礼はなかなか立派だ。中隊長は見ておるぞ」といってまた頭を抱え込んでしまった。

「さあ、行こうか」と分隊長に促され、宿舎の貞宗寺^{ていそうじ}についたのは、夜食の終わった時分であった。貞宗寺は、一寸した丘陵を背にした小高いところにあり、前の部隊が立ち退いて間がなく、当分隊の下番者（作業を交代した者）がいるだけで、静かだった。なお、分隊の構成員は、次のようになっていた。

分隊長	門間兵長（王子製紙の工員）
	室町上等兵（東京江戸川の瓦職人）
	山下一等兵（不明）
	田中二等兵（秩父鉄道の修理工）

酒井二等兵（不明）
三輪二等兵（東京杉並区の洗濯業）
妻川二等兵（喫茶店のボス）
石井二等兵（馬力運送業）
川島二等兵（農業） 東村山の同じ町の出身者
仲二等兵（公務員）

なお、二等兵は、全員未教育で最高年令者は37才だった。

1 3. 洞窟陣地掘り

この10人を二組に分け、昼夜12時間交替で、洞窟陣地掘りの作業に当たるのである。陣地の場所は、貞宗寺から往来（現、小袋谷藤沢線）に出て、藤沢方向に緩い坂を上り、道が平坦になった辺で左側の山に入り、暫く藪を分け入ると、高い場所に洞窟陣地の入口があった。掘削は、かなり進んでいて、掘り出した土が、洞窟の前に道となって堆積していた。洞窟の中には電線が引かれ、裸電球がぶら下がっていた。掘進の先端は、2メートル程の高さに馬蹄形に掘り進まれ、掘削に使う道具は、ツルハシだけである。ツルハシを使い丹念に削り平面を作って、更に前に掘り進むのである。私は、門間兵長の組になり、ほかに山下一等兵、川島二等兵とほか1名であった。作業の進行は、掘削した土をシャベルでモッコに乗せ、棒を通して、後先の二人で担ぎ、外へ運び出し、堆積残土の先端に捨てる作業の繰り返しである。ツルハシは重く、上手に扱うには体力も必要になり、非力な私は、困ったことになったと思ったが、実直な門間分隊長は、作業のノルマを厳命されているらしく、自分自らツルハシを振るって掘削にあたったので、私は、同郷の川島二等兵と組んで運搬役になった。川島は、私より背が高く後棒を引き受けてくれたので助かった。後棒は、モッコがぶらぶらしないように、両手でモッコを支える綱を握らなければならないが、いきおい、加重負担が先棒より大きくなるのである。従ってズルイ後棒は「ドッコイショ」と腰を挙げる際に、両手でモッコの綱をグイと前に押し出し、自分の負担が少しでも軽くなるようにするが、川島は、律儀にしっかりと手前に引き寄せたから私は楽であった。洞窟掘りは、7月下旬ころ道路方向に貫徹する見込みとなり完成した。陣地の番号は三桁だったように思う。掘削道具のツルハシは、先端が磨り減るので、高台の神社境内にフイゴを据えた兵隊の鍛冶屋に持って行き、トンテンカンと打ち直してもらおうのである。多分、アメリカ軍ならば、電動掘削機で効率よく掘り進めるころであろうが、何ともものどかな風景で、こんな調子でアメリカに勝てるのかなと思ったが、軍の上層部としては防衛線構築の一環として洞窟陣地は、最善の選択だったのであろう。

綾田隊は、若い現役兵中心の小銃中隊のようで、全員が九九式短小銃を装備していた。しかし、小銃の工作精度は、戦争末期のためか、かなり落ちていたように見

受けられた。貞宗寺には、しばしばこれらの若い兵士が宿泊していたが、私どもの分隊だけの時も時々あって、割りと気楽な生活であった。

1 4. 幹部候補生に合格

確か6月中旬ごろであろうか、分隊長より「お前、幹部候補生に合格したぞ。うちの中隊は全員合格、みんな歩兵だ。中隊長も喜んでおられた」と告げられた。そして、それから2週間もたったある日、中村中隊長が、下士官を連れてひょっこり陣地にやって来たのである。作業の様子見かたがた、正式に私の合格を知らせにきたものと確信したので、中隊長の前に立ち、形どおり、気を付け挙手の敬礼をして「申告します。仲二等兵は、6月×日付けをもって幹部候補生に採用され、上等兵の位を与えられました。謹んで申告いたします」と威儀を正して報告した。中隊長も答礼してあと「ご苦労。上等兵の階級章を忘れてしまっただけで悪かったな」と言い訳をした。従って、私は、中隊事務室から上等兵の階級章と幹部候補生徽章が届くまで、一つ星のままだった。7月上旬ごろだったと思う。幹部候補生の任命式が、玉縄国民学校で行われた。全員で4～50名が整列したような気がしたが、どのように式が進行したか記憶にない。しかし、解散の間際に一人の中尉が「俺も幹部候補生の出身だ」と云ったのを覚えている。つまり、士官学校卒業の正規軍人が不足逼迫して、下級将校は、幹部候補生出身者を採用して穴埋めしたのである。

1 5. 軍歌演習

こんな事があった。ある時、現役中隊の若者と混じって軍歌演習をしていた。道路より一段高い畑に幹部候補生上りの少尉が立ち、軍歌の指揮をしていたが、その時、乗馬の見習士官がやってきた。階級は曹長である。彼は、指揮者の脇に立ち「以後本隊の指揮は、鳴戸見習士官が取る」と宣言した。少尉がいるのに「なぜ？」と隊列の兵隊は、一斉に彼に注目した。それもその筈で、彼の襟には士官候補生徽章(士官学校卒)が付いていたのである。つまり、正規教育を受けた軍人であるから、せいぜい大尉止まりの速成の臨時将校とは違うということだったのである。

歌われた軍歌には、次のような「切り込み隊の歌」などが熱唱された。

「命一つと掛け替えに百人千人切ってやる

日本刀と銃剣の切れ味知れと敵陣深く今宵また行く切り込み隊」

1 6. 貞宗寺での生活

7月下旬は、作業がなく8月1日藤沢の^{ゆぎょうじ}遊行寺に移動するまで、約1週間貞宗寺で骨休み休暇となった。昭和20年の夏は暑く、他の兵隊もやっても来ず、寺の周囲を歩いたり昼寝をしたり、ゆっくりと命の洗濯をした。昼寝をしていると庭先で、小綬鶏が、木の葉を震わすような大きな声で鳴き、夜ともなれば、3時間ほどで帰

れる我が家のことがしきりに思い出され、勝ち目のない戦争を何時まで続ける積りなのか、悲観と絶望が交錯した。貞宗寺は、奥さんと私どもと同年代の娘さんの二人暮らしで、娘さんは、女学校の先生と云う話だった。そして、若い将校連が、時々、ご機嫌伺いにやって来るといふ噂であった。寺に宿泊中、葬式があり、裏の段々墓地に奥さんが、松明を点していそいそと案内していた。戦争末期、収入の乏しい時に、なにがしかのお布施があったのであろうか。

17. 遊行寺での生活

のんびりとして里心の付いた休暇は、瞬く間に過ぎて遊行寺に移動してみると、そこは本堂を埋め尽くす大部隊で溢れていた。しんがりに到着した私どもの分隊は、本尊の直ぐ前の一番窮屈な場所を割り当てられ、毎朝の勤行を目の前で拝聴する羽目になった。1日から2日にかけて八王子に空襲があり、幹部候補生は、ラジオのある場所から部隊まで、^{ていでんれい}逋伝令役に駆り出された。遊行寺では、毎朝部隊の点呼が行われ、体操の後、屈強な兵士による、切込みの模範演技などが実施された。身のこなしの素早しこそうな軽装の下士官が、背中に抜き身の軍刀を隠し持ち、境内の隅から本堂脇にしつらえた銃剣で刺突練習用の人型に、物影などを利用しながら隠密に近づき、人型を相手に切り結んだあと、最後に止めの一突きをいれるのである。私どもの感想としては「あんなに巧くいくものかなあ」というのが実感であった。分隊は数日後、新しい陣地構築のため遊行寺から南に道路を渡り、現在の^{だいぎり}大鋸と呼ばれるあたりの斜面に^{なわぼり}繫止をして、ツルハシを打ち込み、作業を始めたところで掘削中止の命令を受領し、腰越の本隊に復帰した。6月末、沖縄が陥落、アメリカの本土侵攻の脅威がより早くなって水際陣地を至急に強化する必要に迫られたためであろうか。防衛軍は武器、弾薬不足の中で、戦備状況を準戦争状態（乙戦備）から戦争状態の甲戦備に引き上げ戦闘準備に狂奔することになる。このため、足手纏いになりそうな兵隊は、帰郷させられた。私の分隊では、妻川二等兵が昔の盲腸手術の予後が悪かったとかで兵役免除となり、嬉しさを堪えて除隊していった。中村隊では、外に、3名が召集解除となった。この頃になって、やっと歩兵砲中隊の主戦兵器である37mm速射砲が、たった一門支給になり、公会堂の庭先に据えられた。元来は車輪付きなのだろうが、木枠の中にぶらさがっていて奇妙な形であった。この九四式37mm対戦車砲は、敵の戦車を撃つために開発されたのであるが、既に時代遅れの代物で、二階建てといわれる大型のアメリカM4戦車には歯が立たず、正面から撃っても弾は跳ね返ってしまうお粗末さで、専ら敵の上陸用舟艇か人員の狙撃が目標であった。しかし、それも一発撃てば、物量豊富な敵から数十倍のお返しがあり、たちどころに沈黙せざるを得ない実情であった。従って、攻撃方法の主体は、爆薬を抱えて戦車に体当たりする肉弾攻撃に頼るほかになく、公会堂前や校庭の広場に、ベニヤ板を戦車の大きさに切り抜いて立て、これに向って爆薬に見立て

た砂袋などを抱いてぶつかる訓練が、繰り返行われていた。傑作なのは、リヤカーに戦車の形をしたベニヤ板を括りつけ兵隊が引き、これに体当たりする訓練で、とても正気の沙汰とも思えずマンガチックでさえあった。しかし、兵隊は真剣そのものであった。8月に入ると海岸に近い洞窟陣地の掘削と整備は終了したのであろうか、訓練と雑用ばかりとなり、私の場合、鎌倉市内に2,3名の兵隊を連れて朝鮮人御者の引く牛車と、木材の引き取りに出かけたことがあった。電車通りから海岸通りに抜け、海を見ながら鎌倉に向っていくと、波打ち際を歩いていく一人の兵隊から声をかけられた。「オーイ、仲どこに行くのだ」見ると中尾伍長であった。彼は、兵長から進級して間もなく、機嫌が良かった。本部付きになったとかで短剣でなく、長剣を帯びていて、それが余計に嬉しうであった。「鎌倉に材木を取りに行くのでありまーす」と威勢良く返事をしたが、波打ち際と道路の間で話ができるほどひと気が全くないのである。それから、稲村ガ崎の切通しを抜け、由比ガ浜を眺めながら鎌倉に入ったが、中尾伍長のほか、人っ子一人にも会わなかった。夏の盛りだというのに、海にも道路にも人影が全くないのである。横須賀線のガードを潜った右側に、材木屋があって牛車に木材を積み終わると丁度昼ごろになった。急いで帰っても、又次の仕事は待っているはずである。そこで、材木屋と道路反対側の塀のかかったしもた屋風の家に頼み、人目につかぬよう塀の内側で昼食をとり、ゆっくり休息してから帰途についた。帰り着いたのは、3時ごろであったろうか。係りの下士官から「遅かったな」と云われたが「積み込みに時間がかかりました」とかいい加減な申し開きでごまかした。ともかく、三ツ星(上等兵)の威力はかなりあって、作業そのものは、二等兵当時とさして変わらないのであるが、周囲の見る目が違うのである。最低1年以上かけて昇進する正規の上等兵に比べると、座金の上等兵(幹部候補生の記章は丸い座金の上に星がついていてそう呼ばれた)と陰口され馬鹿にされたが将来、自分たちの上級者になって命令する立場になるやも知れず、兵隊達にすれば、一目置かざるを得なかったのである。理由は忘れたが、このころ、私は、腰越の電停付近の石田電気店に出入するようになっていて、8月6日、店に配達されたタブロイド版のたった1ページの新聞から、広島に敵の新型爆弾が投下され、多数の死傷者が出たこと、人体に被害を少なくするには、白い着衣が有効であることなどを記事から知った。しかし、押されっぱなしの戦況では、又かと思う程度で特に感想はなかった。

18. 終戦

8月15日、晴天であった。中隊事務室のラジオは、朝から正午に天皇陛下の重大放送があることを繰り返し告げていたが、兵隊達はいたって気楽であった。ソビエトが、8月9日に参戦したので、天皇陛下がもっとしっかりやるように放送するのだろうと想像する程度であった。それというのも、鎌倉の街中に爆弾投下も機銃掃

射もなく、兵隊は、敵から直接攻撃された恐怖感も緊張感もなく、のんびりとしていたからであろう。この点、私の住んでいた東村山は、近くに幾つもの航空機工場があって、アメリカ軍の最初の空襲（昭和19年11月24日、杉並区中島飛行機荻窪発動機製作所に、約100機のB29が一万メートルの高度から250キロ爆弾を投下して50発ほどが、命中して工場の設備の一部と60人前後の死者がでた）があり、2月16日の白昼には、東大和市の日立製作所に太平洋戦争中、最大規模のグラマンF6Fヘルキャット艦載機を主力とする、延べ1,000機による空爆と機銃掃射があった。日立は、私の勤務先から2キロメートルほどしか離れておらず、爆弾の炸裂音と機銃掃射の轟音は、恐怖そのものであった。軍隊に入ってから、5月29日、腰越国民学校校庭の南西の方、横浜空襲に向かうB29の大群を眺めたが、その日の午前中の晴天は、空襲が始まるとやがて曇りとなり、その雲の下をびっしりと翼が触れ合うほどの大編隊が、次から次と北に飛んで行くのであった。

しかし、鎌倉には、敗戦までさほどの被害を受けることもなく、空襲の恐ろしさを兵隊は体験していなかったのである。従って私は、ラジオ放送を聞いても気楽な気分でした。前日同様、小動の鼻あたりの傾斜のきつい山に杉丸太の伐採に出かけた。山に入ると、アメリカ軍の飛行機が、日本の対空レーダー攪乱のためばら撒かれた10センチほどの帯状の長さに切られた大量の錫箔が、あっちこちの木の枝に引っかかっていた。材木は、切り倒して麓まで引き下ろし、道端に積み上げるのであるが、作業中どうも、朝聞いたラジオ放送が、何とも、私には引っかかって仕方がなかった。そこで、山から下りた時に水を飲んでくるからと断り、数百メートル離れた農家の庭先に入って行ったのである。

農家の縁側には魂の抜けたようなぼんやりした顔の二人ほどの兵隊が、座ってこちらを見ていた。そして、私に「日本は負けたよ」と云った。畳の上に乗せられた古いラジオからは、雑音の多い耳慣れない独特の抑揚のある声が流れていた。「天皇陛下の放送だよ」と彼は神妙だった。私は、とたんに「これで召集解除になる」と急に嬉しくなった。情けない幹部候補生と思われるかもしれないが、勝ち目のない戦争に、もともと社会人である私どもが駆り出されたのだから、正規の軍人と意識の差があっても仕方がないと思うことで納得した。大急ぎで作業現場に戻り「戦争は負けたぞ」と大声で山の上に向かって怒鳴った。ぞろぞろとみんなが下りて来て「本当か？」と云うのである。「今、その農家のラジオで天皇陛下が放送されたのをチャンと聞きました」

「それじゃ、もう仕事は取りやめだ」作業責任者に将校がいなかったこともあって「みんな、ゆっくり休んで帰ろうや」兵隊は呑気なものである。

道路に切り出した丸太を整理して中隊本部に帰ったが、周囲の者も特に狼狽している様子も混乱もなく、流石は、年配者の多い集団であった。日ならずして江の島棧橋に近い竜口寺に移動して、裏山の洞窟から砲弾を運び出し、アメリカ軍に引き

渡す準備をした。奥のほうから手渡しで運び出して、外に並べ整頓したが、以外と大量にあった。弾の多くは迫撃砲弾で、それも昭和15、6年製が比較的目に付いた。迫撃砲の弾は、上方から落下するタイプであるから、平地戦ならともかくジャングルなどの密林では使いにくかったせいであろうか。2日、3日弾運びをしたあと、再び元の中隊本部に戻り、解散したが解散式はなかったように思う。敗戦の軍隊に、そのような儀式は必要なかったのであろう。ただ、マッカーサー連合軍総司令官が、8月下旬厚木に到着するので、飛行場警備の兵隊を派遣するため、中隊にも一個小隊の割り当てがあり、私は、年の若い元幹部候補生ということで、いの一に指名されてしまった。

敗戦の軍隊に居ても仕方ないし勤務先にも仕事があるし、実は、帰りたかったのであるが、今更断るわけにも行かず、夜の残留者の酒盛りで小隊長（小磯少尉が残ることになっていた）の注いでくれた酒をまずそうに飲んでいたら、中隊長が「仲、がっかりするな」と慰めてくれた。しかし、私は、戦争に負けたことより、帰宅できなかったことがっかりしていたので中隊長は勘違いしたらしい。外は激しい雷雨で未だ電灯も点かず、蠟燭の中でお互いの人影を見ながらの酒宴であった。

残留者のほかは、徒歩で東京の中島飛行機荻窪工場に向つたらしいが、私どもは、自動車で、ひとまず瀬谷に到着して、真ん中が通路で両側が一段高くなった畳敷きの古い兵舎風の建物に落ち着いた。もうこの頃は、軍規もかなり緩んでいたようで、酔っ払った下士官が、中折れ帽子を被って着物を着流し、くだを巻く始末であった。残留組（飛行場警備隊）は、更に藤沢の日本精工の工場に移動して、ここからまた最終目的地の厚木に移っていったが、私は、足が浮腫み（栄養失調のせいらしい）荷物の留守番となり、厚木には行かず、警備が終った時点で残留隊全員は、愛甲石田の小学校に自動車で移動した。そして、その途中でアメリカ軍のトラックとすれ違ったのであるが、その場所はどの街道だったか定かでないが、両方から木立がせまるトラックがやっと行き違えるくらいの道幅だった。トラックの荷台には2、3丁の小銃と帯剣があったが、隅に置いてあるだけだった。その砂利道をしばらくゴトゴト走っていた車が、予告もなしに止まってしまったのである。どうしたのかなと荷台から乗り出してみると、なんと小銃を銘々に持ち、分捕った日本車のトラックの荷台には20人ほどのアメリカ兵が、こちらを眺めているではないか。彼らの表情は、緊張こそしていたが、奇妙な落ち着きがあった。占領軍としての自信であろうか。その様子を見てホッとして、また荷台に座り込んでしまった。その後も幾度かアメリカ兵を見たが、その姿からは、あの時のような緊張感を伺い知ることにはなかった。やがて双方の車は動き出したが、なんでもガソリンのストックがないかと聞いたらしい。愛甲石田は、小学校が解散の場所となり、持ちきれない程の軍放物資を担いでふるさと東村山駅に着いたのは、9月9日の昼ごろであった。

参考資料

第五三軍の構成

第五三軍司令部（断）伊勢原

軍司令官 赤柴八重蔵中将（陸士24期）

参謀長 小野田 寛少将（33期）

高級参謀 田中 忠勝大佐（39期）

独立混成第三六聯隊 武藤 東中佐

独立混成第三七聯隊 植田 齊大佐

（この両聯隊については資料が見当たらなかった）

第十一砲兵司令官 長林勝由大佐（28期）

砲兵情報第五聯隊 佐々木吉雄少佐

野戦重砲第二聯隊 石田政吉大佐

当時の兵隊仲間の話では、断部隊が来ているとの噂でした。つまり砲兵が進出して来たということでしょうか。

電信第五十聯隊 道野四郎少佐

以上が司令部直属だったと思います。

第八四師団（突）小田原

師団長 佐久間為人中将（22期）

参謀長 杉本和二郎大佐（29期）

歩兵第百九十九聯隊 栗栖 晋大佐

歩兵第二百聯隊 川上芳雄大佐

歩兵第二百一聯隊 松本鹿太郎大佐

昭和19年7月、姫路の留守第五四師団を基幹に編成されました。小田原、国府津方面の沿岸防備を担当し、4月第五三軍隷下で水際決戦の準備中に終戦を迎えました。三個の歩兵聯隊は、いずれも昭和19年7月姫路にて軍旗を拝受して動員完了、昭和20年4月以降の大量根こそぎ動員と違い、現役兵も多かったようで、当時としてはかなりの武器も整備された精鋭部隊と考えられ五三軍の中核でした。

なお、師団には野砲兵第八四聯隊 川崎盛利大佐

工兵第八四聯隊 釜付敬二少佐

輜重兵第八四聯隊 小林吉二大佐

の特科聯隊が附属し師団組織としてよく纏まり相模湾迎撃の決戦師団とされていました。

第百四十師団（護東）鎌倉

師団長 物部長峰中将（26期）

参謀長 吉村蔵五郎中佐（35期）

歩兵第四百一聯隊 平沢喜一大佐 護東第二二〇五三部隊 深沢村国民学校

歩兵第四百二聯隊 鈴木薫二大佐 護東第二二〇五四部隊 千畳敷山

歩兵第四百三聯隊 菅原甚吉中佐 護東第二二〇五五部隊 藤沢

歩兵第四百四聯隊 立花啓一大佐 護東第二二〇五六部隊 藤沢

昭和20年2月、留守近衛第二師団を基幹として沿岸配備兵団を編成し、4月に第五三軍隷下に入りました。鎌倉、藤沢付近の相模湾沿岸防備を準備、8月、水際撃滅態勢に移行しようとした時、終戦となりました。

師団は、歩兵聯隊のみの構成で各聯隊の編成地は、それぞれ順に東京、甲府、佐倉、溝の口でした。軍旗の拝受は、5月か6月に行われ第四百一聯隊（護東第二二〇五三部隊）の場合、5月中旬、深沢村国民学校にて奉戴式が実施されました。

現役と補充兵の混成部隊で、鎌倉に駐留したのは四百一聯隊のみと思われますが、場所を特定するのは難しい。

第三百十六師団（山城）伊勢原

師団長 栢 徳中将（23期）

参謀長 熊谷則正大佐（30期）

歩兵第三百四十九聯隊 神宮祐太郎中佐 山城第二八二二七部隊 茅ヶ崎

歩兵第三百五十聯隊 高村慶之助中佐 山城第二八二二八部隊 平塚

歩兵第三百五十一聯隊 堀田 俊中佐 山城第二八二二九部隊 平塚

昭和20年5月、補充兵主体にて京都並びに敦賀で編成、第五三軍の戦闘序列に入りました。相模川河口で第八四師団の東側に位置し、相模湾の対上陸作戦に参加する計画でしたが、編成未完のため、先遣隊が着手したとき終戦となりました。従って軍旗の拝受は8月にずれ込んだらしく部隊組織は完了しませんでした。数人の部隊幹部のほか、いわゆる陸士卒は皆無でした。

歩兵聯隊のほかには

独立混成第百十七旅団 平櫻政吉少将

独立戦車第二旅団 佐伯静夫大佐（28期）

戦車第二聯隊 藤井繁雄中佐

戦車第四一聯隊 小野寺孝男少佐

習志野の戦車二聯隊が移動し、更にその留守隊を改編成して四一聯隊としたが両聯隊も戦車の現物を入手していません。つまり、戦車定数がない部隊？（茅ヶ崎市史の座談会記事）」でした。なお、本土決戦用として性能はともかく大小1,500輛が準備されたといわれています。

以上の三個師団五三軍となります。

このような兵力配備からしますと茅ヶ崎、平塚海岸が、一番弱体で片瀬、鎌倉海岸には兵器はともかく人数だけは揃っていたものと考えます。どちらも沿岸の貼り付け部隊で敵が上陸した場合、本隊が到着するまで暫くの間、支えるのが役目だったとされています。つまり、小田原方面の八四師団や内陸の精鋭部隊、更には関東に配備されていた本土地上軍の最新鋭であり、大本営の総予備ともいえるべき第三六軍（名称、富士・軍司令部、浦和）が、戦闘配備につくまで陣地を死守するのが沿岸部隊に与えられた使命でした。

しかし、物、量ともに隔絶するアメリカ軍にやがて圧倒、殲滅されるのはさほどの時は必要なかったものと思います。尤もそれ以前に南九州攻略（オリンピック作戦）が実施されれば、日本の戦力は総て枯渇して降伏せざるを得なかったものと考えます。

参考文献

平成元年	日本陸軍連隊総覧（歩兵編）	新人物往来社
平成5年	日本陸軍総覧	新人物往来社
平成6年	陸海軍学校と教育	潮書房
平成7年	本土決戦と終戦	潮書房
平成12年	本土防衛戦	潮書房
平成12年	証言でつづる終戦秘史	秋田書店
	そのほか	

鎌倉・太平洋戦争の痕跡

発行 鎌倉市中央図書館

鎌倉市御成町20-35

編集 鎌倉市中央図書館近代史資料収集室

CPCの会（湘南鎌倉生涯現役の会分科会）

発行日 平成16年3月

※令和2年4月 図書館HP掲載